高知県埋蔵文化財調査報告書 第26集

土佐国衙跡発掘調査報告書
第9集

―― 金屋地区の調査 ――

平成元年3月

高知県教育委員会

土佐国衙跡発掘調査報告書
第９集

―― 金屋地区の調査 ――

平成元年３月

高知県教育委員会

序

高知県教育委員会の主要事業として、土佐国府跡の発掘調査を開始して以来本年度で９ヵ年が経過しました。

この間の発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての周辺官衙群と考えられる多数の掘立柱建物跡や溝跡など重要な遺構が検出され、国府域の様相解明に多くの進展をみることができました。

本年度は、これまでの成果をふまえた上で政庁跡を確認すべく、金屋地区を対象地とし、調査が行われました。その結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡及び塀跡等を検出することができました。さらに、官衙に関連するであろう全国に類例のない遺構も確認されております。

本書は、昭和63年度の調査成果をまとめたものであり、各方面で活用され、文化財保護と研究の一助となれば幸です。

最後に、調査にあたり御指導いただいた文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、御教示をいただいた先生方、終始御配慮下さった南国市教育委員会ならびに地権者の方々、そして調査に御協力下さった地元比江地区及び「国府史跡保存会」の皆様方に深く感謝の意を表し御礼申し上げます。

平成元年３月31日

高知県教育委員会

教育長　西森　久米太郎

例　　言

1　本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて、昭和63年度に実施した土佐国府跡発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）の概要報告である。

2　発掘調査は、南国市教育委員会の協力と、山中敏史氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官）の指導を受けて実施した。

3　発掘調査体制は次のとおりである。

調査顧問　　岡本健児（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会々長）
調 査 員　　廣田佳久（高知県教育委員会文化振興課主事）
庶　　務　　楠瀬陽介（　　〃　　〃　埋蔵文化財班長）

4　本書の執筆、編集は廣田が行った。執筆に際しては、調査顧問岡本健児氏の指導を得た。

5　遺構については、ＳＴ（竪穴住居址）、ＳＢ（掘立柱建物跡）、ＳＫ（土壙）、ＳＡ（塀跡）、ＳＸ（性格不明遺構）で標示し、遺構番号は『土佐国衙跡発掘調査』第１～８集からの通し番号である。

6　出土遺物の図版番号については、実測図の番号と一致している。

7　遺構の測量にあたっては、昭和58年度に設置した公共座標第Ⅳ系による基準点を使用し実施した。なお、標高は海抜高である。

8　報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。方位（N）は真北である。

9　調査にあたっては、地権者の方々をはじめとする地元比江地区及び南国市教育委員会の御協力をいただいた。また、現地作業員並びに整理作業員の皆様の御援助に対し、記して感謝する次第である。

10　整理作業にあたっては、ＳＸに関連する資料を小森哲也氏（財団法人栃木県文化振興事業団）から提供していただいた。記して謝意を表する。

11　出土遺物、その他の資料は、高知県教育委員会において保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ　調査概要 …… 5

1　調査方法と経過 …… 5

2　層序 …… 6

3　遺構と遺物 …… 7

(1)　包含層出土遺物 …… 7

(2)　弥生時代 …… 8

(3)　古墳時代 …… 11

(4)　古代 …… 13

Ⅲ　総　括 …… 33

挿　図　目　次

第１図　土佐国府跡位置図
第２図　土佐国府跡地名図
第３図　土佐国府跡第１～22次発掘区設定図
第４図　発掘区設定図
第５図　発掘区セクション図
第６図　遺構全体図
第７図　調査区北端部セクション図
第８図　ＳＫ－79・80
第９図　ＳＫ－81・82・84・85
第10図　ＳＴ－26
第11図　ＳＢ－56
第12図　ＳＫ－88（集石検出状態）
第13図　ＳＡ－16
第14図　ＳＸ－１・２、Ｐ－１
第15図　ＳＸ－３
第16図　ＳＸ－４
第17図　ＳＸ－５、ＳＫ－88
第18図　ＳＸ－６
第19図　ＳＸ－７・８
第20図　ＳＸ－９
第21図　ＳＸ－10・11
第22図　ＳＸ－12
第23図　ＳＸ－15
第24図　遺物実測図１
第25図　〃　２
第26図　〃　３
第27図　〃　４
第28図　〃　５
第29図　〃　６
第30図　〃　７
第31図　〃　８
第32図　〃　９
第33図　〃　10

表　目　次

第１表　土佐国府跡発掘調査一覧表（第１～22次調査）
第２表　竪穴住居址計測表
第３表　掘立柱建物跡計測表
第４表　土壙計測表
第５表　塀跡計測表
第６表　性格不明遺構計測表
第７表　性格不明遺構規模分布表
第８表　遺物観察表１～14
第９表　杯、小杯法量分布表（ＳＸ－９～11）
第10表　杯法量分布表（その他の遺構）
第11表　皿、小皿法量分布表（遺構）

図　版　目　次

図版１　Ａ区調査前全景（北より）
　　Ｂ・Ｃ区調査前全景（北より）
図版２　試掘トレンチ遺構検出状態(北より)
　　試掘トレンチ遺構検出状態(南より)
図版３　試掘トレンチ遺構検出状態(東より)
　　試掘トレンチ遺構検出状態(西より)
図版４　Ａ区遺構検出状態（北より）
　　Ａ区遺構検出状態（北より）
図版５　Ｂ区遺構検出状態（東より）
　　Ｃ区遺構検出状態（東より）
図版６　Ａ区遺構完掘状態（北より）
　　Ａ区遺構完掘状態（北より）
図版７　Ｂ区遺構完掘状態（東より）
　　Ｃ区遺構完掘状態（東より）
図版８　Ａ区北端部礫層検出状態（西より）
　　Ａ区北端部礫層検出状態（南より）
図版９　ＳＴ－25（北より）
　　ＳＴ－25（北より）
図版10　ＳＴ－26（西より）
　　ＳＴ－26（西より）
図版11　ＳＴ－27（北より）
　　ＳＴ－27（北より）
図版12　ＳＢ－56（北より）
　　ＳＢ－56（北より）
図版13　ＳＢ－57（北より）
　　ＳＢ－58（北より）
図版14　ＳＡ－16（西より）
　　ＳＡ－16（南より）
図版15　ＳＫ－79（北より）
　　ＳＫ－79（西より）
図版16　ＳＫ－80（東より）
　　ＳＫ－81（東より）
図版17　ＳＫ－82（東より）
　　ＳＫ－84・85（北より）
図版18　ＳＫ－88集石検出状態（北より）
　　ＳＫ－88（東より）
図版19　ＳＫ－88（北より）
　　ＳＫ－94（西より）
図版20　ＳＸ－１～７（西より）
　　ＳＸ－１～７（東より）
図版21　ＳＸ－１・２、Ｐ－１（北より）
　　ＳＸ－１・２、Ｐ－１（西より）
図版22　ＳＸ－１（北より）
　　ＳＸ－２（北より）
図版23　ＳＸ－３（北より）
　　ＳＸ－４（北より）
図版24　ＳＸ－５、ＳＸ－88（西より）
　　ＳＸ－６（北より）
図版25　ＳＸ－７（北より）
　　ＳＸ－７（北より）
図版26　ＳＸ－８（東より）
　　ＳＸ－９（北より）
図版27　ＳＸ－10・11（東より）
　　ＳＸ－12（北より）
図版28　ＳＸ－13・14（東より）
　　ＳＸ－15（北より）
図版29　ＳＴ－25、ＳＫ－79・88・93遺物出土状態
図版30　ＳＫ－79、ＳＸ－２～６遺物出土状態
図版31　ＳＸ－６・７・９遺物出土状態
図版32　ＳＸ－９・11・14、Ｐ－１遺物出土状態
図版33　第Ⅱ層出土遺物
　　第Ⅱ層出土遺物

図版34　第Ⅱ層出土遺物
　　ＳＴ－26出土遺物
図版35　ＳＴ－26出土遺物
　　ＳＴ－26出土遺物
図版36　ＳＴ－26出土遺物
　　ＳＸ－３出土遺物
図版37　ＳＸ－６出土遺物
　　ＳＸ－９出土遺物
図版38　ＳＸ－６・７・９・13・14出土遺物
　　ＳＸ－11、ＳＫ－94出土遺物
図版39　ＳＸ－９出土遺物
　　ＳＸ－11出土遺物
図版40　第Ⅱ層出土遺物
　　ＳＸ－１・６・15出土遺物
図版41　出土遺物１
図版42　〃　２
図版43　〃　３
図版44　〃　４
図版45　〃　５
図版46　〃　６
図版47　〃　７
図版48　〃　８
図版49　〃　９
図版50　〃　10
図版51　〃　11
図版52　〃　12
図版53　〃　13
図版54　〃　14

Ⅰ　発掘調査にいたる経過

土佐国府跡の発掘調査（重要遺跡確認緊急調査）は９年目であり、事業費500万円、発掘面積は704.1㎡であった。

本年度の発掘調査は、昨年度と同じく高知県教育委員会が事業主体となり実施した。調査対象地は、昨年度検出された溝跡（ＳＤ－49）の規模、性格を確認する意味で、昨年度調査区の北側、金屋地区ホノギ名カナヤノ後及び外杉とした。この地区は、標高約17.5ｍを測る水田で昨年度の調査区との比高差約0.2ｍである。北側は現地形で約1.3ｍ高くなっており、丁度永源寺の参道に該当する。また、約200ｍ北の山腹には日吉神社が鎮座する。

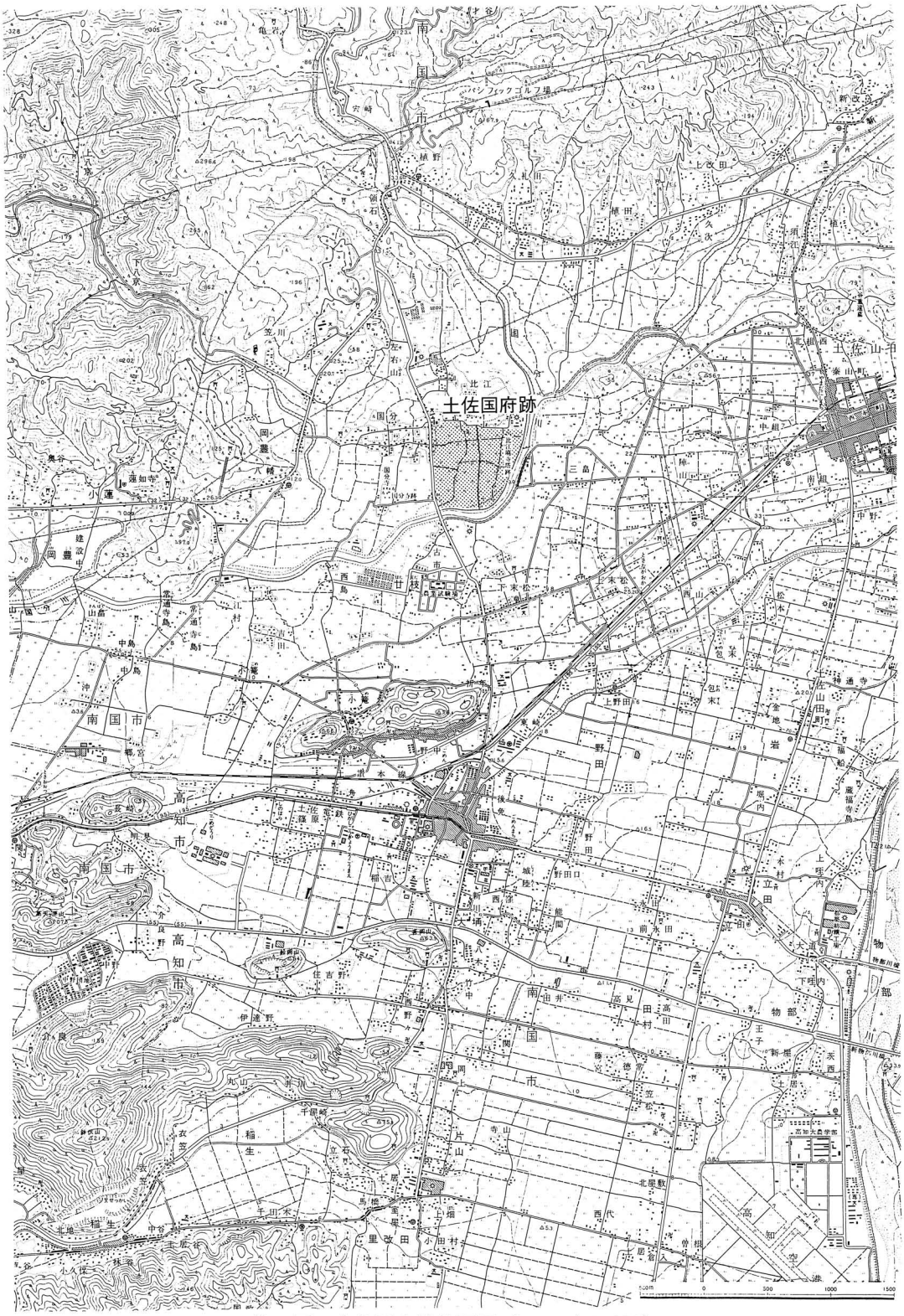
調査は、Ａ区（西側）から実施し、引き続き野菜の取り入れが終わってまもないＢ地区とＣ地区に移った。調査期間は、測量も含め昭和63年10月12日から昭和63年12月10日までであった。

調査にあたっては、南国市教育委員会の斡施で土地所有者である小松栄一氏及び小松斎氏に調査の快諾をいただいた。また、調査地周辺の土地所有者及び比江地区の方々、「国府史跡保存会」にも多大な御協力をいただき、ここに記して謝意を表したい。

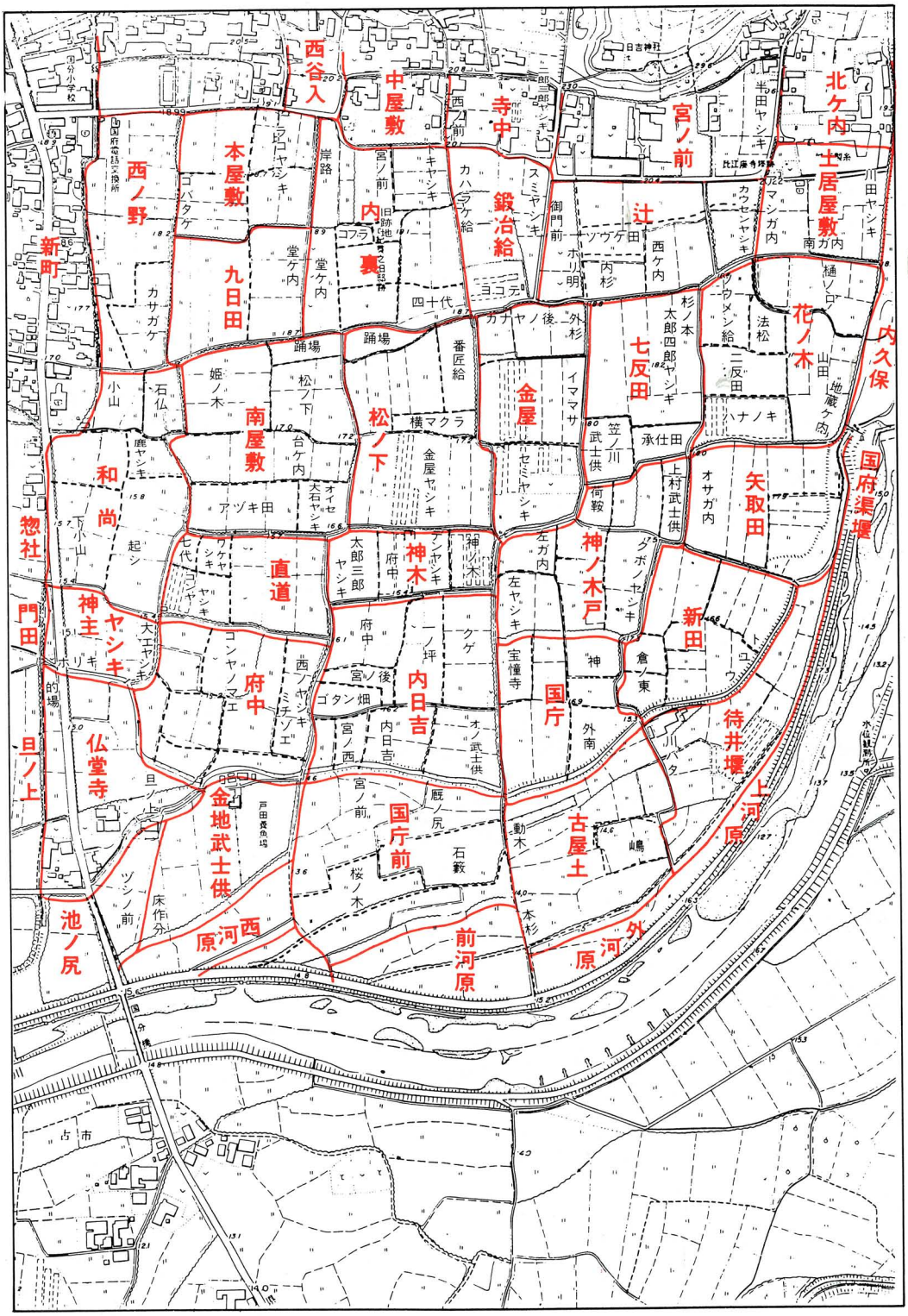
第１表　土佐国府跡発掘調査一覧表（第１～22次調査）

調査次数	期間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				掘立柱建物址	溝跡	その他	
1	52. 2. 1 ～ 52. 2. 3	新ラ田	緊急発掘調査（市道改良工事）			柱穴	緑釉陶器
2	54. 1.27 ～ 54. 2. 1	松ノ下	同上	2（中世）		柱穴	
3	54. 2.13 ～ 54. 3. 1	太郎三郎屋敷	同上	3（平安２）	2	土器溜 1	黒色土器・瓦器 土師器・鉄釘
4	54. 4.20 ～ 54. 5. 2	神ノ木戸	重要遺跡確認調査		3（奈良末１・平安中2）	土壙 3	円面硯・黒色土器 須恵器・土師器
5	54. 8.20 ～ 54. 9.12	宮ノ西	緊急発掘調査（市道改良工事）	2（平安末～鎌倉）	4	土壙 2（奈良末）	円面硯・転用硯 墨書土器 風字硯・緑釉陶器
6	54.11. 6 ～ 54.12.11	クゲ国庁	重要遺跡確認調査	1（奈良末）	2（平安前 1）	柱穴（中世）	円面硯・青磁 白磁
7	55. 9.28 ～ 55.10. 4	クボノヤシキ荷鞍左が内	緊急発掘調査（市道改良工事）		1	土壙 1	須恵器・青磁 常滑

調査次数	期間	調査地区	調査の種類	検出遺構			出土遺物
				掘立柱建物址	溝跡	その他	
8	55.11.17 ～ 55.12.15	ダイリ	重要遺跡 確認調査	5 （平安 3）	1	竪穴住居 3 貯蔵穴 2	須恵器（横瓮） 緑釉陶器
9	56. 9.10 ～ 56.11. 4	内日吉のうち 府中	同上	7	5	竪穴住居 2 土壙 7	円面硯 緑釉陶器
10	56.10. 8 ～ 56.10.19	神ノ木 内日吉	緊急発掘調査 （市道改良工事）		1	柱穴	
11	57. 9.17 ～ 57.11. 6	内日吉 太郎三郎屋敷	重要遺跡 確認調査	11 （奈良 6・ 平安 2）	13 （奈良 5）	竪穴住居 2 土壙 16	円面硯・瓦器 青磁・白磁
12	58.10. 5 ～ 58.11. 7	内裏 堂ヶ内	同上	6 （奈良～平安）	1 （6C末～ 7C初）	竪穴住居 5 土壙 5	須恵器・土師器
13	58.11.22 ～ 58.12.10	内日吉 クゲ	同上	2 （奈良）	2 （中世）	井戸 1 土壙 8	須恵器・瓦器
14	59.10. 1 ～ 59.11. 1	一ノ坪	重要遺跡 確認調査	5 （奈良～平安）	3	竪穴住居 1 柵列 5 （奈良～平安）	須恵器・土師器
15	59.11.16 ～ 59.11.22	鍛冶給	同上	1 （奈良～平安）		土壙 1	〃
16	59.11.30 ～ 60. 1.10	松ノ下	同上	6 （奈良～平安）		竪穴住居 1 土壙 4 柵列 1	〃
17	61.10.16 ～ 61.11.29	松ノ下	同上	4 （奈良～平安）	4	竪穴住居 1 土壙 10 （平安 3）	刻書土器（須恵器）
18	61.11.12 ～ 61.12.19	南屋敷	同上		1 （奈良）	土壙 15	須恵器・土師器
19	61.11.20 ～ 61.12.15	内日吉	緊急発掘調査 （排水路 改修工事）		1 （平安～中世）		〃
20	62.11.16 ～ 62.12.18	松ノ下 （横マクラ）	重要遺跡 確認調査	2 （奈良～平安）	3 （奈良～平安）	竪穴住居 3 土壙 3	〃
21	62.12. 1 ～ 63. 1. 8	金屋	同上	5 （奈良～平安）	3 （奈良～平安）	竪穴住居 3 土壙 7 柵列 6	〃 緑釉陶器
22	63.10.12 ～ 63.12.10	同上	同上	3 （平安）		竪穴住居 3 土壙 22 塀跡 1	須恵器・土師器 円面硯・緑釉陶器



第１図　土佐国府跡位置図（Ｓ＝1/50,000）



第２図　土佐国府跡地名図

土佐国府跡現況平面図

番号	調査年月	調　査　地　区
1	S52．2	新ラ田
2	S54．1	松ノ下
3	S54．2	太郎三郎ヤシキ
4	S54．4	神ノ木戸
5	S54．8	宮ノ西
6	S54．11	クゲ・国庁
7	S55．9	ｸﾎﾞﾉﾔｼｷ･荷敷･左が内
8	S55．11	内　裏
9	S56．9	府　中
10	S56．10	神ノ木・内日吉
11	S57．9	府中･太郎三郎ヤシキ
12	S58．10	堂ヶ内
13	S58．11	ク　ゲ
14	S59．10	一ノ坪
15	S59．11	鍛冶給
16	S59．11	松ノ下
17	S61．10	松ノ下
18	S61．11	南屋敷
19	S61．11	宮ノ西
20	S62．11	松ノ下(横マクラ)
21	S62．12	金　屋
22	S63．11	金　屋

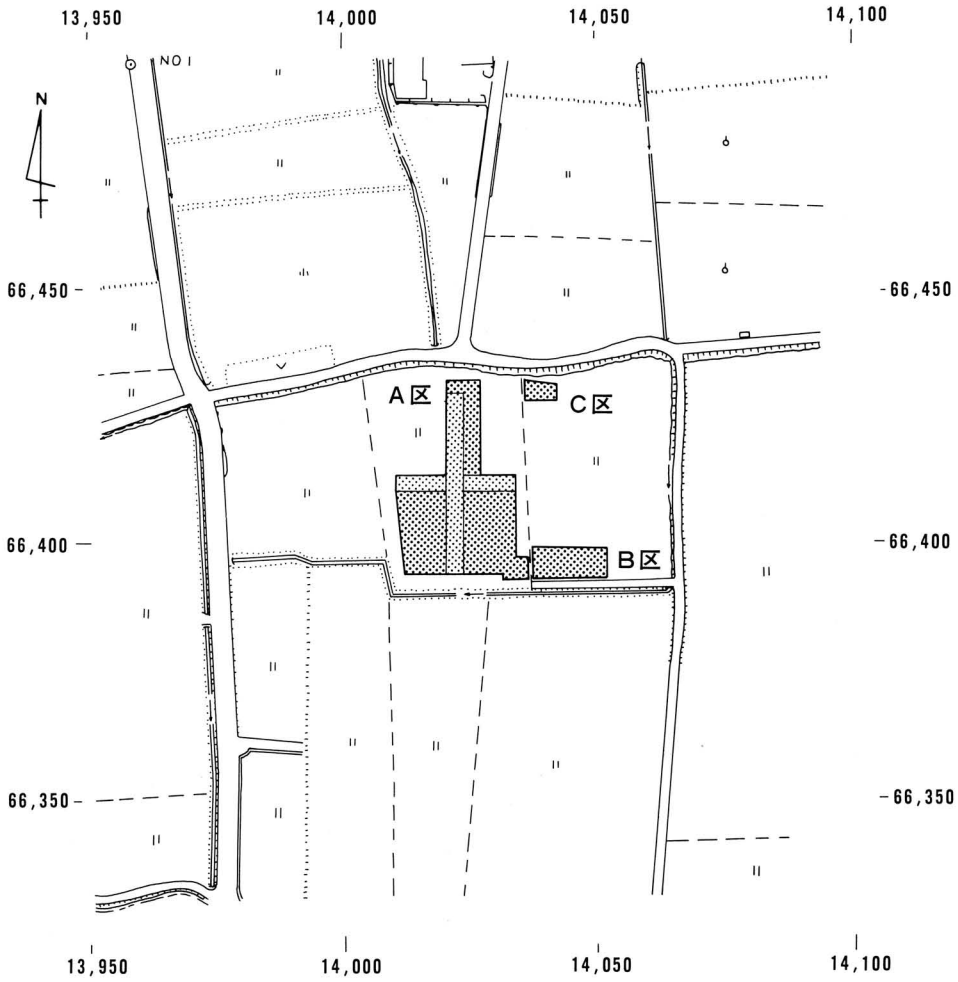
第３図　土佐国府跡第１～22次発掘区設定図（Ｓ＝1/4,000）

Ⅱ　調査概要

1．調査の方法と経過

今次の発掘調査対象地は南国市比江字金屋503と502番地であり、標高約17.5mを測る水田である。小字は金屋で、ホノギを前者がカナヤノ後、後者が外杉と称す。昨年度の第21次調査の調査対象地の北に位置し、その間に約0.2mの比高差がみられる。また、北側は、字鍛冶給、辻に接するが、現地形で約1.3mの段差がある。

調査は、発掘区をA～C区に分け、A区から順次実施した。A区では、公共座標を基準に南北トレンチ（3×36m）と東西トレンチ（3×24m）を設定することにより、昨年度検出された溝跡（SD－49）の延長をつかむと共に政庁跡に関連する遺構の検出に努めた。その結果、南北トレンチ北部で南北に並ぶ柱穴列、中央部で建物跡の一角、南部で方形の土壙とみられる



第４図　発掘区設定図（S＝1/1,500）

遺構群、東西トレンチ中央部で住居址とみられる遺構をそれぞれ検出した。また、南北トレンチ北端部で礫層を検出した。このため、東西トレンチを南へ19m、南北トレンチを北へ２m、東へ７mそれぞれ拡張して調査を実施した。A区南端部で東西に規則的に並ぶ方形の遺構を検出したことにより、南東端部をさらに東へ2.2m、南へ1.5m拡張した。

B区は、A区南東部に隣接させ、南北6.5m、東西15.0mを発掘区とし、A区で検出した方形の遺構群の広がりとその性格を追求した。

C区は、A区北端部で検出した礫層の広がりを確認するため設けた南北４mと3.7m、東西６mの発掘区である。

今次の調査によって確認された遺構は、竪穴住居址３棟、掘立柱建物跡３棟、土壙22基、塀跡１列、性格不明の竪穴遺構15基及び柱穴と考えられるピット群であった。出土遺物は、総点数約30,000点と従来の調査に比べ多量(1)であった。これは、遺物包含層の残存状況が比較的良好であったことと掘り方の深い遺構が多かったことによるとみられる。遺物の大半は須恵器と土師器で、特に土師器の占める割合が高かった。また、これらはほとんど細片で摩耗が著しく、復元可能なものは少なかった。

これらの遺構・遺物は、調査区中央部から南部にかけて集中しており、弥生時代から古代にかけてのものである。この中には弥生時代の竪穴住居址１棟、土壙７基、古墳時代の竪穴住居址２棟、土壙２基、そして古代の官衙に関連するとみられる掘立柱建物跡３棟、塀跡１列が含まれる。

２．層序

調査において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土層

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

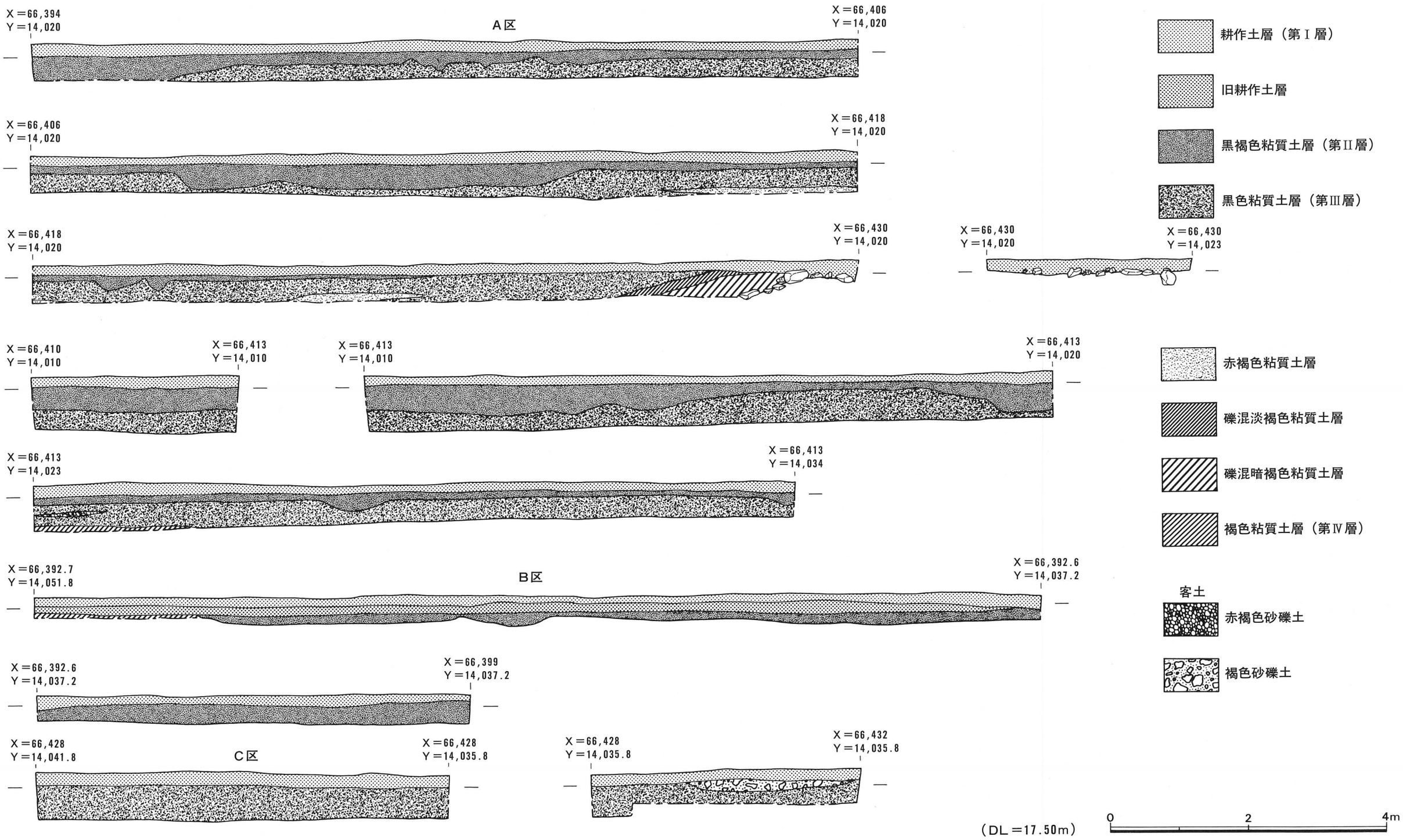
第Ⅴ層　灰褐色砂礫土層

層位中、遺構が検出されたのは第Ⅲ層及び第Ⅳ・Ⅴ層上面であった。

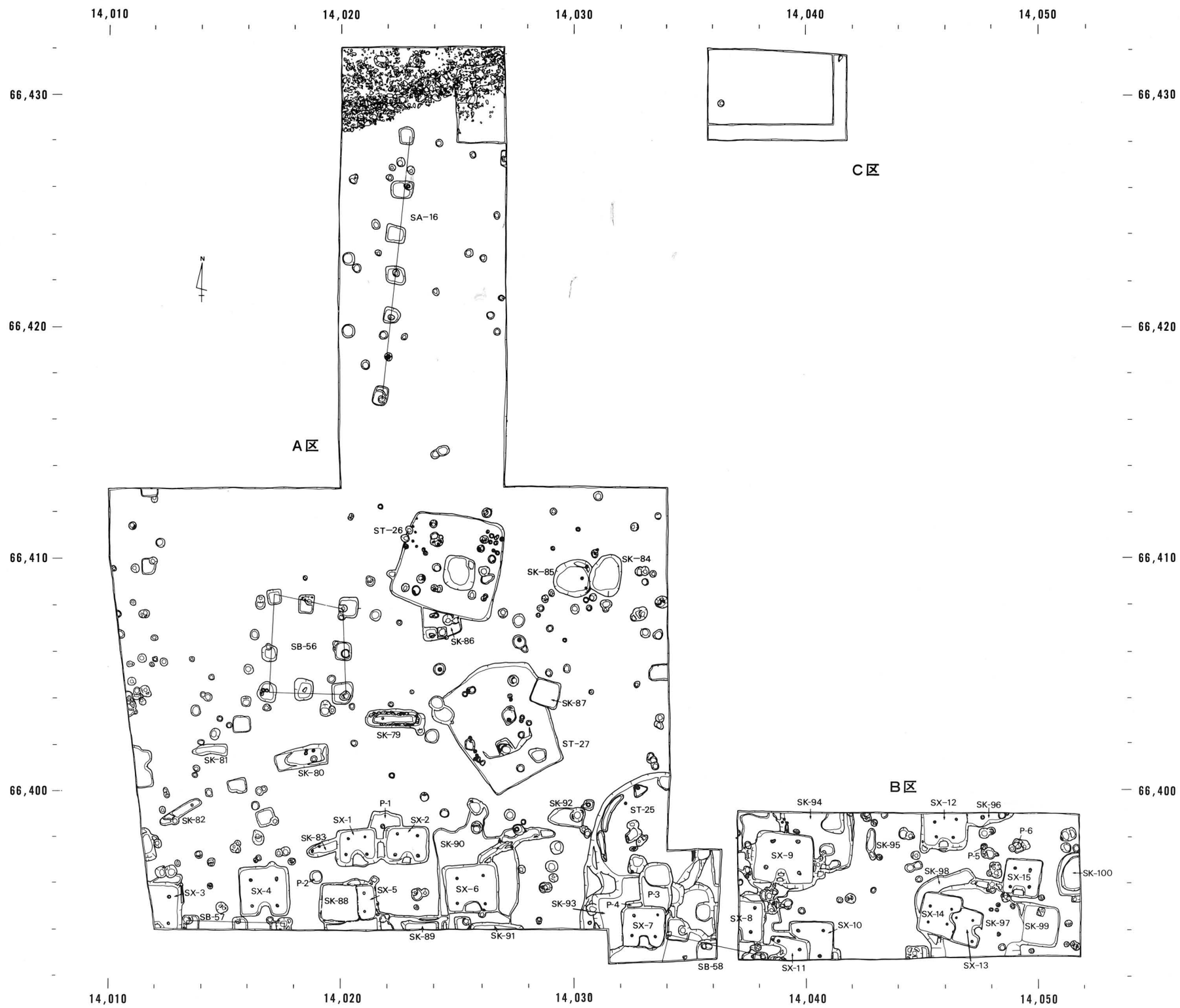
第Ⅰ層は表土層で、現在の耕作土層である。厚さ15～20cmを測る。B区でのみ、本層の下層に旧耕作土層とみられる灰黄色粘質土層を認めた。

第Ⅱ層は遺物包含層で、調査区南部から中央部にかけて認められ、厚さ40cmを測る部分もあるが、北部へと次第に薄くなり、A区北端部、C区では消滅する。包含する遺物は、土師器、須恵器が中心で、比江地区南部の遺物包含層から出土する土師質土器及び中世の遺物は皆無に等しい。遺物量は、遺構が集中する中央部から南部にかけてが圧倒的に多い。

第Ⅲ層はA・C区で認められた黒ボク（音地とよばれる鬼界カルデラの火山灰に腐植土の混



第５図　発掘区セクション図



第6図　遺構全体図（S＝1/200）

入したもの）を多量に含む層で、北部へとその堆積が厚くなる。礫層が露呈するＡ区北端部では消滅する。堆積が厚い北部では、腐植土との混和が十分でなく赤褐色を帯びている箇所が存し、調査区北端部では、黒色粘質土の下層部で認められた（第７図）。この層は、窪んだ状態の自然地形に黒ボクが堆積土とともに流れ込んだものと考えられる。また、北部ではこの層の下層部で遺構を検出した。

第Ⅳ層は無遺物層で調査区中央部から南部にかけての遺構検出面となっている。調査区北端部では、黒色粘質土との間に礫混りの淡褐色と暗褐色の粘質土層を確認した（第７図）。これらの層も無遺物層である。

第Ⅴ層は基盤の砂礫土層であり、Ａ区の北端部で認められた層序であると共に、Ａ区北端部での遺構検出面となっている。掘り方の深いＳＸ等の遺構では、この層まで掘り込んでいる。

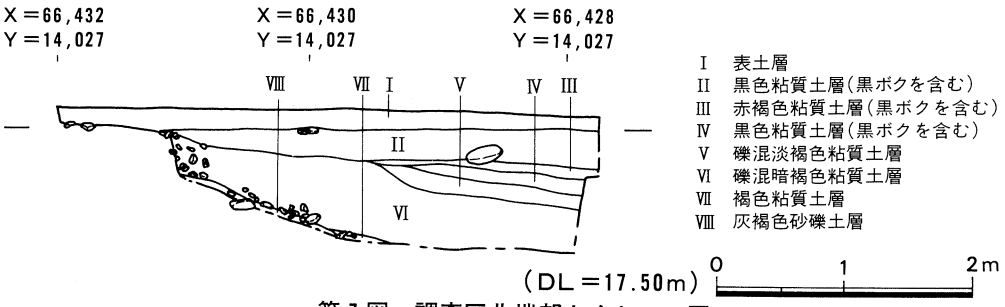
３．遺構と遺物

（１）包含層出土遺物

遺物包含層は第Ⅱ層のみであり、弥生時代から平安時代にかけての遺物が出土している。図示できたのは、この内古墳時代以降のものであり、器種には須恵器、緑釉陶器、土師器、黒色土器、土錘等がある。これらの大半は平安時代のものである。

須恵器（第24・25図１～26）

１～９は古墳時代の須恵器であり、１・２が杯蓋、３～７が杯身、８が甕の口頸部、９が甕の口縁部であり、９の口縁部外面にはハケ状工具によるとみられる斜め方向の刺突文が残存する。また、杯蓋・身ではロクロから切り離す際のヘラ切り痕が残存するもの（１・４～７）があり、回転ヘラ削り調整は一部に施されているのみである。10はかえりのある杯蓋である。11～26は古代の須恵器である。11は擬宝珠形のつまみが付く杯蓋、12～15が杯で、12には高台が付き、15の底部は深くなっている。16が椀、17～19が皿であり、17の口縁端部は内側へ折り返している。20～23は甕で、23は胴部から底部にかけての破片である。24は鉢、25は円面硯である。円面硯の出土は、土佐国府跡発掘調査では５例目である。26は平瓮の把手の一部ではないかとみられる。



第７図　調査区北端部セクション図

緑釉陶器（第25図27～29）

27・28は碗の口縁部、29は碗の底部であり、27・28が濃緑色、29が淡緑色を呈す。

土師器（第25・26図30～43）

30は杯、31～34は小杯[2]で、杯の口径は12cm以上、器高は3.5cm以上、小杯の口径は10.5cm以下、器高は3.5cm以下を測る。これらの底部はすべて回転ヘラ切りである。35は椀で、高さ1.4cmの高台が付く。36は皿、37～40は小皿で、皿の口径は12cm以上、小皿の口径は10.5cm以下を測る。これらの底部はすべて回転ヘラ切りである。41・42は台付皿で、41には高さ2.3cm、42には高さ2.5cmの「ハ」の字状に開く高台が付く。43は小型甕で、外面には煤が付着する。

黒色土器（第26図44）

椀であり、底部外面端部には断面逆三角形の小さな高台が付く。内面が黒色を呈す内黒の土器で、内面にのみヘラ磨きを施す。

土錘（第26図45～55）

45～47が須恵質、48～55が土師質の土錘である。45～47・50・52～55はほぼ円筒形で、それら以外は紡錘形を呈す。

（２）弥生時代

弥生時代に属する遺構として、竪穴住居址１棟（ＳＴ－25）、土壙７基（ＳＫ－79～85）を検出した。７基の土壙の内５基は墓壙であるとみられる。

竪穴住居址

ＳＴ－25

ＳＴ－25は、Ａ区南東端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の約⅓は調査区外にあり、全体は調査していない。遺構は、ＳＫ－93及びピット等に切られ、南側の壁は残存していない。平面形はほぼ円形で、直径5.05ｍを測る。壁はほぼ平坦な床面より急角度に立ち上がり、部分的に袋状をなして立ち上がっている。その高さは0.55ｍ前後で床面の標高は16.592～16.655ｍを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であるが、床面直上部で黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を多く含む箇所と若干含む箇所が一部認められた。付属遺構として９個のピットと壁溝を確認した。ピットの内３個は、壁に沿って検出された。[3]それらの深さは、床面から４～23cmであり、他の６個のピットはすべて床面から10cm以下である。これらからして、主柱穴に足る深さを有する明確なピットは存在しないが、壁に沿って検出したピットが主柱穴になる可能性もあるのではなかろうか。出土遺物の量は比較的多かったが、そのほとんどは外面にタタキ目が残存する甕の細片であり、図示できたものは５点であった。

出土遺物

弥生土器（第26図56～60）

56は壺で、口縁部は大きく外反する。57は甕の底部で、外面にはタタキ目が残存する。58は甑で、底部中央部に径７㎜の円孔を穿つ。59・60は支脚の脚台部で、59は外面にタタキ目、内

面にしぼり目が残存する。60の脚台部は、底部中央部に5.5㎜の円孔を穿ち、外面には下部から上部へ向ってへの指ナデ調整を施すものである。

土壙

ＳＫ－79（第８図）

ＳＫ－79は、Ａ区中央部南寄り、第Ⅳ層上面で検出した木棺墓である。遺構の東南端部にピット１個が掘り込まれていた。平面形は舟形を呈し、長辺2.55m、短辺0.80m、深さ0.42mを測る。長軸方向はＮ－89°－Ｅで、ほぼ真東を向く。遺構は２段掘りとなっており、断面形は逆凸状を呈す。底面より一段上がった平場の北側と南側に側石を配し、東端に人頭大の河原石を置く。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを含む土である。出土遺物は極めて少なく、図示できたのは１点であった。

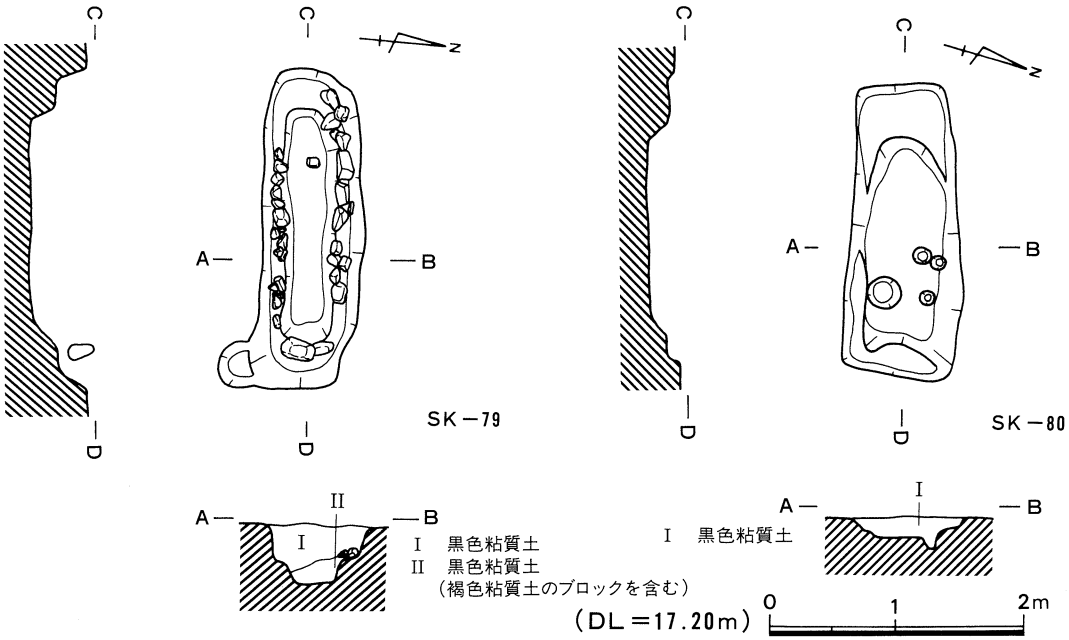
出土遺物

弥生土器（第26図61）

壺の口縁部の破片で、口縁部はラッパ状に大きく外反する。

ＳＫ－80（第８図）

ＳＫ－80は、ＳＫ－79の西約２mに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、長辺2.30m、短辺0.88m、深さ0.18mを測る。長軸方向はＮ－78°－Ｅである。断面形は中央で舟底形、西で逆台形状を呈す。埋土は黒色粘質土で、底面でピット４個を検出した。遺物は、外面にタタキ目が存する甕の細片が１点のみであった。



第８図　ＳＫ－79・80

ＳＫ－81・82（第９図）

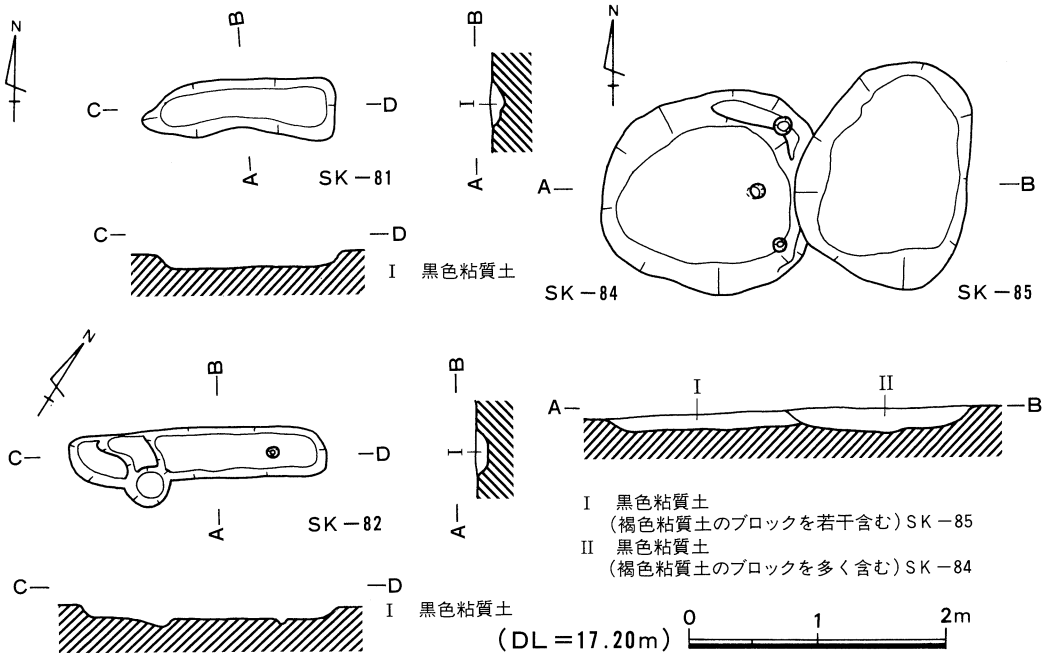
ＳＫ－81・82は、Ａ区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は、２基とも舟形を呈し、ＳＫ－81が長辺1.50m、短辺0.40m、深さ0.09m、ＳＫ－82が長辺2.00m、短辺0.40m、深さ0.09mを測る。長軸方向は、ＳＫ－81がＮ－87°－Ｅ、ＳＫ－82がＮ－61°－Ｅである。断面形は２基とも舟底形を呈し、ほぼ平坦な底面から緩やかに上がる。ＳＫ－82の底面にはピット１個が掘り込まれる。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物は、ＳＫ－80同様皆無に等しく図示できるものはなかった。

ＳＫ－83

ＳＫ－83は、Ａ区南部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の東側は、ＳＸ－１に掘り込まれ、残存していない。平面形は舟形を呈し、長辺1.36m以上、短辺0.58m、深さ0.20mを測る。長軸方向はＮ－60°－ＥとＳＫ－82とほぼ同一方向である。断面形は概ねＵ字形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から比較的急な角度で上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物は、タタキ目の存する弥生土器の細片が３点であった。

ＳＫ－84・85（第９図）

ＳＫ－84・85は、Ａ区西部北寄り、第Ⅳ層上面で検出した。ＳＫ－84がＳＫ－85の東端部を切っている。平面形は、２基とも不整楕円形を呈し、ＳＫ－84が長辺1.79m、短辺1.36m、深さ0.16m、ＳＫ－85が長辺1.70m、短辺1.60m、深さ0.16mを測る。長軸方向は、ＳＫ－84がＮ－５°－Ｅ、ＳＫ－85がＮ－89°－Ｅで、直交した形となる。断面形は２基とも舟底形を呈し、



第９図　ＳＫ－81・82・84・85

ほぼ平坦な底面から緩やかに上がる。埋土は黒色粘質土で、ＳＫ－84が褐色粘質土のブロックを多く含むのに対しＳＫ－85はその混入が少なかった。出土遺物は少なく、タタキ目が存する弥生土器の細片が十数点ずつあったに過ぎない。

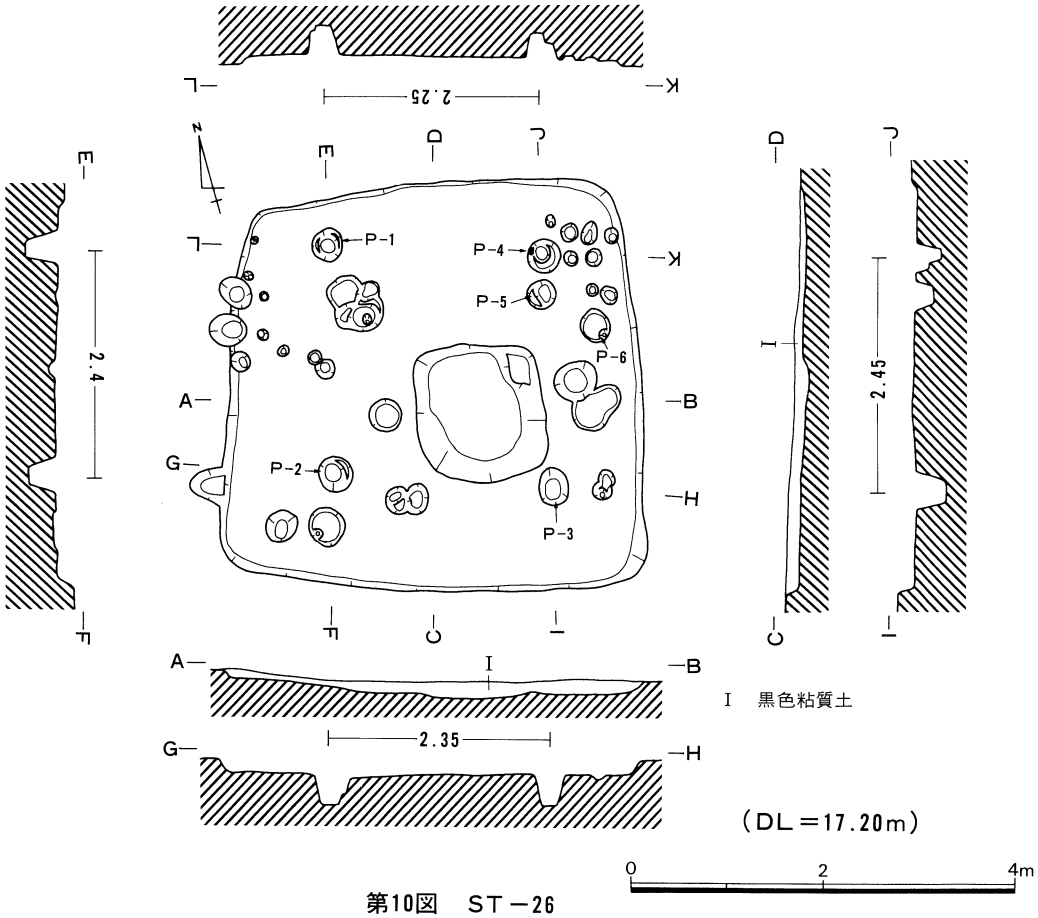
（３）古墳時代

古墳時代に属する遺構として、竪穴住居址２棟（ＳＴ－26・27)、土壙２基（ＳＫ－86・87）を検出した。

竪穴住居址

ＳＴ－26（第10図）

ＳＴ－26は、Ａ区ほぼ中央部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＫ－86の北側を切り、西壁で２個のピットに掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺4.4m、短辺4.3mを測る。長軸方向はＮ－78°－Ｗである。壁は概ねほぼ平坦な床面から角度を持って上がるが、北壁では床面との比高差約３cmと遺存状態が悪い。最も残存状態の良い部分でも20cm前後である。床面の標高は16.878～16.974mを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを若干含むものであった。付属遺構として多数のピットを検出した。この内主柱穴と考えられるのはＰ－１～４で



第10図　ＳＴ－26

ある。規模は、Ｐ－１が径0.34m、深さ0.29m、Ｐ－２が径0.36m、深さ0.29m、Ｐ－３が径0.34～0.40m、深さ0.33m、Ｐ－４が径0.35m、深さ0.29mで、ほぼ同規模の主柱穴であったといえる。これら柱穴の柱間距離はＰ１～２間2.40m、Ｐ２～３間2.35m、Ｐ３～４間2.45m、Ｐ４～１間2.25mで、ほぼ等間隔である。住居址中央部には、平面形が隅丸方形で長辺1.45m、短辺1.35m、深さ0.09mを測る浅い落ち込みが存在するが、その性格は不明確である。これら以外のピットは、Ｐ－５が深さ0.23m、Ｐ－６が0.26mを測る以外深さ0.10m前後と浅く、主柱穴とは考え難い。また、建替えは、主柱穴となり得るピットが先述の４個以外にないことから、行われなかったと考えられる。出土遺物には、須恵器、土師器があるが、遺構の遺存状態が不良であったため量的に少なく、かつ細片であり、図示できたのは３点のみであった。

出土遺物

土師器（第27図62～64）

すべて甕で、62のみ全器形を知ることができる。62の甕の口縁部は胴部から「く」の字状に外反しそのまま口縁端部に至り、丸く仕上げるが、63と64の甕のそれは口縁端部でさらに外傾し、細く仕上げる。

ＳＴ－27

ＳＴ－27は、ＳＴ－26の南東約２mに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、東壁でＳＫ－87、北西壁で２個のピットに掘り込まれていた。平面形はほぼ方形で、長辺5.0m、短辺4.4mを測る。長軸方向はＮ－28°－Ｗである。壁はほぼ平坦な床面から角度を持って上がるとみられるが、壁高は５cm前後と極めて遺存状態が悪い。床面の標高は17.085～17.177mを測る。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを若干含むものであった。付属遺構として大小20個のピットを検出したが、その配置等から主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。その他付属遺構とみられるものは検出されなかった。出土遺物には、須恵器、土師器があるが、遺構の遺存状況が極めて不良であったため少なく、かつ細片であった。

土壙

ＳＫ－86

ＳＫ－86は、Ａ区ほぼ中央部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の北側は、ＳＴ－26に掘り込まれ残存していない。平面形は方形を呈していたとみられ、長辺1.67m、短辺1.47m以上、深さ0.09mを測る。長軸方向はＮ－74°－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面より急角度で上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物は、土師器の甕の細片が15点であった。

ＳＫ－87

ＳＫ－87は、Ａ区中央部南東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＴ－27の東壁を切って掘り込まれていた。平面形は方形を呈し、長辺1.20m、短辺1.14m、深さ0.05mを測る。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈するとみられるが、遺構の遺存状況が不良で不明確である。埋土は黒色粘質土である。遺物は、土師器の細片が数点で皆無に等しい。

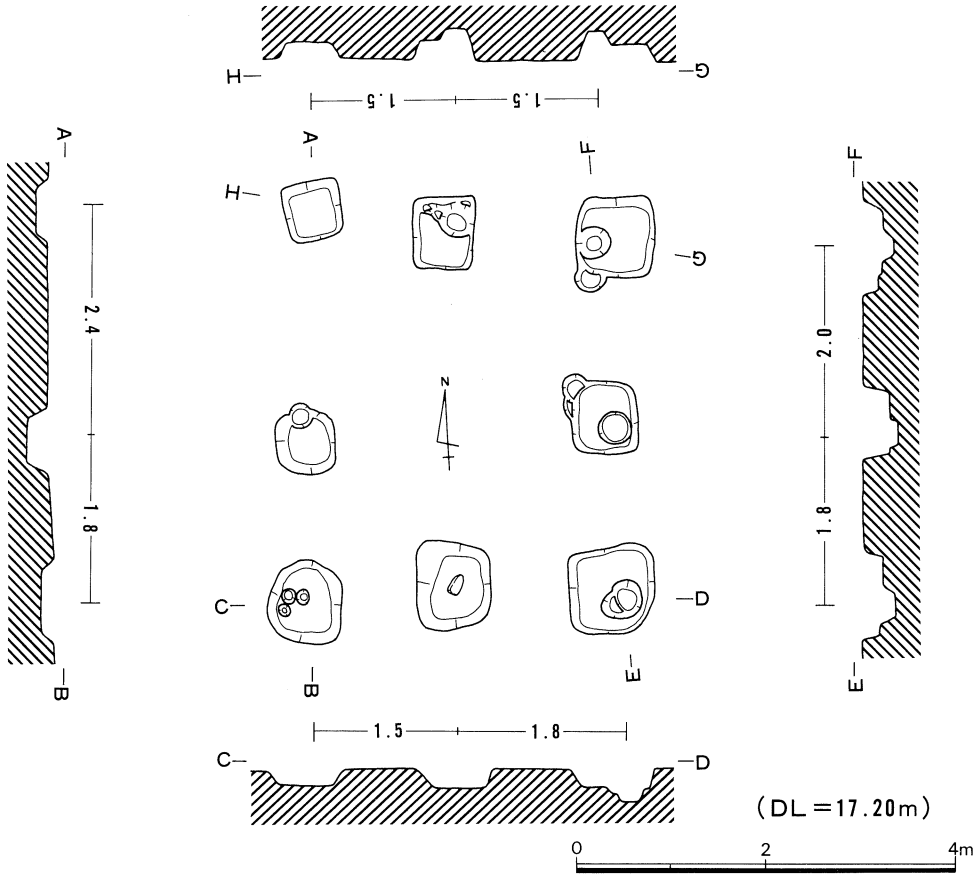
（4）古代

古代に属する遺構として、掘立柱建物跡３棟（ＳＢ－56～58)、土壙13基（ＳＫ－88～100)、塀跡１列（ＳＡ－16)、性格不明遺構15基（ＳＸ－１～15）及び建物跡の復元には至らなかったが柱穴とみられるピット群を検出した。

掘立柱建物跡

ＳＢ－56（第11図）

ＳＢ－56は、Ａ区中央部南西寄り、第Ⅳ層上面で検出した桁行２間（総長約4.2m、14尺)、梁間２間（総長3.3m、11尺）の南北棟掘立柱建物跡である。棟方向は、Ｎ－3°5′－Ｅであるが、棟に歪みがあり一定しない。柱間寸法は、桁行が1.8～2.4m（６～８尺)、梁間が1.5～1.8m（５～６尺）とまちまちである。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺64～94cmを計り、柱径は15～25cmである。これら柱穴の深さは検出面から13～34cmで、底面の標高は16.782～16.982mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物には、弥生土器片２点、須恵器片１点、土師器の杯ないし椀の細片６点があるが、復元可能なものはなかった。



第11図　ＳＢ－56

ＳＢ－57

ＳＢ－57は、Ａ区南端部西寄り、第Ⅳ層上面で検出した桁行不明、梁間２間（総長約4.2m、14尺）の南北棟掘立柱建物跡と推測される。棟方向はＮ－2°19′－Ｅである。柱間寸法は、桁行が不明で、梁間が1.8～2.4m（６～８尺）である。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺60～68cmを測り、柱径は15～25cmである。これら柱穴の深さは検出面から22～60cmで、底面の標高は16.737～16.892mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物には、須恵器、土師器があり、図示できたのは３点である。

出土遺物

須恵器（第27図65）

皿で、口縁部は体部から上外方へ真直にのび、端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラ切りで、器面は摩耗が著しい。

土師器（第27図66・67）

66は杯で、底部は回転ヘラ切りである。67は皿で、形態的には65の須恵器の皿とほぼ同じである。

ＳＢ－58

ＳＢ－58は、Ａ区とＢ区に跨っており、Ａ区の柱穴はＳＫ－93を掘り下げた段階、Ｂ区の柱穴は不定形の浅い落込みを除去した段階でそれぞれ検出した。建物は桁行不明、梁間２間（総長約4.2m、14尺）の南北棟掘立柱建物跡と推測される。棟方向はＮ－14°2′－Ｅである。柱間寸法は、桁行が不明で、梁間が1.8～2.4m（６～８尺）である。柱穴の掘り方はほぼ方形で、一辺58～98cmを測り、柱径は、各柱穴に残存する礎盤とみられる石から径20cm前後と考えられる。これら柱穴の深さは検出面から9.5～27cmで、底面の標高は16.427～16.671mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土で、部分的に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物には、タタキ目の存する弥生土器片、須恵器の杯身・蓋、土師器の杯の細片があるが、図示できたのは、混入したとみられる須恵器１点であった。

出土遺物

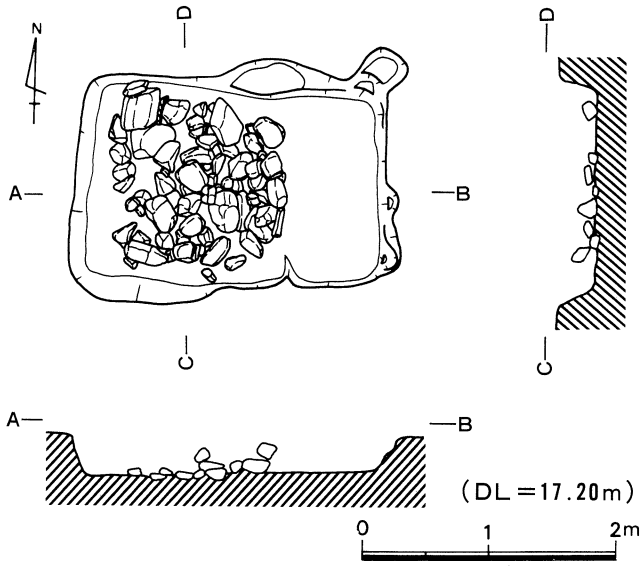
須恵器（第27図68）

須恵器の杯身で、たちあがりは６mmと低く、底部外面はヘラ切りである。

土壙

ＳＫ－88（第12図）

ＳＫ－88は、Ａ区南端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＸ－５の西半分を切って掘り込まれている。検出時は、調査区外へ延びる遺構とみられたが、約５cm掘り下げた段階で明確なプランを確認できた。平面形は方形を呈し、長辺約1.78m、短辺約1.72m、深さ1.11mを測る。長軸方向は、Ｎ－０°－Ｅで、真北を向く、断面形は概ね逆台形を呈するが、袋状を成す箇所がある。壁はほぼ平坦な底面よりほぼ垂直に上がる。埋土は６層に分れ、第Ⅰ層黒色粘質土、



第12図　ＳＫ－88（集石検出状態）

第Ⅱ層淡黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を多量に含む、第Ⅲ層黒褐色粘質土、第Ⅳ層淡黒色粘質土、第Ⅴ層淡黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を少量含む、第Ⅵ層黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を若干含むものである。この内、第Ⅰ層中から集石を検出した。その状況からみて投棄されたものと考えられる。また、付属遺構とみられるものは確認されなかった。遺物量は比較的多く、器種には、須恵器、土師器があり、図示できたのは８点であった。

出土遺物

須恵器（第27図69・70）

69は杯で、底部から体部にかけてが残存する。高台は、断面逆台形を呈する確りしたものである。70は皿で、底部は回転ヘラ切り、体部から口縁部にかけてほぼ真直に立ちあがる。

土師器（第27図71～76）

71～73は杯で、底部はすべて回転ヘラ切りである。73の器高は4.8cmと他に比べ高い。74は盤で、高さ８mmの高台が付き、内外面にヘラ磨きを施す。75・76は皿で、底部は回転ヘラ切りである。75は完形である。

ＳＫ－89・91

ＳＫ－89・91は、Ａ区南端部、第Ⅳ層上面で検出した。２基とも、遺構の大半が調査区外へ延びており、全容は不明である。後述のＳＸのような遺構となる可能性もある。平面形は方形を呈するとみられ、ＳＫ－89が長辺2.83m、短辺0.53m以上、深さ0.18m、ＳＫ－91が長辺2.20m以上、短辺0.24m以上、深さ0.67mを測る。長軸方向は、ＳＫ－89がＮ－89°－Ｗ、ＳＫ－91がＮ－88°－Ｗとほぼ同一方向である。断面形はほぼ逆台形で、ＳＫ－91の壁は底面から垂直に近い角度で上がる。埋土は、２基とも黒色粘質土である。遺物には、須恵器、土師器があるが、すべて細片であった。

ＳＫ－90

ＳＫ－90は、Ａ区南端部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の中央部は、ＳＸ－６によって掘り込まれている。平面形は不整形で、北と東に溝状に派生する。長辺5.38m、短辺5.20m深さ0.09mを測る。長軸方向はＮ－3°－Ｗである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は床面より急角度で上がる。埋土は黒色粘質土で、遺物には、須恵器片、土師器片、土錘があった。

出土遺物

土錘（第27図77）

土師質の土錘で、紡錘形を呈す。

ＳＫ－92

ＳＫ－92は、Ａ区南東部、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は不整形で、長辺1.50ｍ、短辺0.86ｍ、深さ0.08ｍを測る。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は南側で急角度、北側で緩やかに上がる。底面には、深さ10cmのピット１個が掘り込まれる。埋土は黒色粘質土である。遺物には、須恵器片１点、土師器片９点があるが、すべて細片であり、図示できるものはない。

ＳＫ－93

ＳＫ－93は、Ａ区南東端、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＴ－25の南を切って掘り込んでいる。一方、ＳＸ－９及び数個のピットに掘り込まれる。平面形は不整方形で、長辺5.60ｍ、短辺3.80ｍ以上、深さ0.72ｍを測る。長軸方向はＮ－84°－Ｗである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は底面より急角度で上がる。また、壁は途中で部分的に平場を有す。埋土は黒色粘質土である。遺物には、弥生時代の住居址を掘り込んでいるため弥生土器片が比較的多くあり、他に須恵器片、土師器片もあった。これらの大半は細片で、図示できたのは、混入したとみられる遺物類であった。

出土遺物

弥生土器（第27図78）

小形の器台とみられるもので、脚部の大半が欠損する。脚部内面にはしぼり目が残存する。

須恵器（第28図79）

杯身で、焼成時の歪みが残存する。底部はヘラ切りである。

砥石（第28図80）

砂岩の砥石で、表裏両面を使用する。叩石としての再利用が考えられる。

ＳＫ－94

ＳＫ－94は、Ｂ区西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の南東部は、ＳＸ－９によって掘り込まれる。平面形は不整方形で、長辺3.15ｍ、短辺2.58ｍ以上、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－87°－Ｗである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は底面より急角度で立ち上がる。底面には大小10個のピット、西壁、南壁直下には幅15cm前後の細い溝を一部で確認した。埋土は黒色粘質土である。遺物には、須恵器片、土師器片があるが、ほとんど細片であり図示できたのは１点であった。

出土遺物

土師器（第28図81）

羽釜で、口縁部直下に鍔が付く。外面には煤の付着は認められない。

ＳＫ－95

ＳＫ－95は、Ｂ区中央部西寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、南端でピット１個を切っている。平面形は舟形で、長辺1.06m、短辺0.39m、深さ0.09mを測る。長軸方向はＮ－５°－Ｅである。断面形は舟底形を呈し、壁はほぼ平坦な底面より緩やかに上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物はすべて土師器で、器形には杯ないし椀と甕がある。すべて細片であった。

ＳＫ－96

ＳＫ－96は、Ｂ区北東部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の西側はＳＸ－12に切られ、また、その大半は調査区外に延びており全容は不明である。平面形は、方形になる可能性もあるが、現状では不整形で、長辺2.00m以上、短辺0.64m以上、深さ0.13mを測る。長軸方向はＮ－77°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈するとみられ、壁は底面より急角度で立ち上がる。埋土は黒色粘質土である。遺物には、弥生土器片、土師器片があるが、すべて細片で、かつ摩耗する。

ＳＫ－97・98

ＳＫ－97・98は、Ｂ区中央部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。ＳＫ－97はＳＫ－98を切って掘り込み、また、２基ともＳＸ－13・14を切っている。平面形は、２基とも不整方形で、ＳＫ－97が長辺4.00m以上、短辺3.29m、深さ0.27m、ＳＫ－98が長辺2.80m、短辺0.56m以上、深さ0.43mを測る。長軸方向は、ＳＫ－97がＮ－88°－Ｅ、ＳＫ－98がＮ－72°－Ｅである。断面形は、２基ともほぼ逆台形を呈し、壁は底面より急角度で立ち上がる。埋土は、ＳＫ－98が黒色粘質土、ＳＫ－97が黒色粘質土に褐色粘質土の土粒を若干含むものであった。遺物は、その大半が土師器の細片であるが、図示できたのは、混入したとみられる土製支脚と土錘である。２点ともＳＫ－97からの出土である。

出土遺物

弥生土器（第28図82）

支脚で、角部２本と脚台部下半が欠損する。脚台部内面にはしぼり目が残存する。

土錘（第28図83）

土師質の土錘で、ほぼ円筒形を呈す。

ＳＫ－99

ＳＫ－99は、Ｂ区東部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＫ－87を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺1.78m、短辺1.59m、深さ0.29mを測る。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。後述のＳＸとほぼ同形、同規模であるが、杭穴と階段状の段部が欠落する点で異なる。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土のブロックを多量に含む黒色粘質土であった。また、底面北端部で検出した平面形が方形のピットは、ＳＫ－97の埋土とは異なり、ＳＫ－99によりピット上部を掘削されたものと判断される。遺物量は比較的多く、器種には須恵器、土師器、黒色土器（内黒）があるが、すべて細片で図示できるものはなかった。

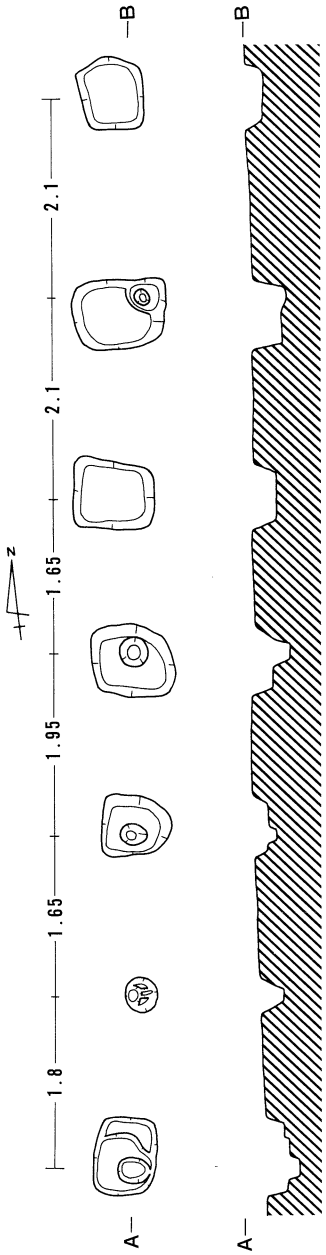
ＳＫ－100

ＳＫ－100は、Ｂ区東端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の東半分は調査区外にあり、全容は不明である。平面形は不整楕円形で、長辺1.90m、短辺0.95m、深さ0.16mを測る。長軸方向はＮ－1°－Ｗで、ほぼ真北を向く。遺構は２段掘りで、断面形は舟底形を重ねた形となり、壁は底面、平場より緩やかに立ち上がる。埋土は黒色粘質土であった。遺物には弥生土器の甕片から土師器の小皿片までがあり、全部で16点である。これらはすべて細片で、図示できるものはなかった。

塀跡

ＳＡ－16（第13図）

ＳＡ－16は、Ａ区北部、第Ⅲ層下層部で検出した南北の塀跡である。試掘トレンチで検出したため、当初建物跡を想定し、東側を拡張したが、相対する柱穴は検出されず、塀跡とした。方向は、Ｎ－6°8′－Ｅで、ほぼ磁北を向く。規模は６間（総長約11.25m、37.5尺）で、柱間寸法は1.65～2.10m（5.5～2.1尺）と区々である。柱穴の掘り方は、１個が径37cmの円形である以外、すべて方形で、一辺65～97cmを測り、柱径は17cm前後と考えられる。これら柱穴の深さは検出面より16.3～42.0cmで、底面の標高は16.605～17.007mを測る。埋土は褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土であった。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器の細片が数点出土しているのみである。



第13図　ＳＡ－16

性格不明遺構

ＳＸ－１・２（第14図）

ＳＸ－１・２は、Ａ区南部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、Ｐ－１を切って掘り込まれており、検出段階では東西に長い平面形が長方形を呈する遺構とみられ、約７cm掘り下げた時点で２基のプランを確認した。平面形は、２基とも正方形に近い方形で、ＳＸ－１が長辺1.80m、短辺1.60m、深さ0.55m、ＳＸ－２が長辺1.88m、短辺1.63m、深さ0.55mを測り、ほぼ同規模である。長軸方向は、ＳＸ－１がＮ－87°26′－Ｅ、ＳＸ－２がＮ－89°8′－Ｅであり、ほぼ同一方向を示す。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で立ち上がっている。底面の標高は、２基とも16.560～16.669mを測る。埋土は、２基とも上層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土で、下層が褐色粘質土のブロックを若干含む黒色粘質土であ

る。付属遺構として、各４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径８～16cm、深さ６～11cmを測り、杭間距離は、ＳＸ－１が0.73～0.80ｍ、ＳＸ－２が0.88～0.98ｍである。段部の底面からの高さは、ＳＸ－１が44cm、ＳＸ－２′が41cmである。遺物は、須恵器、土師器等があるが、全般に細片であり、図示できたのは、４点で、84～86がＳＸ－１、87がＳＸ－２からの出土である。87は混入したものとみられる。

出土遺物

土師器（第28図84）

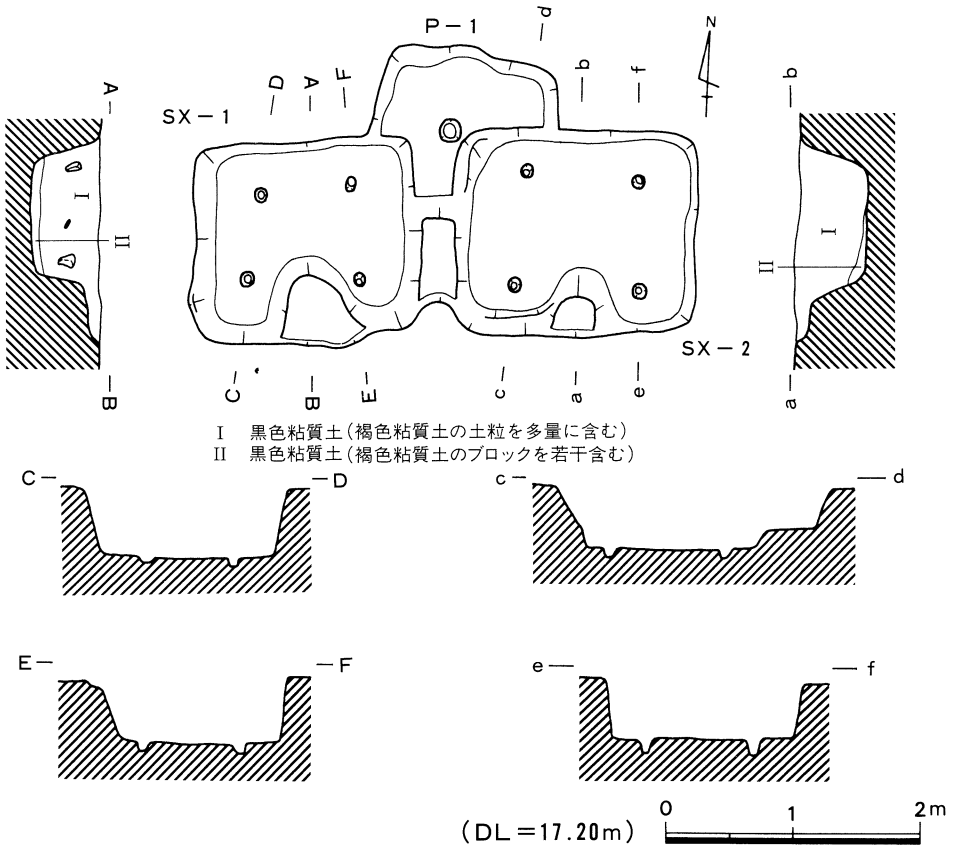
杯で、底部は回転ヘラ切りである。体部は内湾気味に上外方へ立ち上がり、口縁部でやや外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。

土錘（第28図85・86）

土師質の土錘で、85がほぼ円筒形、86が紡錘形を呈す。

須恵器（第28図87）

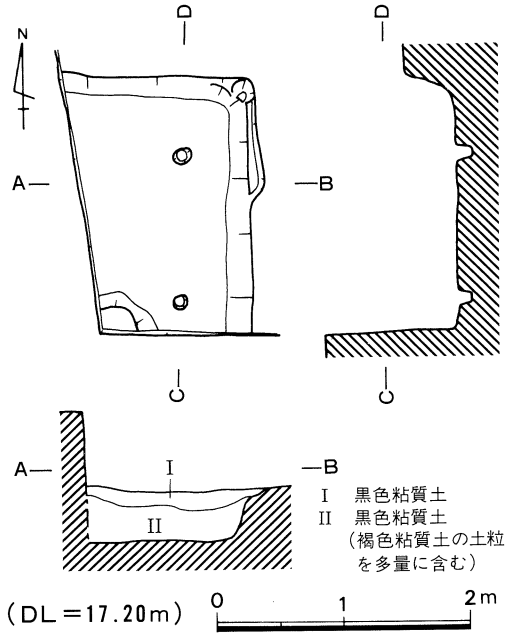
杯身で、古墳時代のものである。たちあがりは、1.2cmと比較的高く、底部外面ほぼ全面に回転ヘラ削り調整を施し、３～７のような底部外面のヘラ切り痕は認められない。



第14図　ＳＸ－１・２、Ｐ－１

ＳＸ－３（第15図）

ＳＸ－３は、Ａ区南西端、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の西半分と南端部は調査区外である。平面形は方形で、長辺2.20ｍ以上、短辺1.49ｍ以上、深さ0.46ｍを測る。長軸方向はＮ－1°9′－Ｗで、ほぼ真北を向く。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.624～16.681ｍを測る。埋土は、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土である。付属遺構として、２個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径15～18㎝、深さ約10㎝である。杭間距離は1.15ｍである。段部の高さは、底面から34㎝である。遺物は、須恵器、土師器があるが、その大半は細片である。



第15図　ＳＸ－３

出土遺物

須恵器（第28図88・89）

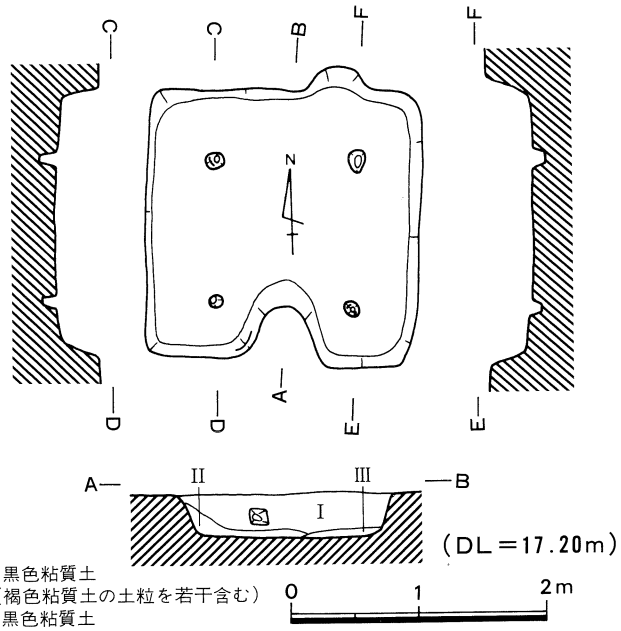
88は回転ヘラ切り底の杯、89は甕で、底部から胴中央部にかけて残存する。

土師器（第28図90～92）

90は椀で、高さ1.2㎝の高台が付く。91・92は皿で、口縁端部を若干肥厚する。

ＳＸ－４（第16図）

ＳＸ－４は、Ａ区南端部西寄り、第Ⅳ層上面で検出した。平面形は方形で、長辺2.20ｍ、短辺2.15ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－1°55′－Ｗで、ほぼ真北を向く。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.754～16.797ｍを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であり、褐色粘質土の土粒の含有量により３層に分層できる。付属遺構として、４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径12～17㎝、深さ７～16㎝である。杭間距離は1.10～1.18ｍである。段部の高さ



第16図　ＳＸ－４

は、底面から31cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、その大半は細片であった。

出土遺物

土師器（第28図93）

杯で、底部は回転ヘラ切りである。体部は内湾気味に上がり、口縁部で外反し、端部は細い。

ＳＸ－５（第17図）

ＳＸ－５は、Ａ区南端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の西半分は、ＳＫ－88に切られ残存していない。平面形は方形で、長辺1.75m、短辺0.83m以上、深さ0.60mを測る。長軸方向はＮ－3°51′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.552～16.622mを測る。埋土は黒色粘質土で、下層部に褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土を認める箇所があった。付属遺構として、２個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部の一部を確認した。杭穴の規模は径約10cm、深さ５～８cmである。杭間距離は0.83mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、ほとんど細片である。

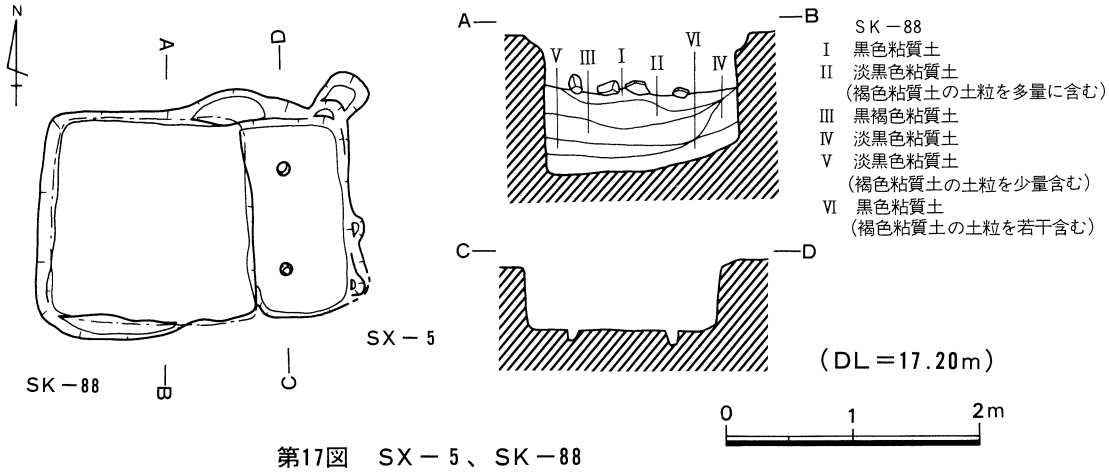
出土遺物

土師器（第28図94～97）

94～96は杯である。底部外面はすべて回転ヘラ切りである。97は皿で、完形であり、底部外面は回転ヘラ切りである。

ＳＸ－６（第18図）

ＳＸ－６は、調査区南端部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＫ－90を切って掘り込み、南壁でピット１個に掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺2.31m、短辺2.20m、深さ0.64mを測る。長軸方向はＮ－84°7′－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.484～16.557mを測る。埋土は、３層に分層でき、第Ⅰ層が黒色粘質土、第Ⅱ層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土、第Ⅲ層が褐色粘質土



第17図　ＳＸ－５、ＳＫ－88

の土粒を若干含む黒色粘質土であった。付属遺構として、５個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を確認した。杭穴の規模は径10～12cm、深さ12～17cmである。この内、南壁直下から検出された杭穴は、他の杭穴と位置的にずれる。他の４個の杭間距離は1.20～1.27mである。段部の高さは底面から41cmである。遺物は、須恵器、土師器、土錘、銅環があり、復元可能な遺物が比較的多くあった。

出土遺物

須恵器（第28・29図98～102）

98は杯身で、底部外面はヘラ切りである。99は杯蓋で、つまみは残存していない。100は高杯の脚台部とみられる。101・102は甕で、口縁部が残存する。

土師器（第29図103～110）

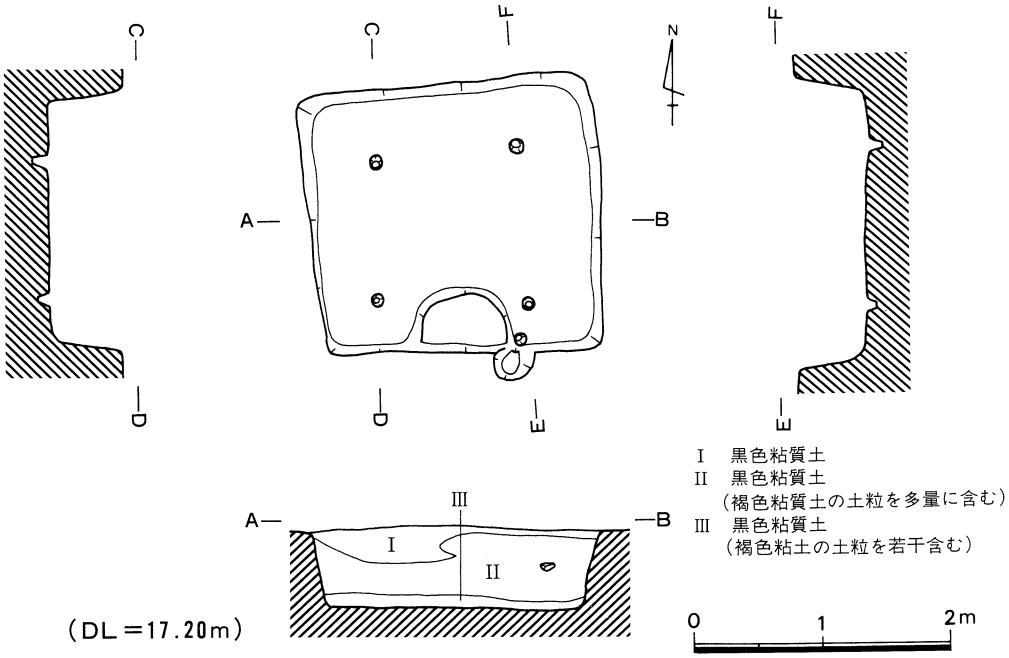
103～106は杯で、底部はすべて回転ヘラ切りである。103の内外面と104の内面にはヘラ磨きを一部施す。107は椀で、断面逆台形の高さ1.1cmの高台が付く。108～110は甕で、口縁部は胴部から大きく外傾する。110の外面のみに煤の付着が認められた。

土錘（第29図111～118）

すべて土師質の土錘で、116・118が紡錘形、他が円筒形を呈す。

銅環（第29図119）

環外径2.3cm、環内径1.2cmを測る。全般に銹化している。



第18図　SX－6

ＳＸ－７（第19図）

ＳＸ－７は、Ａ区南東端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構はＳＫ－93を掘り込んでいた。平面形は方形で、長辺1.93ｍ、短辺1.73ｍ、深さ0.98ｍを測る。長軸方向はＮ－87°35′－Ｅである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は、垂直に近い角度で上がる箇所と袋状をなす箇所がある。底面の標高は16.232～16.307ｍを測る。埋土は、黒褐色粘質土と黒色粘質土であるが、褐色粘質土の土粒の含有量により５層に分層できる。付属遺構として、４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径８～12cm、深さ約８cmである。杭間距離は0.90～1.03ｍである。段部の高さは底面から37cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、大半は細片である。

出土遺物

須恵器（第29図120）

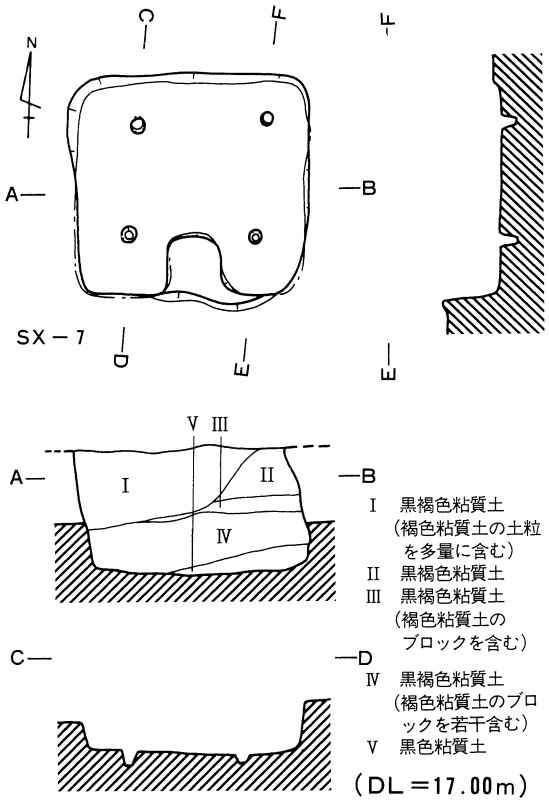
甕で、外面にはタタキとハケ調整を施す。

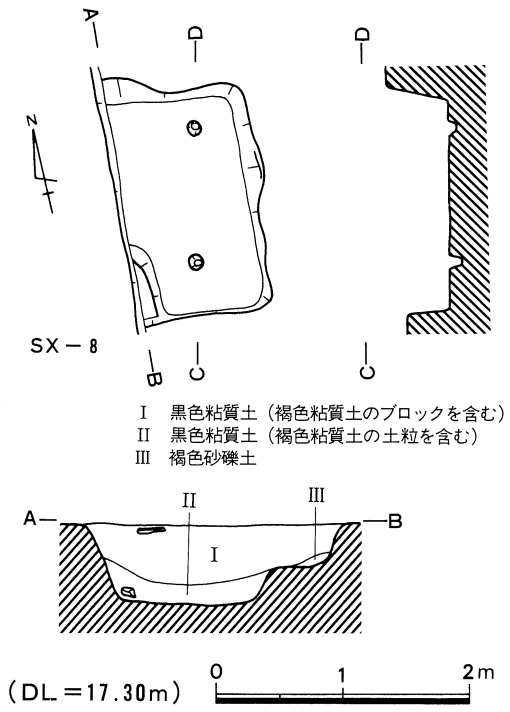
土師器（第30図121）

高杯で、内外面にヘラ磨きを施し、内面に粗雑な螺施状の暗文が残存する。

ＳＸ－８（第19図）

ＳＸ－８は、Ｂ区西端部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の西半分は調査区外である。平面形は方形で、長辺1.80ｍ、短辺1.14ｍ以上、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ－3°12′－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.603～16.676ｍを測る。埋土は、３層に分層でき、第Ⅰ層が褐色粘質土のブロックを含む黒色粘質土、第Ⅱ層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土、第Ⅲ層が褐色砂礫土である。付属遺構として、２個の杭穴と南壁に掘り残された





第19図　ＳＸ－７・８

階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径約10cm、深さ約７cmである。杭間距離は1.10mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、その大半は土師器が占める。また、ほとんどの遺物は細片であり、図示できたのは３点である。

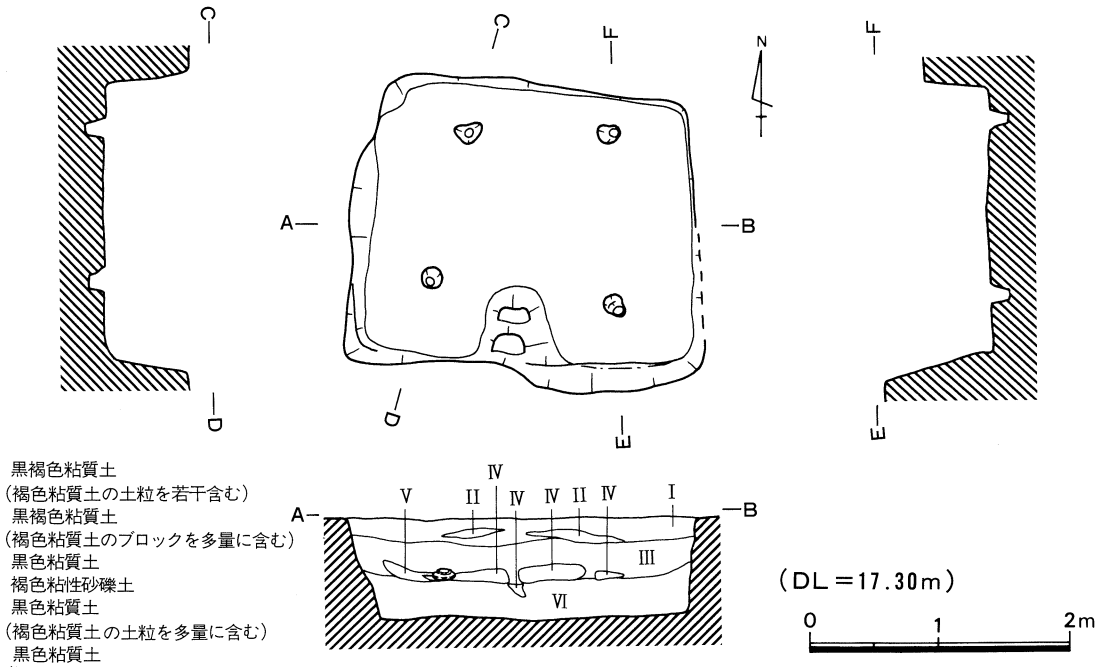
出土遺物

土師器（第30図122～124）

122は杯、123・124は小皿である。底部外面はすべて回転ヘラ切りである。

ＳＸ－９（第20図）

ＳＸ－９は、Ｂ区西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構はＳＫ－94を掘り込んでいた。平面形はほぼ方形で、長辺2.70m、短辺2.40m、深さ0.76mを測る。長軸方向はＮ－86°34′－Ｗである。断面は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.396～16.499mを測る。埋土は大きく３層に分層され、上層から褐色粘質土の土粒を若干含む黒褐色粘質土、黒色粘質土、褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土である。間層として、褐色粘質土のブロックを多量に含む黒褐色粘質土、褐色粘性砂礫土、褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土を認めた。付属遺構として、４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径12～18cm、深さ９～15cmである。杭間距離は1.13～1.50mである。段部は２段で、底面からの高さは、下段面が14cm、上段面が34cmである。遺物は、須恵器、土師器、土錘があり、出土量は比較的多くその大半は土師器であった。その内、図示できたのは、須恵器１点、土師器25点、土錘２点である。



第20図　ＳＸ－９

出土遺物

須恵器（第30図125）

長頸壺の底部近くとみられ「ハ」の字状に大きく開く高台が付く。

土師器（第30・31図126～150）

126・127は杯で、126の器面全面にヘラ磨きを施す。128～130は小杯、131・132は椀である。133は皿、134～138は小皿であり、137・138の底部外面は糸切りで、それ以外は回転ヘラ切りである。139～143は台付皿で、139・140の口縁部内面には凹線を回らす。144・145は台付小皿で、145の底部外面は糸切りである。146・147は甕で、147の外面には煤が付着する。148～150は羽釜で、148・149は口縁部下に鍔が付き、150は胴部に鍔と把手が付く。148の外面には煤の付着が若干認められる。

土錘（第31図151・152）

土師質の土錘で、151は紡錘形、152は円筒形を呈す。

ＳＸ－10（第21図）

ＳＸ－10は、Ｂ区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＸ－11に切られ、かつ、南側は調査区外である。平面形はほぼ方形で、長辺1.90m、短辺1.64m以上、深さ0.31mを測る。長軸方向はＮ－89°31′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.926～17.023mを測る。埋土は２層に分層され、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土である。付属遺構として、３個の杭穴と西壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径13～17cm、深さ４～14cmである。杭間距離は1.13～1.15mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器、土錘があり、その大半は、土師器である。

出土遺物

土師器（第31図153～157）

153・154は小杯で、155は小皿であり、底部外面はすべて回転ヘラ切りである。156・157は羽釜で、口縁部下には鍔が付く。157の外面には煤が付着する。

土錘（第31図158）

須恵質の土錘で、円筒形を呈す。

砥石（第31図159）

表裏両面、外側面を使用する。約½が欠損する。

ＳＸ－11（第21図）

ＳＸ－11は、Ｂ区南西部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＸ－10を切って掘り込まれていた。平面形はほぼ方形で、長辺1.75m、短辺1.05m以上、深さ0.54mを測る。長軸方向はＮ－82°24′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.607～16.688mを測る。埋土は基本的に黒色粘質土であるが、褐色粘質土の土粒、ブ

ロックの含有量により４層に分層される。付属遺構として、２個の杭穴と西壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径約14cm、深さ約14cmである。杭間距離は1.00mである。段部は２段で、底面からの高さは、下段面が20cm、上段面が31cmである。遺物は、須恵器、土師器、土錘があり、その大半は土師器であった。遺物量は、遺構の規模に比べ多く、かつ、完形に近い遺物が比較的多かった。また、164の杯の内面に貼り付いた状態で176の小皿が出土した。

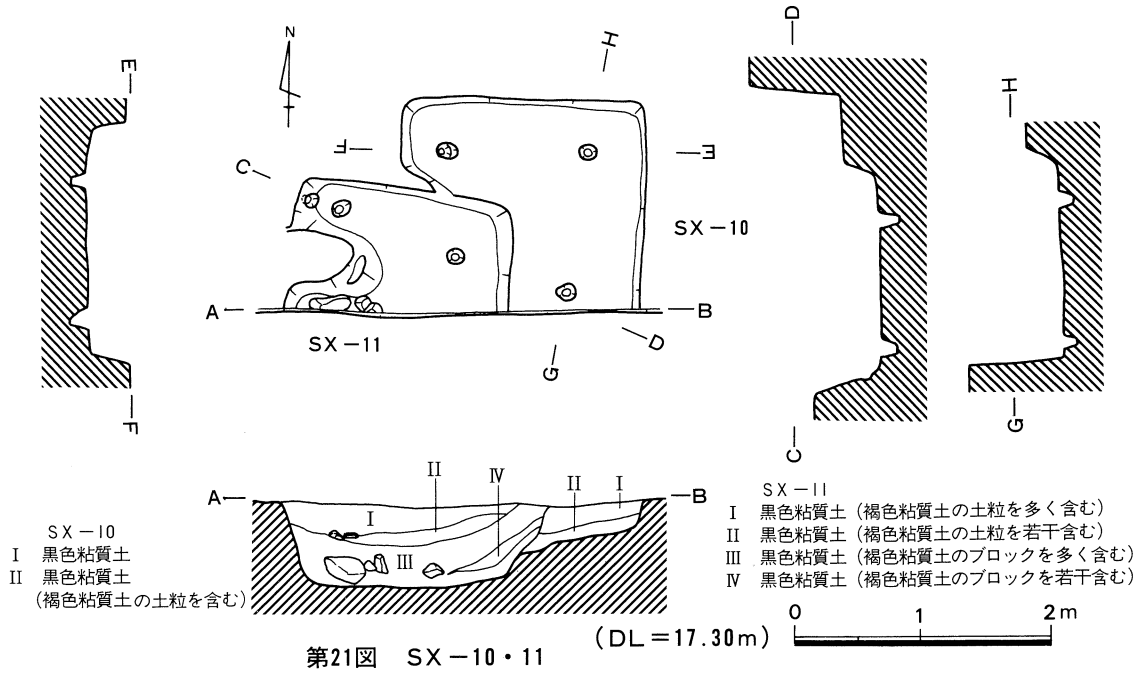
出土遺物

須恵器（第32図160）

杯で、底部外面は回転糸切りである。

土師器（第32・33図161～180）

161～164は杯で、底部外面は、161～163が回転ヘラ切り、164が糸切りである。165～174は小杯で、底部外面は、165～170・172・173が回転ヘラ切り、171・174が糸切りである。体部の形態には、上外方へほぼ真直に上がるもの、内湾気味に上がるものがあり、口縁部の形態には、体部の形態がそのまま続くもの、外傾ないし若干外反するものがある。175は椀で、底部外面には「ハ」の字状に開く高台が付く。176・177は小皿で、176の口縁部内面には凹線が回る。底部外面は２点とも回転ヘラ切りである。178は台付小皿で、底部外面には「ハ」の字状に開く高さ1.6cmの高台が付く。179は甕で、胴部は若干外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は、若干肥厚し、丸く仕上げる。頸部内面には平行のタタキ目が残存する。外面には、煤の付着は認められない。180は羽釜で、口縁部下には鍔が付く。外面にはハケ目と縦方向のタタキ目が残存する。外面には煤の付着は認められない。



第21図　SX－10・11

ＳＸ－12（第22図）

ＳＸ－12は、Ｂ区中央部北寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構の北側は、調査区外である。また、遺構は、ＳＫ－96を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺2.04ｍ、短辺1.50ｍ以上、深さ0.57ｍを測る。長軸方向はＮ－89°12′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.736～16.804ｍを測る。埋土は、２層に分層され、上層が黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を含む黒色粘質土である。付属遺構として、４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径12～14㎝、深さ６～10㎝である。杭間距離は0.65～0.95ｍである。段部の高さは底面から32㎝である。遺物は、須恵器、土師器、土錘があるが、大半が細片で、図示できたのは２点であった。

出土遺物

土師器（第33図181）

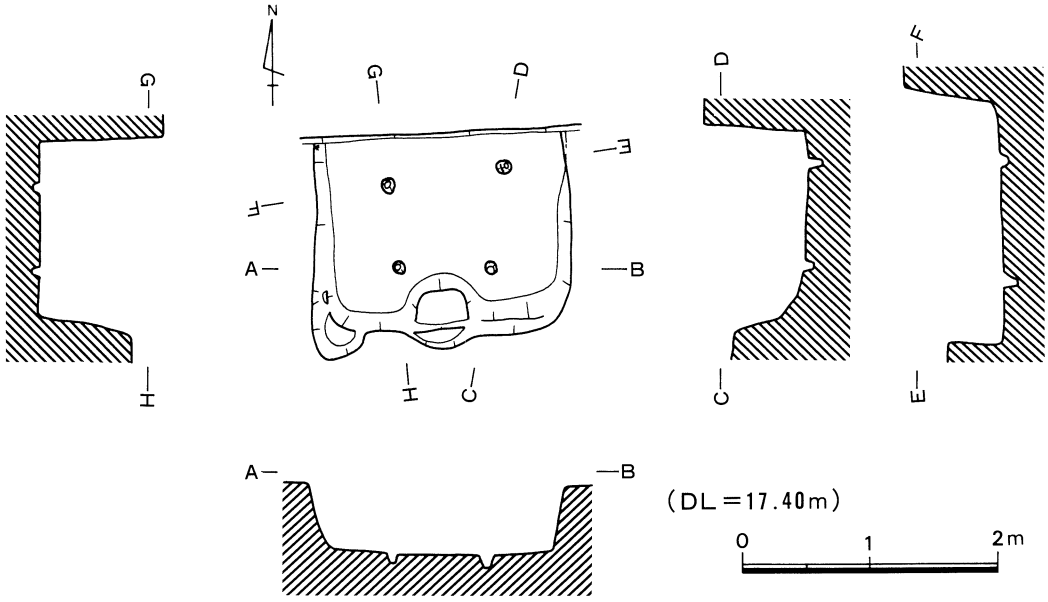
耳皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。

土錘（第33図182）

土師質の土錘で、ほぼ円筒形を呈す。

ＳＸ－13

ＳＸ－13は、Ｂ区中央部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＸ－97及びＳＸ－14を切って掘り込まれていた。平面形は方形で、長辺1.56ｍ、短辺1.50ｍ、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ－15°31′－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁は平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.771～16.794ｍを測る。埋土は褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘



第22図　ＳＸ－12

質土である。付属遺構として、４個の杭穴と東壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径６～10cm、深さ４～５cmである。杭間距離は0.63～0.93mである。段部の高さは底面から21cmである。遺物は、須恵器、土師器があるが、大半が細片であった。

出土遺物

土師器（第33図183・184）

183は杯、184は皿である。２点とも底部外面は回転ヘラ切りである。

須恵器（第33図185）

鉢であり、焼成は瓦質土器に似る。調整は須恵器の手法であり、内面が同心円文のタタキ、外面が平行のタタキの後に回転カキ目調整を施す。

ＳＸ－14

ＳＸ－14は、Ｂ区中央部東寄り、第Ⅳ層上面で検出した。遺構はＳＫ－97・98を切って掘り込まれていた。一方、東端部をＳＸ－13に切られていた。平面形は方形で、長辺1.86m、短辺1.60m、深さ0.62mを測る。長軸方向はＮ－14°23′－Ｅである。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で上がる。底面の標高は16.718～16.779mを測る。埋土は２層に分層され、上層が褐色粘質土の土粒を若干含む黒色粘質土、下層が褐色粘質土の土粒を比較的多く含む黒色粘質土であった。付属遺構として、４個の杭穴と東壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径６～10cm、深さ約５cmである。杭間距離は0.70～0.85mである。段部は、ＳＸ－13に切られているため、残存高４cmであるが、30cm程度はあったものと推測される。遺物は、須恵器、土師器、土錘があり、その大半は土師器が占めるが、ほとんど細片で、図示できたのは６点である。

出土遺物

須恵器（第33図186）

杯蓋で、天井部中央には丸味のあるつまみが付く。

土師器（第33図187～190）

187～189は杯である。体部から口縁部にかけては上外方へほぼ真直上がる。190は皿である。何れも底部外面は回転ヘラ切りである。

土錘（第33図191）

土師質の土錘で、紡錘形を呈す。

ＳＸ－15（第23図）

ＳＸ－15は、Ｂ区東部、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は、ＳＫ－97の北東端を切って掘り込んでいる。平面形は方形で、長辺1.65m、短辺1.60m、深さ0.45mを測る。長軸方向はＮ－8°58′－Ｅである。断面形はほぼ逆台形を呈し、壁は平坦な底面から概ね垂直に近い角度で上がるが、一部袋状をなす箇所もある。底面の標高は16.848～16.913mを測る。埋土は、２層に分層され、上層が褐色粘質土の土粒を多量に含む黒色粘質土、下層が黒色粘質土である。付属遺構と

して、４個の杭穴と南壁に掘り残された階段状の段部を検出した。杭穴の規模は径８～13㎝、深さ３～６㎝である。杭間距離は0.67～0.85ｍである。段部の高さは底面から25㎝である。遺物は、須恵器、土師器、土錘があり、その大半は土師器が占めるが、ほとんど細片であった。

出土遺物

土師器（第33図192・193）

192は杯、193は皿である。２点とも底部外面は回転ヘラ切りである。

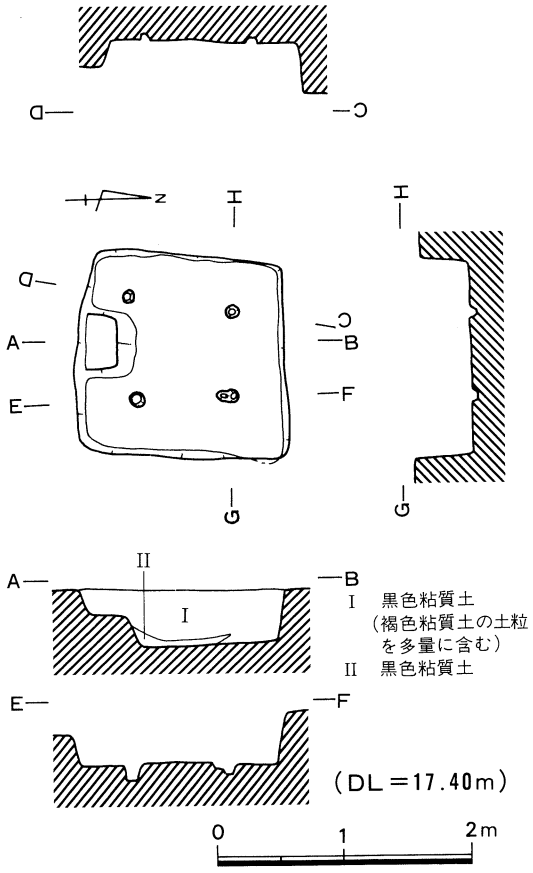
土錘（第33図194）

土師質の土錘で、紡錘形を呈す。

その他の遺構と遺物

遺構

遺構の大半はピットであり、その多くは、建物跡等は確認できなかったが柱穴とみられる。掘り方は、円形ないし方形を呈し、黒色粘質土を埋土とする。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、土錘等があるが、ほとんどが細片で、出土量も僅かであった。この内、図示できたのは７点で、Ｐ－１～６から出土している。また、この中には混入とみられる遺物（197・198）も含まれる。



第23図　ＳＸ－15

Ｐ－１は、一辺1.35ｍ、深さ0.32ｍを測る方形のピットで、ＳＸ－１・２に切られている。Ｐ－２は、径0.56ｍ、深さ0.08ｍを測る円形のピットである。Ｐ－３・４は、一辺1.35～1.95ｍ、深さ0.68～0.76ｍを測る方形のピットで、Ｐ－３はＰ－４に、Ｐ－４はＳＸ－７にそれぞれ切られてる。Ｐ－５・６は、径0.28～0.60ｍ、深さ0.19～0.24ｍを測る円形のピットである。

出土遺物（第33図195～201）

195はＰ－１出土の土師器の椀で、底部外面は回転ヘラ切りである。196はＰ－２出土の土師器の杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。197はＰ－３出土の弥生土器の甕で、外面にはタタキ目が残存する。198・199はＰ－４出土の須恵器と土師器である。198は杯蓋で、天井部はヘラ切りである。199は杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。200はＰ－５出土の土師器の杯で、底部外面は糸切りである。201はＰ－６出土の土師器の小皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。

註

(1) この遺構の時期を古代の範疇で捉えた場合、現時点では全国的に類例がなく、その性格についても、兵舎や室(むろ)等が考えられるが、明確ではない。底面に杭穴が残存することから、上部構造も考慮され、竪穴遺構ともみることができるが、本報告書では、性格不明遺構（ＳＸ）として序述している。

(2) 土師器の羽釜が共伴するＳＸ－９～11では、第９表にみるように法量において大きく２つに分けることができる。すなわち、口径8.5～11.0cm、器高2.0～4.5cmの一群と口径12.5～1.80cm、器高3.0～6.0cmの一群とである。これらは、明らかに意図的に製作されたものとみられ、それゆえに前者を小杯、後者を杯という呼称で表現したい。また、土師器の羽釜が共伴しない他の遺構では、第10表のように小杯と杯の中間的な一群が存在する。それらは、口径11.0cm以上、器高2.5cm以上であり、従前から杯と称されているもので、本報告書でもそれに従うこととした。

(3) 田村遺跡群で検出された弥生時代前期前半の住居址（Loc. 18のＳＴ１、Loc. 25のＳＴ３・５等）に類例を求めることができる。（高知県教育委員会『田村遺跡群』第２分冊1986年）

第２表　竪穴住居址計測表

遺構番号	平面形態	規模（m）	主軸方向（Nは真北）	柱穴（主柱穴）	施設	面積（㎡）	備考
ＳＴ－25	円形	5.05	―――	不明確	壁溝、ピット等	20.03	弥生時代
ＳＴ－26	方形	4.4×4.3	N-74°-W	4	ピット等	18.92	古墳時代
ＳＴ－27	〃	5.0×4.4	N-28°-W	不明確	〃	22.00	〃

第３表　掘立柱建物跡計測表

遺構番号（建物名）	規模				面積（㎡）	棟方行（Nは真北）	備考
	梁×桁（間）（間）	梁間m×桁行m（尺）（尺）	柱間距離 梁m（尺）	柱間距離 桁m（尺）			
ＳＢ－56	2×2	3.3(11)×4.2(14)	1.5(5)～1.8(6)	1.8(6)～2.4(8)	13.86	N-3°5′-E	棟に歪み
ＳＢ－57	2×―	4.2(14)×――	1.8(6)～2.4(8)	―――	―――	N-2°19′-E	桁は不明
ＳＢ－58	2×―	4.2(14)×――	1.8(6)～2.4(8)	―――	―――	N-14°2′-E	〃

第４表　土壙計測表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向	備考
		長辺m	短辺m	深さm	(Nは真北)	
ＳＫ－79	舟形	2.55	0.80	0.42	N-89°-E	弥生時代、側石を有す
ＳＫ－80	方形	2.30	0.88	0.18	N-78°-E	弥生時代
ＳＫ－81	舟形	1.50	0.40	0.09	N-87°-E	〃
ＳＫ－82	〃	2.00	0.40	0.09	N-61°-E	〃
ＳＫ－83	〃	(1.36)	0.58	0.20	N-60°-E	〃
ＳＫ－84	不整楕円形	1.79	1.36	0.16	N-5°-E	〃
ＳＫ－85	〃	1.70	1.60	0.12	N-89°-E	〃
ＳＫ－86	方形	1.67	(1.47)	0.09	N-74°-E	古墳時代
ＳＫ－87	〃	1.20	1.14	0.05	N-71°-E	〃
ＳＫ－88	〃	1.78	1.72	1.11	N-0°-E	古代
ＳＫ－89	〃	2.83	(0.53)	0.18	N-89°-W	〃
ＳＫ－90	不整形	5.38	5.20	0.09	N-3°-W	〃
ＳＫ－91	方形	(2.20)	(0.24)	0.67	N-88°-W	〃
ＳＫ－92	不整形	1.50	0.86	0.08	N-85°-W	〃
ＳＫ－93	不整方形	5.60	(3.80)	0.72	N-84°-W	〃
ＳＫ－94	〃	3.15	(2.58)	0.35	N-87°-W	〃
ＳＫ－95	舟形	1.06	0.39	0.09	N-5°-E	〃
ＳＫ－96	不整形	(2.00)	(0.64)	0.13	N-77°-E	〃
ＳＫ－97	不整方形	(4.00)	3.29	0.43	N-88°-E	〃
ＳＫ－98	〃	2.80	(0.56)	0.16	N-72°-E	〃
ＳＫ－99	方形	1.78	1.59	0.29	N-8°-E	〃
ＳＫ－100	不整楕円形	1.90	(0.95)	0.16	N-1°-W	〃

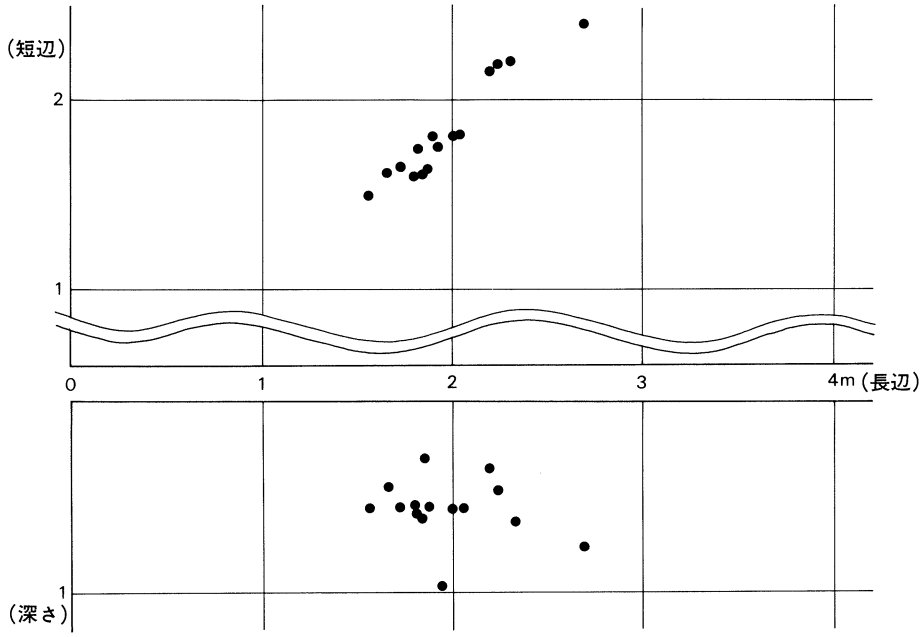
第５表　塀跡計測表

遺構番号	規模			方向	備考
	柱穴数	全長m（尺）	柱間距離m（尺）	(Nは真北)	
ＳＡ－16	7	11.25（37.5）	1.65(6.5)～2.1(7)	N-6°8′-E	

第６表　性格不明遺構計測表

遺構番号	平面形態	規模 長辺m	規模 短辺m	規模 深さm	長軸方向（Nは真北）	階段状遺構の位置	備考
ＳＸ－１	方形	1.80	1.60	0.55	N-87°26′-E	南　側	
ＳＸ－２	〃	1.88	1.63	0.55	N-89°8′-E	〃	
ＳＸ－３	〃	(2.02)	(1.49)	0.46	N-1°9′-W	〃	
ＳＸ－４	〃	2.20	2.15	0.35	N-1°55′-W	〃	
ＳＸ－５	〃	1.75	(0.83)	0.60	N-3°51′-W	〃	
ＳＸ－６	〃	2.31	2.20	0.64	N-84°7′-E	〃	
ＳＸ－７	〃	1.93	1.73	0.98	N-87°35′-E	〃	
ＳＸ－８	〃	1.80	(1.14)	0.56	N-3°12′-E	〃	
ＳＸ－９	〃	2.70	2.40	0.76	N-86°34′-W	〃	
ＳＸ－10	〃	1.90	(1.64)	0.31	N-89°31′-W	西　側	
ＳＸ－11	〃	1.75	(1.05)	0.54	N-82°24′-W	〃	
ＳＸ－12	〃	2.04	(1.50)	0.57	N-89°12′-W	南　側	
ＳＸ－13	〃	1.56	1.50	0.56	N-15°31′-E	東　側	
ＳＸ－14	〃	1.86	1.60	0.62	N-14°23′-E	〃	
ＳＸ－15	〃	1.65	1.60	0.45	N-8°58′-E	南　側	

第７表　性格不明遺構規模分布表



Ⅲ 総　　括

本年度の調査は、金屋地区の北部を対象地として実施した。昨年度実施した第21次調査地区の北側に隣接する部分で、第21次調査で検出したＳＤ－49の延長の有無を確認するとともに、約70ｍ四方は未調査のため、調査を必要とする部分でもあった。

調査結果としては、政方跡に比定でき得る遺構は検出されなかったが、竪穴住居址、官衙関連とみられる掘立柱建物跡や塀跡、土壙、性格不明遺構等の遺構が確認された。また、遺物も例年となく纏まって出土しており、土佐国府跡の様相を考える上では貴重な資料である。以下、各時代ごとに遺構、遺物について、若干の考えを述べ、総括としたい。

１．弥生時代

遺構では、ＳＴ－25、ＳＫ－79～85が該当する。ＳＴ－25の時期は、57の如く胴部外面にタタキ目が存し、かつ、小さいが平底の底部を有する遺物等が出土している点から、本地方のヒビノキⅡ式土器の時期に該当するとみられ、弥生時代終末と考えられる。土壙には、側石を配す木棺墓（ＳＫ－79）[(1)]と所謂「土壙」（土坑墓）[(2)]（ＳＫ－81～83）がある。ＳＫ－80は、側石の存在は認められないが、ＳＫ－79同様２段掘りであり、本棺墓ではなかろうか。ＳＫ－84・85は、遺存状態が不良で、遺物量も少なく、その性格は不明確といわざるを得ない、これら土壙は、比較的集中し、ＳＫ－84・85のように切り合った遺構もあり、ある程度の時期差は考慮しなければいけないが、遺物は、先述のもの以外に出土しておらず、住居址同様、概ね弥生時代終末と考えてよくはなかろうか。また、細片のため図示できなかったが、包含層出土の遺物もほぼこの時期と判断される。このように、遺構・遺物が多量に検出されたことにより土佐国府成立以前のこの地域の文化の様相がさらに１歩明確にされたことは注目すべきである。

２．古墳時代

遺構では、ＳＴ－26・27、ＳＫ－86・87が該当する。遺物は、遺構出土のものが少なく、遺物包含層から比較的纏まって出土しており、須恵器の杯で３種類の調整技法が認められる。すなわち、杯蓋の天井部と杯身の底部の調整技法においてであり、（１）ロクロからの切り離しの際のヘラ切り痕を残さず、すべて回転ヘラ削り調整を施すもの（２・87）、（２）回転ヘラ削り調整も一部施すが、ヘラ切り痕を残すもの（１・３・４）、（３）回転ヘラ削り調整を全く施さず、ヘラ切り痕を残すもの（５～７）がある。また、３・４はたちあがりの高さに違いがあり、若干の時期差を感じる。これらの時期は、総じて６世紀後半から７世紀前半といえるのではなかろうか。遺構の内、ＳＴ－26の時期は、出土した土師器の甕（62～64）の口縁部の形態に若干の差異を認めるものの、概ね６世紀末から７世紀初頭に位置付けてよくはなかろうか。他の遺構については、出土遺物が極めて少なく遺物包含層の遺物をもって時期を考慮すれば、大きく６世紀後半から７世紀前半と考えざるを得ない。

なお、包含層から７世紀後半から８世紀初頭に位置付けられる須恵器(10)も１点出土している。

3．古代

ここでは、奈良時代以降、平安時代の遺構・遺物について述べる。遺構ではＳＢ－56～58、ＳＫ－88～100、ＳＡ－16、ＳＸ－１～15等が該当する。遺物には、奈良時代に属する須恵器（11～13・99等）、土師器（74・121等）から濃緑色を呈す近江産（27・28）・淡緑色を呈す洛西産（29）の緑釉陶器[(3)]、摂津Ｃ型[(4)]の羽釜が出土する10世紀代のものがある。奈良時代の遺物の内、遺構出土のものは共伴遺物からみて、混入したものと考えられ、遺構として、奈良時代に位置付けられるものは確認できなかった。なお、これらの時期は、概ね８世紀後半に位置付けられるものであろう。

よって、今次の調査で確認された遺構の時期は、９世紀から10世紀にかけてである。これらの遺構は、羽釜の有無により、２期に大別することができる。

Ⅰ期　遺構では、ＳＢ－56～58、ＳＫ－88～93・100、ＳＸ－１～８・12～15が該当し、杯類、皿類の底部外面はすべて回転ヘラ切りである。

Ⅱ期　遺構では、ＳＸ－９～11、ＳＫ－94が該当し、杯類、皿類の底部外面は回転ヘラ切りによるものが主であるが、糸切りの杯類、皿類も共伴する。

Ⅱ期の遺物の中で、羽釜は摂津Ｃ型[(5)]に属し、その時期を10世紀代とみることができる。また、口縁部や胴部の形態から、３類に分けることができる。

羽釜Ａ類：胴部は内傾して立ち上がり、口縁部に至るもの。（156・157）

羽釜Ｂ類：胴部はやや内傾して立ち上がり、口縁部でさらに内傾するもの。（81・180）

羽釜Ｃ類：胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に至るもの。（148・149）

これら羽釜は、口縁部下に鍔が付くものであるが、鍔の貼付部位に若干の差異が認められる。羽釜Ａ・Ｂ類は口縁端部下約５㎜から、羽釜Ｃ類はほぼ口縁端部に付く。この差異は、時期差によるものとみられ、遺構の切り合い関係からもいえるようである。すなわち、羽釜Ａ類→羽釜Ｂ類→羽釜Ｃ類の順になると考えてよいようである。

次に、ＳＸ－９・11出土の高台付皿と小皿ついてみてみる。139・140の高台付皿と176の皿は、皿部が極端に浅く、口縁部内面に凹線を回らすもので、托とも呼称される器形であり、薬師寺西僧房床面土器の資料[(6)]にその類例を見い出すことができ、10世紀後葉に位置付けられるものである。これら遺物から考慮して、Ⅱ期については10世紀後半と時期設定することができるのではなかろうか。これから判断して、Ⅰ期を９世紀から10世紀前半と考えることができよう。

さて、Ⅰ期の遺構は、重複関係、遺物の差異等により、当然時期差が考えられるものである。まず、ＳＸ－３～６についてみてみると、ほぼ等間隔で交互に配置されていること、ＳＸ－３・６の土師器の椀―（90）と（107）―とが形態的に類似すること、ＳＸ－４～６の土師器の径高指数が22前後であることなどから、ほぼ同時と判断される。また、土師器の皿の口縁部内面を若干折り返すもの（91・92）や土師器の内外面に若干ヘラ磨きを施すもの（103・104）が存在することから、９世紀前半と位置付けられよう。そして、これに続行するものとして、他の

多くの遺構群をあげることができ得る。しかし、これらでも遺構の重複関係がみられ、その時期差を感じ得るものの、現時点では明確な時期設定はできず、一応大きく９世紀後半から10世紀前半としておきたい。ただ、中でも、ＳＢ－56・57、ＳＸ－13は比較的古く、ＳＫ－88、ＳＸ－12・14は比較的新しい時期に位置付けられるものであろう。また、遺構の重複関係から先述のＳＸ－３～６に先行する遺構も存するが、遺物が極めて少なく、今回はⅠ期の範疇で捉えておきたい。

Ⅱ期の遺構は、先にも若干触れたが、遺構の重複関係、遺物等により３小期に細分できる。すなわち、Ⅱ－１期がＳＸ－10、Ⅱ－２期がＳＸ－11とＳＫ－94、Ⅱ－３期がＳＸ－９である。ただし、その存続期間は不明確であって、３小期併せてここでは大きく10世紀後半と把握しておきたい。

古代の項の最後として、Ⅱ期の遺物と性格不明遺構について述べてみたい。

Ⅱ期の遺物の内、杯類については、調査概要の中で触れたように、法量により杯と小杯に区分が可能である。この杯の分化は、田村遺跡群[7]、芳原城跡[8]、十万遺跡[9]の資料でも見出すことができるが、時期的には15世紀が中心である。この間の資料には、現時点で類例がなく、この分化は、この時期の１つの特徴として指摘できるのかもしれない。

また、土師器の中には、回転ヘラ切り底と糸切り底が共伴し、特に、ＳＸ－11の杯（164）の内面に小皿（176）が貼り付いた状態で出土している。そして、Ⅰ期の遺物の中には、糸切り底のものは存在しない。このことから、本地方の土師器における糸切り技法の出現をほぼこの期、すなわち、10世紀後半とすることができるのではなかろうか。ただし、土師器の中での糸切り底の占める割合は低く、一般化するのは、11世紀以降とみられる。須恵器については、出土量が少なくなるが、160のように、ベタ高台で糸切り底のものが出土しており、この時期には、須恵器も糸切り底に転化していたと考えられる。

性格不明遺構（ＳＸ）について古代という範疇で捉えた場合、その類例は発見されていない。しかし、中世以降になると西日本では山口県の下右田遺跡[10]、東日本では関東以北で、比較的多くの類例が存す。そして、その性格については、住居址、貯蔵庫（室）、作業場、兵事の簡易住居[11]、集会場、季節的住居等々があり、また、その名称についても、方形竪穴遺構[12]、竪穴状遺構[13]、方形竪穴建築址等[14]があり一定していない。以上の如き諸例とその規模等を今回発見したＳＸと比較した場合、一辺で0.5～1.0mほど大きく[15]、階段状の段部が存在しないものや位置の異なるもの等があり、一概にこれを比較検討の材料とするには難があるようである。

ＳＸの特徴の１つとして挙げられるものは、煮炊用具として甕が比較的多く出土している点である。この甕の出土は、一時的であれ、生活を行った痕跡とみなければならない。一方、住居と即断するには、小規模で、恒常的なものとは考え難い。また、一辺1.8m前後のものについては、室（むろ）（貯蔵穴）[16]と考えた方が妥当かもしれない。本地方では、古代以降の一般的住居は、ほとんどが掘立柱建物であり、このＳＸは、特殊な性格を有するものとした方が合理的である。その際、規格性を有し、かつ、集中的に存在すること、それに、国府内という地域を加味して考えれば、兵舎とそれに伴う室等ではなかろうか。[17]

4．まとめ

以上、今次の調査について、序述したが、その調査地区はＳＸ等の存在から政庁隣接地区とは考え難い。よって今後の調査では、調査地区の再検討も必要であろう。その際、有望視されるのは比江地区中央部の神木、松ノ下、金屋に挟まれた地区と北部の内裏を中心とする地区ではなかろうか。中央部は、８世紀後半から９世紀前半にかけての建物跡が多く確認されている半面、13世紀から14世紀にかけての遺構も多い。北部は、古墳時代の遺構は比較的多く確認されている半面、８世紀後半から９世紀前半の建物跡の検出例は少ない等の問題点は存するが、従来の調査より引き出された一応の結論である。いずれにしても来年度の調査は、重要遺跡確認緊急調査として土佐国府跡発掘調査を始めての十年目に該当し、１つの大きな節目でもあり、大きな成果を期待したいものである。

註

（１）土佐山田町教育委員会『ひびのき遺跡』1976年
（２）斎藤　忠『日本史小百科　墳墓』1978年
（３）平尾政幸氏（京都市埋蔵文化財研究所）の御教示による。
（４）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
（５）(4) に同じ
（６）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　1985年
（７）高知県教育委員会『田村遺跡群』第６～10分冊　1986年
（８）高知県教育委員会『芳原城跡発掘調査報告書』　1984年
（９）香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』　1988年
(10) 山口県教育委員会『下右田遺跡』　1978年
(11) 浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅶ』　1985年　　鴻巣市遺跡調査会『赤台遺跡』　1985年
栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区』　1987年
(12) 小山岳夫「大井城跡の竪穴状遺構」『長野県考古学誌』第54号　1987年
(13) (11) の『自治医科大学周辺地区』に同じ
(14) (11) の『浪岡城跡Ⅶ』に同じ
(15) 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』　1982年
(16) 山中敏史氏の御教示により、室の可能性も指摘され、今次の報告ではＳＸとして扱った。
(17) 宮本長二郎氏の御教示による。

第8表　遺物観察表1

挿図番号	層位番号	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
24－1	第Ⅱ層	須恵器 杯（蓋）		11.8 3.9 —— ——	天井部は丸味を有し、口縁部は、下外方に下り、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅓に回転ヘラ削り調整、天井部内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－2	〃	〃 〃		13.4 4.0 —— ——	天井部は丸く、口縁部は、下外方に下り、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部ほぼ全域に回転ヘラ削り調整。天井部内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	天井部外面にヘラ記号がある。
〃－3	〃	〃 杯（身）	たちあがり高 受部径	11.9 3.6 0.9 15.0	底部は浅く、ほぼ平らである。 受部は上外方へのび、端部は丸い。たちあがりは内傾してのび、端部を細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切り後ナデ調整。底部外面の一部に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	
〃－4	〃	〃 〃	たちあがり高 受部径	12.2 3.9 0.7 14.4	底部は比較的深く、平らである。 受部は短く上外方を向き、端部は丸い。たちあがりは短く内傾し、端部を細く仕上げる。	〃	
〃－5	〃	〃 〃	たちあがり高 受部径	9.8 3.6 0.5 11.8	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切り後ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	
〃－6	〃	〃 〃	たちあがり高 受部径	9.4 3.4 0.5 11.4	〃	〃	
〃－7	〃	〃 〃	たちあがり高 受部径	10.2 4.0 0.4 12.6	〃	〃	
〃－8	〃	〃 瓶		11.5 (5.5) —— ——	頸部は外反してのび、口縁部は上外方へ真直上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部外面下端に一条の凹線を回らす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面には自然釉がかかり、調整不明、他は回転ナデ調整。	
〃－9	〃	〃 甕		29.0 (6.5) —— ——	口頸部は大きく外反してのび、端部を肥厚する。端部は内傾する平面を成す。外端面は、外傾する浅い凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頸部外面に回転カキ目調整後刺突文を施す。他は回転ナデ調整。	内面には自然釉がかかる。
〃－10	〃	〃 杯（蓋）	つまみ径	14.0 3.2 2.2 ——	天井部はほぼ平らで、中央部には擬宝珠形のつまみが付く。口縁部は斜め下方へ下り、端部を丸く仕上げる。口縁部内面には、かえりを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½に回転ヘラ削り調整。天井部内面中央部のみナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－11	〃	〃 〃	つまみ径	14.5 2.4 2.4 ——	天井部はほぼ平らで、中央部には扁平なつまみが付く。口縁部は斜め下方へ下り、端部を下方へ屈曲さす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½に回転ヘラ削り調整。内面の大半はナデ調整。他は回転ナデ調整。	外面は部分的に自然釉が剝落する。
〃－12	〃	〃 杯（身）		12.8 4.0 —— 8.9	底部は平らで、端部に短い高台が付く。高台端部は外傾する凹面を成す。体部、口縁部は上外方へ真直のび、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面とも回転ナデ調整。	
〃－13	〃	〃 〃		13.7 4.5 —— 9.8	底部は平らである。 体部、口縁部は、上外方へ真直にのび、端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切りで、板状圧痕が残存。他は摩耗しており、不明。	
〃－14	〃	〃 〃		13.3 3.1 —— 8.0	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切り後、縁辺部から体部外面にかけてナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
〃－15	〃	〃 〃		12.5 4.6 —— 8.3	底部は平らで、体部から口縁部にかけては内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	アキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切り後、ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	

第８表　遺物観察表２

挿図番号	層位番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
24－16	第Ⅱ層	須恵器 椀	—— (3.3) —— 8.2	底部は丸味を有し、外底端には、「ハ」の字状の高台が付く。高台端部は、下方を向く平面を成す。体部は内湾気味に上がる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は、ヘラ切り。体部外面下端に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	
〃－17	〃	〃 皿	16.9 2.2 —— 13.4	底部はほぼ平らで、体部は外反気味に短く上がり口縁部に至る。口縁端部を肥厚する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は、回転ヘラ切り、他は回転ナデ調整。	
〃－18	〃	〃 〃	15.4 (2.3) —— 13.5	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ短く上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は、回転ヘラ切り後にナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－19	〃	〃 〃	16.6 2.2 —— 14.0	〃	〃	内外面とも部分的に火だすきがかかる。
〃－20	〃	〃 甕	22.0 (6.1) (28.5) ——	口縁部は、上胴部から「く」の字状に外反する。端部は内傾する浅い凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。胴部外面は、平行と格子目のタタキ、内面は同心円文のタタキの後にナデ調整。	
25－21	〃	〃 〃	16.3 (7.9) (23.9) ——	胴部は上内方へのび、頸部は短く上方へのび、口縁部は外傾する。口縁端部は凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。胴部内面は、同心円文のタタキの後にヨコナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－22	〃	〃 〃	21.0 (15.0) 23.6 ——	胴部はほぼ中位に最大径を有し、内湾気味に上がる。口縁部は、「く」の字状を成し、端部は内傾する平面を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。胴部外面は、格子目のタタキの後にハケ調整、内面は同心円文のタタキを施す。他は、摩耗が著しく、調整不明。	
〃－23	〃	〃 〃	—— (17.7) (37.0) ——	底部は丸く、胴部は内湾気味に上がる。	マキアゲ、ミズビキ成形。外面は、格子目のタタキの後にハケ調整、内面は同心円文のタタキを施す。	
〃－24	〃	〃 鉢	19.9 (5.5) —— ——	体部は上外方へのび、口縁部は短く直立する。口縁端部は、外傾する浅い凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。内面から口縁部外面にかけてヨコナデ調整。	
〃－25	〃	〃 円面硯	外堤径　10.3 (2.5) —— ——	脚台部は「ハ」の字状に開くとみられるが欠損し、透しは不明。外堤外面下端に１条の突帯を配す。陸部は丸味を有し、海部へ至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。外面は回転ナデ調整、内面はナデ調整。	
〃－26	〃	〃 平瓮	全長　(5.6) 全幅　2.6 全厚　0.9 ——	断面四角形で、細長く、両端部が欠損する。端部がややカーブしており、把手ではないかとみられる。	各面ともヘラ削りを施す。	
〃－27	〃	緑釉陶器 碗	15.4 (3.7) —— ——	体部は上外方へのび、口縁部でやや外反する。口縁端部は細く仕上げる。器壁は薄い。	全面に施釉され、外面が淡緑色、内面が濃緑色を呈す。	
〃－28	〃	〃 〃	16.4 (2.3) —— ——	口縁部は上外方を向き、端部を細く仕上げる。口縁外面に花文を施す。	全面に施釉され、内外面とも濃緑色を呈す。	
〃－29	〃	〃 〃	—— (1.3) —— 8.2	底部はやや丸味を有し、外端部には、断面逆台形状の高台が付く。高台端部は、下方を向く平面を成す。	底部外面は回転ヘラ切り。高台内側以外に施釉され、内外面とも淡緑色を呈す。	
〃－30	〃	土師器 杯	12.6 3.8 —— 7.4	底部はやや丸味を有す。体部は上外方へ上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。	

第８表　遺物観察表３

挿図番号	層位番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
25－31	第Ⅱ層	土師器 小杯	10.0 3.0 —— 6.5	底部は平らで、体部は上外方へ真直のび口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。口縁端内面に浅い凹線が回る。	底部外面は回転ヘラ切り。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－32	〃	〃 〃	9.8 2.5 —— 6.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ真直のび口縁部で若干外傾する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。器面は摩耗しており調整不明。	
〃－33	〃	〃 〃	9.9 3.3 —— 7.0	底部はほぼ平らで、体部は外反気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－34	〃	〃 〃	10.1 3.6 —— 7.2	底部は丸味を有し、体部は上外方へ真直のび口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	〃	
26－35	〃	〃 椀	—— (4.8) —— 9.5	底部は平らで、端部に大きく「ハ」の字状に開く高さ 1.5cmの高台が付く。端部は丸い。体部は内湾気味に上がる。	器面は摩耗しており調整不明。	
〃－36	〃	〃 皿	12.4 1.8 —— 7.7	底部はやや丸く、体部は上外方へのび、口縁部でやや外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、縁辺部を中心にナデ調整。内面中央部はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－37	〃	〃 小皿	10.2 1.3 —— 6.6	底部は平らで、体部は上外方へ真直のび、口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－38	〃	〃 〃	10.3 1.5 —— 6.6	底部は平らで、体部は内湾気味にのび、口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残存する。他は回転ナデ調整。	
〃－39	〃	〃 〃	10.2 1.8 —— 6.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方へのび、口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－40	〃	〃 〃	9.2 2.0 —— 6.0	〃	底部外面は回転ヘラ切り。器面は摩耗しており調整不明。	
〃－41	〃	〃 台付皿	10.6 4.1 —— 5.8	底部は平らで、体部は上外方へ真直のび、口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。高台は「ハ」の字状に開き、裾部でさらに開く。端部は丸く仕上げる。	器面は摩耗しており調整不明。	
〃－42	〃	〃 〃	12.5 4.5 —— 6.6	底部は平らで、体部から口縁部にかけて直線的にのびる。口縁端部は細い。高台は「ハ」の字状に開き、端部は丸く仕上げる。	〃	
〃－43	〃	〃 小型甕	25.0 (5.5) —— ——	胴部は内湾気味に上がり、口縁部で大きく外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ともナデ調整。他はハケ調整。	外面には煤が付着する。
〃－44	〃	黒色土器 椀	15.7 3.8 —— 9.0	底部はほぼ平らで、端部に断面逆三角形の高台が付く。体部は内湾気味に上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸味を有す。	底部外面ナデ調整。外面ヨコナデ調整。底部内面には一方向に粗くヘラ磨き、口縁内面全面に横方向のヘラ磨きを施す。	
〃－45	〃	土錘	全長 4.2 全幅 1.4 重量（g） 9.8	ほぼ円筒形であり、完形。孔径は５㎜である。	須恵質の土錘。	

第８表　遺物観察表４

挿図番号	層位番号 遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
26－46	第Ⅱ層	土錘	全長 4.5 全幅 2.4 重量（g） 26.9	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は６㎜である。	須恵質の土錘。	
〃－47	〃	〃	全長 4.2 全幅 2.3 重量（g） 27.2	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は８㎜である。	〃	片面に自然釉がかかる。
〃－48	〃	〃	全長 4.6 全幅 1.3 重量（g） 7.5	紡錘形であり、完形。 孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	
〃－49	〃	〃	全長 4.1 全幅 1.6 重量（g） 8.7	〃	〃	
〃－50	〃	〃	全長 4.1 全幅 1.7 重量（g） 11.4	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は６㎜である。	〃	
〃－51	〃	〃	全長 5.0 全幅 1.8 重量（g） 13.5	紡錘形であり、両端が一部欠損。 孔径は６㎜である。	〃	
〃－52	〃	〃	全長 3.9 全幅 2.4 重量（g） 15.9	ほぼ円筒形であり、一部欠損。 孔径は５㎜である。	〃	
〃－53	〃	〃	全長 4.5 全幅 1.9 重量（g） 16.7	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は６㎜である。	〃	
〃－54	〃	〃	全長 4.5 全幅 2.2 重量（g） 16.7	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は７㎜である。	〃	
〃－55	〃	〃	全長 4.0 全幅 2.9 重量（g） 23.3	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は12㎜である。	〃	
〃－56	ＳＴ－25	弥生土器 壺	20.2 (3.8) —— ——	頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は外傾する凹面を成す。	口縁部外面はハケ調整。ヨコナデ調整。口縁部内面ハケ調整の後ナデ調整とヨコナデ調整。	
〃－57	〃	〃 甕	—— (3.0) —— 5.0	底部は平らで、胴部は内湾気味に上がる。	底部外面はナデ調整。胴部外面にはタタキ、内面はナデ調整。	
〃－58	〃	〃 甑	—— (5.7) —— 2.0	底部は小さな平坦部を作り、その中央部に径７㎜の円孔を穿っている。胴部は上外方へほぼ真直上がる。	底部外面はナデ調整。胴部外面にはタタキ、内面は指ナデを施す。	
〃－59	〃	〃 支脚	—— (5.5) —— 7.5	脚台部のみ残存。脚台部は下方に下り、裾部で屈曲する。	外面にはタタキ目と指頭圧痕、内面にはしぼり目が残存する。	
〃－60	〃	〃 〃	—— (5.3) —— 6.2	脚台部のみ残存。脚台部はほぼ真直下方へ下る。上底風の底部中央部に径5.5㎜の円孔を穿っている。	外面には面取り風に下から上への指ナデを施す。他はナデ調整で、指頭圧痕が残存する。	
〃－61	ＳＫ－79	〃 壺	15.0 (4.1) —— ——	頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は内傾する平面を成す。	器面は摩耗が著しく、調整不明。	
27－62	ＳＴ－26	土師器 甕	13.1 16.6 15.2 ——	底部は丸く、胴部は内湾気味に上がり、胴部最大径を中胴部上位に有す。上胴部から口縁部にかけては「く」の字状を成す。口縁端部は丸く仕上げる。	胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整。口縁部内面はハケ調整の後に外面共々ヨコナデ調整。	

第８表　遺物観察表５

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
27－63	ＳＴ－26	土師器 甕	21.4 (10.5) 24.4 ――	胴部は内湾気味に上がり、胴部最大径を中胴部上位に有す。口縁部は短く外傾し、端部でさらに外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部外面はヨコナデ調整。他は、器表が剥離しており調整不明。	
〃－64	〃	〃 〃	17.5 (28.6) 23.4 ――	胴部は卵形を呈し、胴部最大径を中胴部下位に有す。口縁部は外傾してのび、さらに外傾し端部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整 胴部外面は強いヨコナデ調整。ナデ調整。胴部内面はナデ調整。	
〃－65	ＳＢ－57	須恵器 皿	16.3 2.0 ―― 12.6	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 他は、器面が摩耗しており調整不明。	
〃－66	〃	土師器 杯	12.6 2.9 ―― 7.9	底部は平らで、体部は上外方へ内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	〃	
〃－67	〃	〃 皿	18.2 1.5 ―― 15.0	底部は平らで、体部は上外方へ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整及び部分的にヘラ磨き。 他は回転ナデ調整で、内底面にのみヘラ磨き。	
〃－68	ＳＢ－58	須恵器 杯（身）	12.6 3.3 たちあがり高0.6 受部径　14.8	底部は浅く、平らである。 受部は上外方へのび、端部は丸い。たちあがりは短く内傾し、端部は細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はヘラ切り後ナデ調整。 底部外面の一部に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	
〃－69	ＳＫ－88	〃 杯	―― (3.0) ―― 8.7	底部は平らで、端部に断面逆台形状の高台が付く。高台端部は下方を向く平面を成す。体部は直線的に上外方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－70	〃	〃 皿	17.1 2.4 ―― 13.5	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	〃	内外面に火だすきがかかる
〃－71	〃	土師器 杯	12.9 3.2 ―― 7.5	底部はほぼ平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部は上外方を向く。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残存する。 口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－72	〃	〃 〃	13.4 4.3 ―― 9.4	底部はやや丸味を有し、体部は上外方へ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－73	〃	〃 〃	11.6 4.8 ―― 6.6	〃	底部外面は回転ヘラ切り。 口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－74	〃	〃 盤	20.4 2.7 ―― 15.0	底部は平らで、高さ８㎜の高台が付く。高台端部は内傾する平面を成す。体部は上外方へ直線的に上がり、口縁部で外傾し、端部を若干肥厚する。	底部外面は回転ナデ調整。他はヘラ磨き。	
〃－75	〃	〃 皿	11.4 2.0 ―― 8.2	底部は丸味を有し、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りの後、ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－76	〃	〃 〃	10.8 2.1 ―― 6.6	底部は丸味を有し、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－77	〃	土錘	全長　4.5 全幅　1.8 重量（g）　13.6	紡錘形であり、完形。 孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	

第８表　遺物観察表６

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
27－78	ＳＫ－93	弥生土器 器台	口径 9.0 器高 (5.5) 胴径 —— 底径 ——	受部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。 脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面はナデ調整。脚台部内面にはしぼり目が残存する。	
28－79	〃	須恵器 杯（身）	口径 12.2 器高 4.4 たちあがり高1.2 受部径 14.6	底部は比較的深く、平らである。受部は短く水平にのび、端部は丸い。たちあがりは内傾してのび、端部を細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面はヘラ切り後ナデ調整。底部外面の一部に回転ヘラ削り調整。底部内面中央にナデ調整。他は回転ナデ調整。	口縁部を中心に焼成時の歪が残存する。
〃－80	〃	砥石	全長 14.3 全幅 5.3 全厚 2.6 重量（g）360.0	河原石を使用しており、表裏両面を使用する。また、縁辺部と表面１ヵ所に敲打痕が残存し、叩石として転用されたとみられる。	――――	石材は砂岩。
〃－81	ＳＫ－94	土師器 羽釜	口径 21.3 器高 4.5 胴径 22.8 底径 ——	胴部はほぼ垂直に上がり、口縁部は内傾し、丸く仕上げる。口縁部下端にやや反り上がる鍔が付く。	胴部外面には横方向のハケ調整。他はヨコナデ調整。特に、口縁部内面と鍔の上面を強くヨコナデ調整する。	
〃－82	ＳＫ－97	弥生土器 支脚	口径 —— 器高 (9.8) 胴径 —— 底径 ——	３個の角が付いていたとみられるが、２個が欠損する。脚台部から受部にかけて開く。	粗製で、各所に指頭圧痕が残存する。脚台外面にはタタキ目、内面にはしぼり目が残存する。	
〃－83	〃	土錘	全長 4.7 全幅 1.5 重量（g） 9.1	紡錘形であり、上端部が一部欠損する。孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	
〃－84	ＳＸ－１	土師器 杯	口径 12.6 器高 (3.0) 胴径 —— 底径 7.7	底部はやや丸味を有し、体部は内湾気味に上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－85	〃	土錘	全長 2.6 全幅 1.2 重量（g） 2.9	ほぼ円筒形であり、一部欠損。孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	
〃－86	〃	〃	全長 4.4 全幅 1.5 重量（g） 7.6	紡錘形であり、両端が一部欠損。孔径は５㎜である。	〃	
〃－87	ＳＸ－２	須恵器 杯（身）	口径 12.1 器高 3.5 たちあがり高1.1 受部径 14.5	底部は比較的浅く、丸味を有す。受部は上外方へのび、端部は丸い。たちあがりは内傾してのび、端部を細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面ほぼ全域に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	
〃－88	ＳＸ－３	〃 杯	口径 11.7 器高 2.6 胴径 —— 底径 7.8	底部は丸味を有し、体部は外反気味に上がり口縁部に至る。口縁端部を若干肥厚する。	底部外面はヘラ切り後ナデ調整。底部外面縁辺部には指頭圧痕が残存する。他はナデ調整。	
〃－89	〃	〃 甕	口径 —— 器高 (16.2) 胴径 (28.0) 底径 ——	底部は丸く、胴部は内湾気味に上がる。	胴部外面には格子目のタタキ目が残存する。中胴部内面は同心円文のタタキのあとナデ調整。下胴部内面はナデ調整。	底部には焼成時の歪が残存する。
〃－90	〃	土師器 椀	口径 —— 器高 (4.6) 胴径 —— 底径 8.8	底部はほぼ平らで、端部に「ハ」の字状に開く高さ 1.3㎝の高台が付く。高台端部は丸く仕上げる。体部は上外方へ直線的に上がる。底部は体部から１段落ち込んだ形状を呈す。	底部外面は回転ヘラ切り後中央部をナデ調整、縁辺部をヨコナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－91	〃	〃 皿	口径 16.7 器高 2.1 胴径 —— 底径 11.1	底部はほぼ平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外傾する。口縁端部を若干肥厚する。	底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。	
〃－92	〃	〃 〃	口径 15.4 器高 2.0 胴径 —— 底径 10.5	〃	〃	

第８表　遺物観察表７

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
28－93	ＳＸ－４	土師器 杯		13.8 4.7 —— 8.8	底部はほぼ平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外反する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は、回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。底部内面はナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－94	ＳＸ－５	〃 〃		11.0 4.4 —— 6.9	底部はやや丸味を有し、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－95	〃	〃 〃		12.4 3.6 —— 7.8	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	〃	
〃－96	〃	〃 〃		13.7 3.0 —— 7.8	底部はほぼ平らで、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	器面は摩耗しており調整不明。	
〃－97	〃	〃 皿		11.0 2.0 —— 7.4	底部は丸味を有し、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残存する。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。底部内面はナデ調整。	
〃－98	ＳＸ－６	須恵器 杯（身）	たちあがり高0.6 受部径　11.8	10.2 3.2	底部は比較的浅く、丸味を有す。受部は水平にのび、端部は細い。たちあがりは内傾してのび、端部は細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面はヘラ切りと回転ヘラ削り調整。底部内面中央にナデ調整。他は回転ナデ調整。	底部外面にヘラ記号がある。
〃－99	〃	〃 杯（蓋）		14.0 (1.9) —— ——	天井部はほぼ平らで、口縁部は斜め下方へやや丸味を持って下り、口縁端部で下方へ屈曲する。口縁端部は丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部½に回転ヘラ削り調整。天井部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－100	〃	〃 高杯		—— (3.4) —— 8.0	杯部底部は丸味を有す。脚は「ハ」の字状に大きく開き、裾部で外方へ屈曲し端部で下方へ屈曲する。端部は細く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。杯部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
29－101	〃	〃 甕		19.8 (5.5) —— ——	頸部は外反してのび、口縁部でさらに外反する。口縁端部は肥厚し、内傾する平面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも回転ナデ調整。	
〃－102	〃	〃 〃		23.0 (7.0) —— ——	胴部は内湾気味に上がり、頸部は外反してのび口縁部に至る。口縁端部は内傾する平面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。胴部外面は平行のタタキ、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－103	〃	土師器 杯		14.0 3.2 —— 8.4	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部で上外方を向く。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。口縁部内外面には部分的にヘラ磨きを施す。	
〃－104	〃	〃 〃		14.2 3.2 —— 8.4	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直のび、口縁部で外反する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。内面底部と体部の境のみにヘラ磨きを施す。他は回転ナデ調整。	
〃－105	〃	〃 〃		13.8 3.0 —— 9.0	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外反する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－106	〃	〃 〃		12.2 2.6 —— 8.3	〃	〃	
〃－107	〃	〃 椀		—— (4.2) —— 9.7	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ直線的に上がる。底部外面には断面台形状の高台が付く。高台端部は外傾する平面を成す。	〃	

第８表　遺物観察表８

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
29－108	ＳＸ－６	土師器 甕	29.6 (8.9) (28.7) ――	胴部は内傾してのび、口縁部は大きく外傾し、端部を上方へ屈曲さす。	胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整。口縁部内外面ともヨコナデ調整。	
〃－109	〃	〃 〃	23.2 (4.5) (18.5) ――	胴部はほぼ直立し、口縁部は大きく外傾し、端部は内傾する浅い凹面を成す。	胴部外面には縦方向、内面には横方向のハケ調整を施す。他はヨコナデ調整。	
〃－110	〃	〃 〃	25.2 (15.2) 21.1 ――	底部は丸く、胴部は中位まで内湾気味に上がり、上位で外傾してのびる。口縁部は大きく外傾し、端部を肥厚する。	胴部外面はタタキのあとハケ調整。内面は全面にハケ調整。口縁部内外面はヨコナデ調整。	外面には煤が付着する。
〃－111	〃	土錘	全長　4.3 全幅　1.0 重量（g）　3.9	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は４㎜である。	土師質の土錘。	
〃－112	〃	〃	全長　2.7 全幅　1.3 重量（g）　4.5	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は５㎜である。	〃	
〃－113	〃	〃	全長　3.3 全幅　1.4 重量（g）　5.3	〃	〃	
〃－114	〃	〃	全長　3.3 全幅　1.4 重量（g）　5.4	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は６㎜である。	〃	
〃－115	〃	〃	全長　3.3 全幅　1.5 重量（g）　6.2	〃	〃	
〃－116	〃	〃	全長　4.5 全幅　1.5 重量（g）　6.2	紡錘形であり、完形。 孔径は８㎜である。	〃	
〃－117	〃	〃	全長　4.7 全幅　1.4 重量（g）　7.2	ほぼ円筒形であり、端部が欠損。 孔径は６㎜である。	〃	
〃－118	〃	〃	全長　3.8 全幅　1.6 重量（g）　7.3	紡錘であり、完形。 孔径は５㎜である。	〃	
〃－119	〃	銅環	環外径　2.3 環内径　1.2 重量（g）　8.0	全般に銹化している。 環身径は 0.6㎝、突合せ部幅は 0.4 ㎝である。	――――――	
〃－120	ＳＸ－７	須恵器 甕	11.6 (6.2) ―― ――	胴部は大きく内傾する。頸部は外反し、口縁部は外傾する。口縁端部は上方へ屈曲する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 胴部外面は平行のタタキの後斜め方向のハケ調整、内面は同心円文のタタキの後ナデ調整。	
30－121	〃	土師器 高杯	23.0 (2.9) ―― ――	杯部の破片で、体部は内湾気味に緩やかに上がり、口縁部は屈曲して上外方を向く。口縁端部は内傾する浅い凹面をなす。	内外面ともヘラ磨き、特に内面のみに雑な螺施状の暗文を施す。	
〃－122	ＳＸ－８	〃 杯	13.4 3.5 ―― 7.8	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。 口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－123	〃	〃 小皿	10.5 1.7 ―― 7.0	底部は平らで、体部は外反気味に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－124	〃	〃 〃	9.5 2.0 ―― 7.0	〃	〃	

第8表　遺物観察表9

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
30－125	SX－9	須恵器 壺	—— (3.5) —— 12.3	底部は丸味があり、端部に「ハ」の字状に大きく開く高台が付く。高台端部は下方を向く平面を成す。体部は内湾気味に上がる。	マキアゲ、ミズビキ成形。器面は回転ナデ調整。	高台に焼成時の歪が残存する。
〃－126	〃	土師器 杯	14.2 3.2 —— 10.0	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部を内側に折り返す。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は内外面ともヘラ磨きを施す。	
〃－127	〃	〃 〃	14.1 4.9 —— 6.8	底部は深く、平らである。体部は内湾して上がり口縁部で上外方を向く。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転糸切り。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－128	〃	〃 小杯	10.7 4.4 —— 7.0	底部は深く、平らである。体部は内湾気味に上がり、口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－129	〃	〃 〃	8.8 2.7 —— 6.8	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－130	〃	〃 〃	10.6 2.7 —— 6.2	〃	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は、器面が摩耗しており調整不明。	
〃－131	〃	〃 椀	13.2 5.1 —— 7.0	底部はほぼ平らで、体部は内湾して上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面には「ハ」の字形に開く高台が付く。高台端部は下方を向く平面を成す。	器面は摩耗しており、調整不明。	
〃－132	〃	〃 〃	—— (6.1) —— 10.2	底部はほぼ平らで、「ハ」の字状に大きく開く高台が付く。端部は丸く仕上げる。体部は内湾気味に上がる。	底部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－133	〃	〃 皿	12.0 2.3 —— 8.0	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－134	〃	〃 小皿	9.6 1.5 —— 5.6	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－135	〃	〃 〃	10.2 1.8 —— 6.8	〃	底部外面は回転ヘラ切り。他は、回転ナデ調整。	
〃－136	〃	〃 〃	10.2 2.0 —— 7.8	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は、器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－137	〃	〃 〃	9.8 2.0 —— 5.3	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残存する。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－138	〃	〃 〃	9.7 2.2 —— 5.5	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転糸切り。他は器面が摩耗しており、調整不明。	
〃－139	〃	〃 台付皿	14.1 (2.2) —— ——	底部は平らで、中央部に径 1.3cm の円孔を穿つ。体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁部内面に凹線が回る。	器面は回転ナデ調整。	脚部は欠損する。

第８表　遺物観察表10

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
30－140	ＳＸ－９	土師器 台付皿	16.0 5.5 —— 8.4	杯部の形態は 139と全く同じ。脚部は「ハ」の字状に大きく開き、端部は下方を向く平面を成す。	器面は摩耗が著しく調整不明。	
〃－141	〃	〃 〃	—— (2.9) —— 9.6	底部は平らで、「ハ」の字状に開く高さ２㎝の高台が付く。端部は丸く仕上げる。	〃	
〃－142	〃	〃 〃	—— (3.2) —— 10.4	高台は「ハ」の字状に開く。高さは 2.7㎝である。端部は丸く仕上げる。	内外面とも回転ナデ調整。	
〃－143	〃	〃 〃	—— (3.0) —— 10.6	高台は「ハ」の字状に開く。高さは 2.8㎝である。端部は下方を向く凹面を成す。	器面は摩耗が著しく調整不明。	
31－144	〃	〃 台付小皿	9.4 3.4 —— 6.0	皿部底部は丸味を有し、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。高台は「ハ」の字状に開き、端部は下方を向く凹面を成す。	〃	
〃－145	〃	〃 〃	9.8 3.2 —— 5.7	皿部底部はほぼ平坦で、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。高台は「ハ」の字状を呈す。	底部外面は回転糸切り。他は、器面が著しく摩耗しており調整不明。	
〃－146	〃	〃 甕	18.0 (7.0) (25.0) ——	胴部は内湾気味に上がり、口縁部で大きく外傾する。口縁端部は内傾する浅い凹面を成す。	胴部外面には指頭圧痕、内面には強い横方向のナデが残存する。口縁部内外面ともヨコナデ調整。	
〃－147	〃	〃 〃	27.6 (5.9) —— ——	胴部は上外方へ上がり、口縁部は大きく外傾する。口縁端部を上方へ撮み出す。	胴部外面は横方向ののハケ調整。他はヨコナデ調整。	外面には煤が付着する。
〃－148	〃	〃 羽釜	20.6 (3.7) (20.9) ——	胴部はほぼ真上に上がり口縁部に至る。口縁部下には水平にのびる鍔が付く。鍔端部は浅い凹面を成す。	〃	〃
〃－149	〃	〃 〃	20.8 (6.0) (21.1) ——	〃	胴部外面はナデ調整。他はヨコナデ調整。	
〃－150	〃	〃 〃	—— (11.0) 30.4 ——	胴部はほぼ真上に上がり、外面には断面三角形の鍔が回る。鍔の上には耳状の把手が付く。	胴部外面は横方向のハケ調整、内面はナデ調整。	
〃－151	〃	土錘	全長　5.1 全幅　1.5 重量（g）　9.5	紡錘形であり、ほぼ完形。孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	
〃－152	〃	〃	全長　6.0 全幅　2.1 重量（g）　23.0	ほぼ円筒形であり、両端が欠損。孔径は７㎜である。	〃	
〃－153	ＳＸ－10	土師器 小杯	10.6 3.7 —— 7.5	底部はやや丸味を有し、体部は内湾気味に上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－154	〃	〃 〃	10.2 2.7 —— 7.0	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	

第８表　遺物観察表11

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
31－155	ＳＸ－10	土師器 小皿	11.0 (1.7) —— 7.8	底部は平らで、体部は上外方へ真直のび、口縁部へ至る。口縁部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－156	〃	〃 羽釜	22.7 (3.5) (25.0) ——	胴部は内傾して上がり、口縁部でさらに外傾する。口縁部下には水平にのびる鍔が付く。鍔端部は丸く仕上げる。	胴部外面は横方向のハケ調整。他はヨコナデ調整。	
〃－157	〃	〃 〃	23.2 (5.3) (25.0) ——	胴部は内傾して上がり、口縁部でやや直立する。口縁部下にはやや上外方を向く鍔が付く。鍔端部は凹面を成す。	胴部外面は横方向のハケ調整の後タタキを施す。他はヨコナデ調整。	外面は煤が付着する。
〃－158	〃	土錘	全長　4.3 全幅　2.2 重量（g）　20.1	ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は７㎜である。	須恵質の土錘。	
〃－159	〃	砥石	全長　(6.7) 全幅　5.8 全厚　1.9 重量（g）122.0	表裏両面と欠損部以外の側面を使用する。特に表裏両面の使用が多く断面凹面を成す。	——	石材は砂岩。
32－160	ＳＸ－11	須恵器 杯	16.0 5.7 —— 7.8	底部はベタ高台となっており、体部は内湾気味に上がり、口縁部でやや外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は糸切りである。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－161	〃	土師器 杯	15.4 4.4 —— 8.2	底部はほぼ平らで、体部は直線的に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－162	〃	〃 〃	18.0 4.6 —— 9.6	〃	〃	
〃－163	〃	〃 〃	13.7 5.6 —— 7.0	底部は平底でベタ高台である。体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は糸切りである。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－164	〃	〃 〃	14.5 5.5 —— 6.8	底部は平底でベタ高台である。体部は内湾気味に上がり口縁部で上外方を向く。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は糸切りである。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	内面に 176が貼付いた状態で出土。
〃－165	〃	〃 小杯	10.4 4.2 —— 6.0	底部は平底でベタ高台である。体部は内湾気味に上がり口縁部で外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	〃	体部から口縁部外面にかけて煤が付着する。
〃－166	〃	〃 〃	8.6 2.4 —— 6.8	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－167	〃	〃 〃	9.6 2.3 —— 7.2	〃	〃	
〃－168	〃	〃 〃	10.0 2.3 —— 7.8	〃	〃	
〃－169	〃	〃 〃	9.8 2.5 —— 7.0	〃	底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。	

第８表　遺物観察表12

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
32－ 170	ＳＸ－11	土師器 小杯		9.8 3.0 —— 6.6	底部はやや丸味を有す。 体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－ 171	〃	〃 〃		9.8 2.4 —— 6.8	底部はほぼ平らで、体部はやや内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は糸切り、内面はナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－ 172	〃	〃 〃		9.6 2.2 —— 6.3	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－ 173	〃	〃 〃		10.4 3.1 —— 6.3	〃	〃	
〃－ 174	〃	〃 〃		9.6 3.0 —— 5.8	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は糸切り。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ調整。内底面はナデ調整。	
〃－ 175	〃	〃 椀		15.5 6.5 —— 6.0	底部はほぼ平らで、体部は内湾して上がり口縁部で外反する。口縁端部は丸く仕上げる。底部には「ハ」の字状の高さ１cmの高台が付く。端部は内傾する凹面を成す。	器面は摩耗が著しく調整不明。	器壁は非常に薄い。
〃－ 176	〃	〃 小皿		9.4 1.3 —— 5.8	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁部内面に凹線を回らす。	底部外面は回転ヘラ切り。 口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－ 177	〃	〃 〃		10.0 1.4 —— 7.6	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	器面は摩耗が著しく調整不明。	
〃－ 178	〃	〃 台付小皿		9.2 3.4 —— 5.1	底部は平らで、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。底部には「ハ」の字状の高さ 1.6cmの高台が付く。	〃	
33－ 179	〃	〃 甕		28.2 (3.0) (24.7) ——	胴部は上外方へ上がり、口縁部で大きく外反し、端部を若干肥厚し丸く仕上げる。	頸部内面に平行のタタキ。胴部内面はナデ調整。他はヨコナデ調整。	
〃－ 180	〃	〃 羽釜		24.8 (4.7) (27.4) ——	胴部は内湾気味に上がり口縁部に至る。口縁部下には上外方を向く鍔が付く。鍔端部は内傾する凹面を成す。	胴部外面は横方向のハケ目とタタキ目が残存し、内面はナデ調整。他はヨコナデ調整。	
〃－ 181	ＳＸ－12	土師器 耳皿		7.4 2.9 —— 4.0	底部はほぼ平らで、体部から口縁部の２ヶ所を内側に折り曲げる。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	内外面とも浅黄色を呈す。
〃－ 182	〃	土錘	全長　4.5 全幅　1.6 重量（g）　10.7		ほぼ円筒形であり、完形。 孔径は 4.5mmである。	土師質の土錘。	
〃－ 183	ＳＸ－13	土師器 杯		12.0 3.4 —— 7.8	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－ 184	〃	〃 皿		14.2 2.3 —— 9.0	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、他は器面が摩耗しており調整不明。	

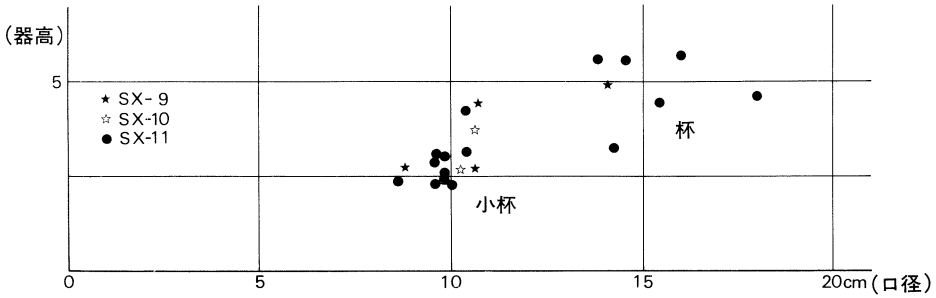
第８表　遺物観察表13

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
33－185	ＳＸ－13	須恵器 鉢	24.0 10.1 —— ——	体部は上外方へほぼ真直上がり、口縁部に至る。口縁端部を若干肥厚する。	器面は摩耗するが、外面に平行のタタキの後に回転カキ目調整、内面に青海波文のタタキが残存する。	焼成はやや不良で瓦質土器に似る。
〃－186	ＳＸ－14	〃 杯（蓋）	—— (1.8) —— ——	天井部は平らで、中央部に丸いつまみが付く。	マキアゲ、ヒズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	
〃－187	〃	土師器 杯	12.2 3.3 —— 7.8	底部はやや丸味を有し、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他はナデ調整。	
〃－188	〃	〃 〃	11.6 5.4 —— 6.8	底部は深く、やや丸味を有す。体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕が残存する。内面は回転ナデ調整。	
〃－189	〃	〃 〃	13.5 5.1 —— 8.0	底部は比較的深く、平らで、体部はやや内湾気味に上がり、口縁部で上外方を向く。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－190	〃	〃 皿	13.2 1.9 —— 9.0	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－191	〃	土錘	全長 3.6 全幅 1.4 重量（g） 5.7	紡錘形であり、完形。 孔径は４㎜である。	土師質の土錘。	
〃－192	ＳＸ－15	土師器 杯	13.4 5.1 —— 7.1	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり、口縁部で若干外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－193	〃	〃 皿	12.8 2.4 —— 9.4	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
〃－194	〃	土錘	全長 4.8 全幅 1.9 重量（g） 17.0	紡錘形であり、完形。 孔径は５㎜である。	土師質の土錘。	
〃－195	Ｐ－1	土師器 椀	15.0 7.2 —— 8.2	底部はほぼ平らで、端部に「ハ」の字状に開く高さ 1.9㎝の高台が付く。口縁端部は丸く仕上げる。体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕が残存する。他は回転ナデ調整。	
〃－196	Ｐ－2	〃 杯	12.1 3.2 —— 9.0	底部はほぼ平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り。他は器面が摩耗しており調整不明。	
〃－197	Ｐ－3	弥生土器 甕	—— (2.8) —— 4.5	底部は平らで、胴部は上外方へ上がる。	外面にタタキ目が残存し、内面はナデ調整。	
〃－198	Ｐ－4	須恵器 杯（蓋）	10.0 (3.3) —— ——	天井部は丸味を有し、緩やかに下り、口縁部で下方に屈曲する。口縁端部は細く仕上げる。	天井部外面はヘラ切りで一部に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	
〃－199	〃	土師器 杯	10.2 3.5 —— 6.4	底部は平らで、体部は上外方へほぼ真直上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	

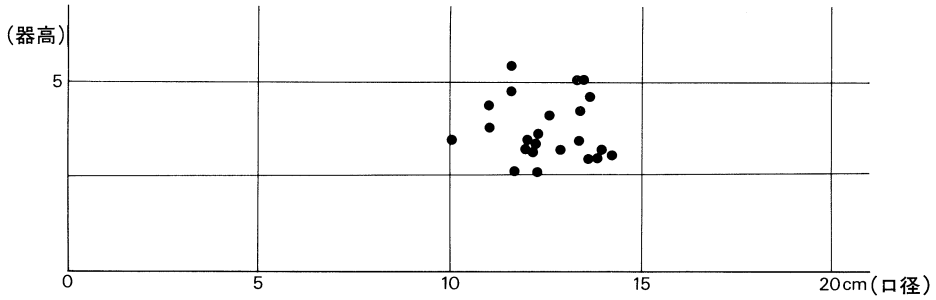
第８表　遺物観察表14

挿図番号	遺構番号	器種 器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
33－200	P－5	土師器 杯		11.0 2.8 —— 6.1	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ上がり、口縁部で外傾する。口縁端部は細く仕上げる。	底部外面は糸切り、内面はナデ調整。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整。	
〃－201	P－6	〃 小皿		9.8 1.3 —— 5.6	底部はほぼ平らで、体部は上外方へ直線的に上がり口縁部へ至る。口縁端部は丸く仕上げる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	

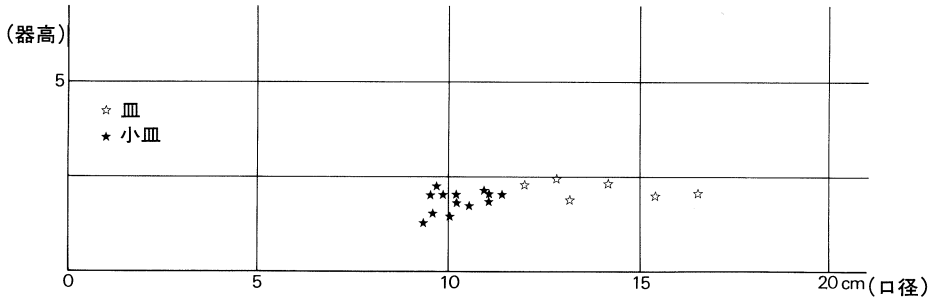
第９表　杯、小皿法量分布表（SX－９～11）

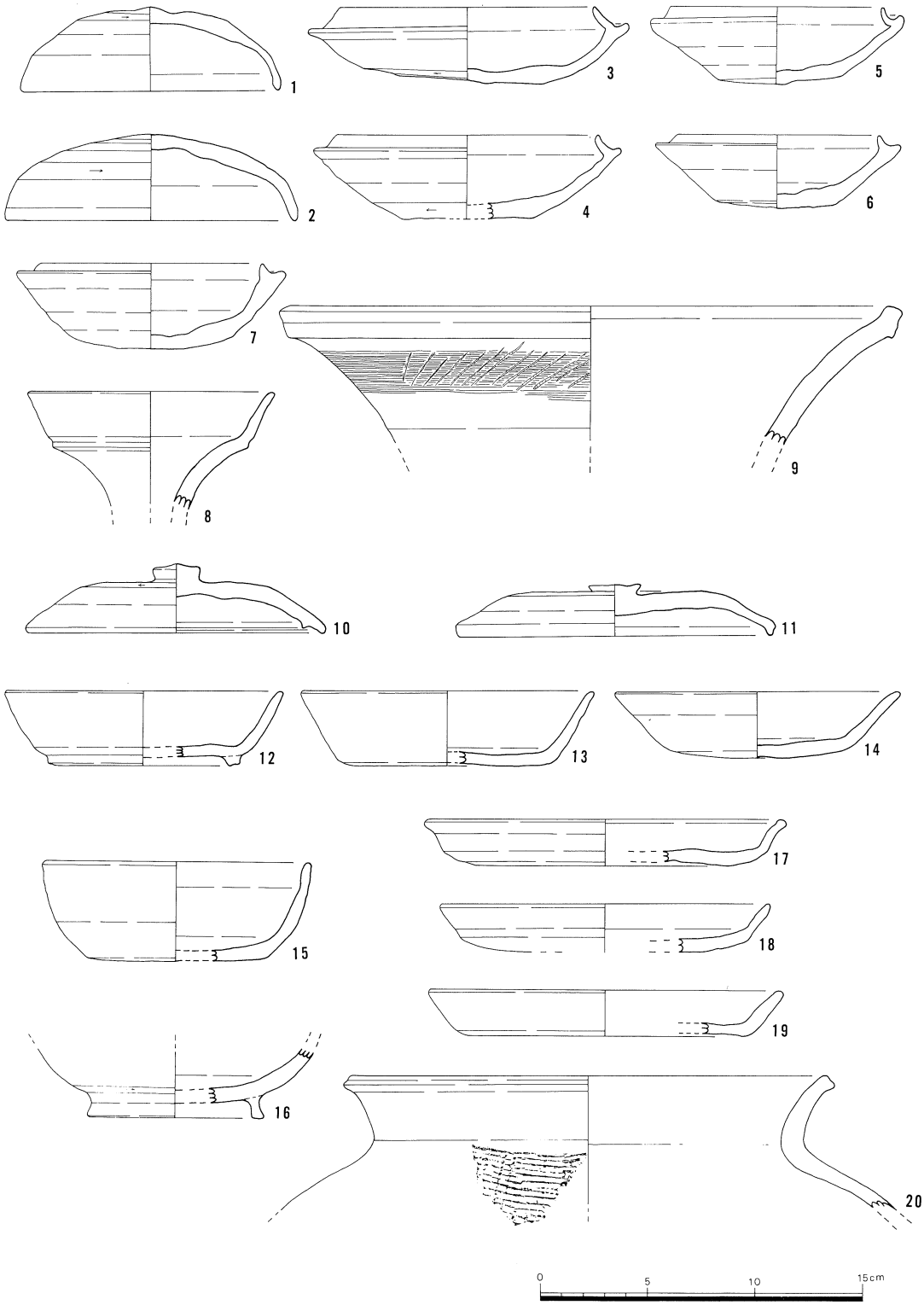


第10表　杯法量分布表（その他の遺構）

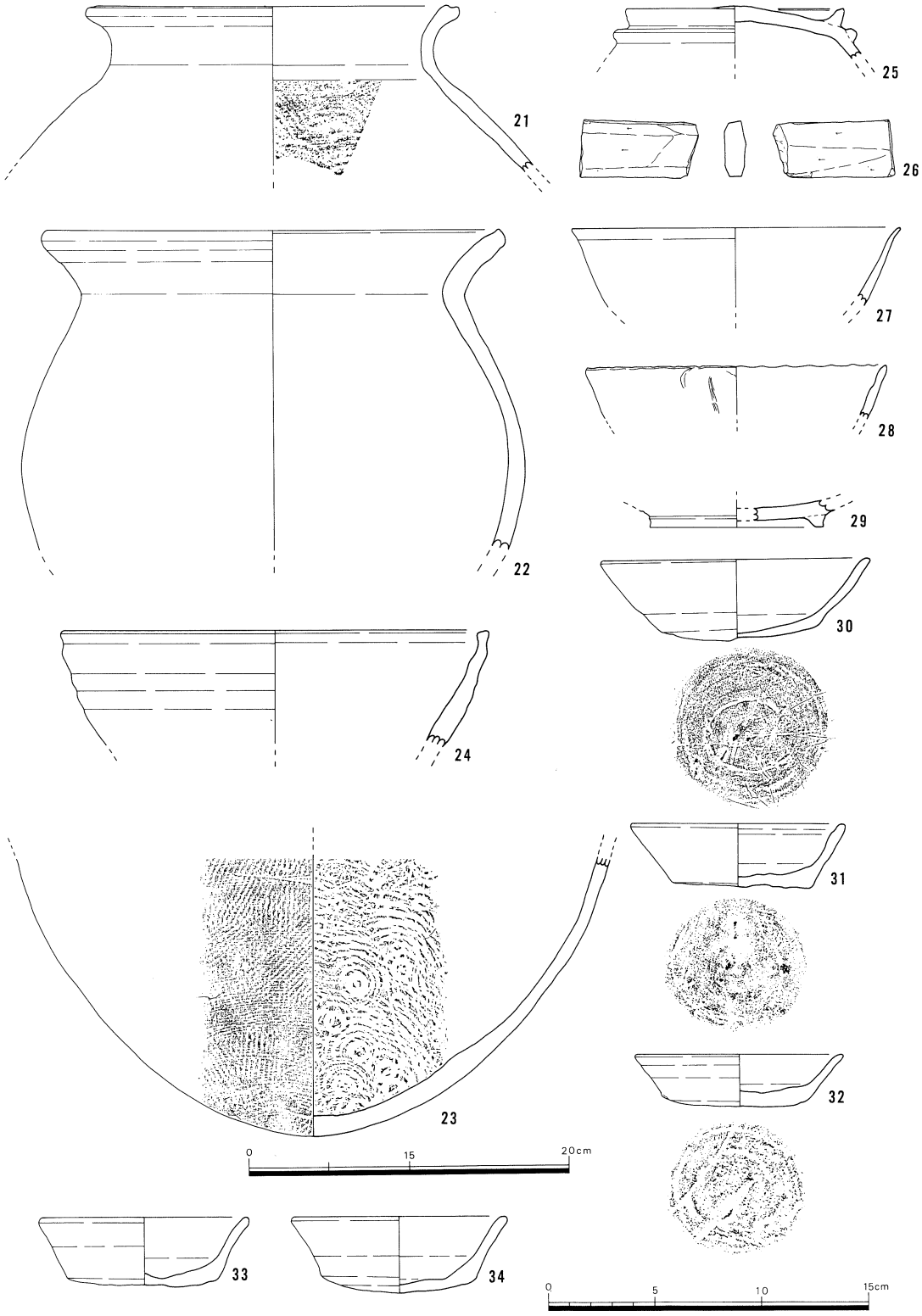


第11表　皿、小皿法量分布表（遺構）

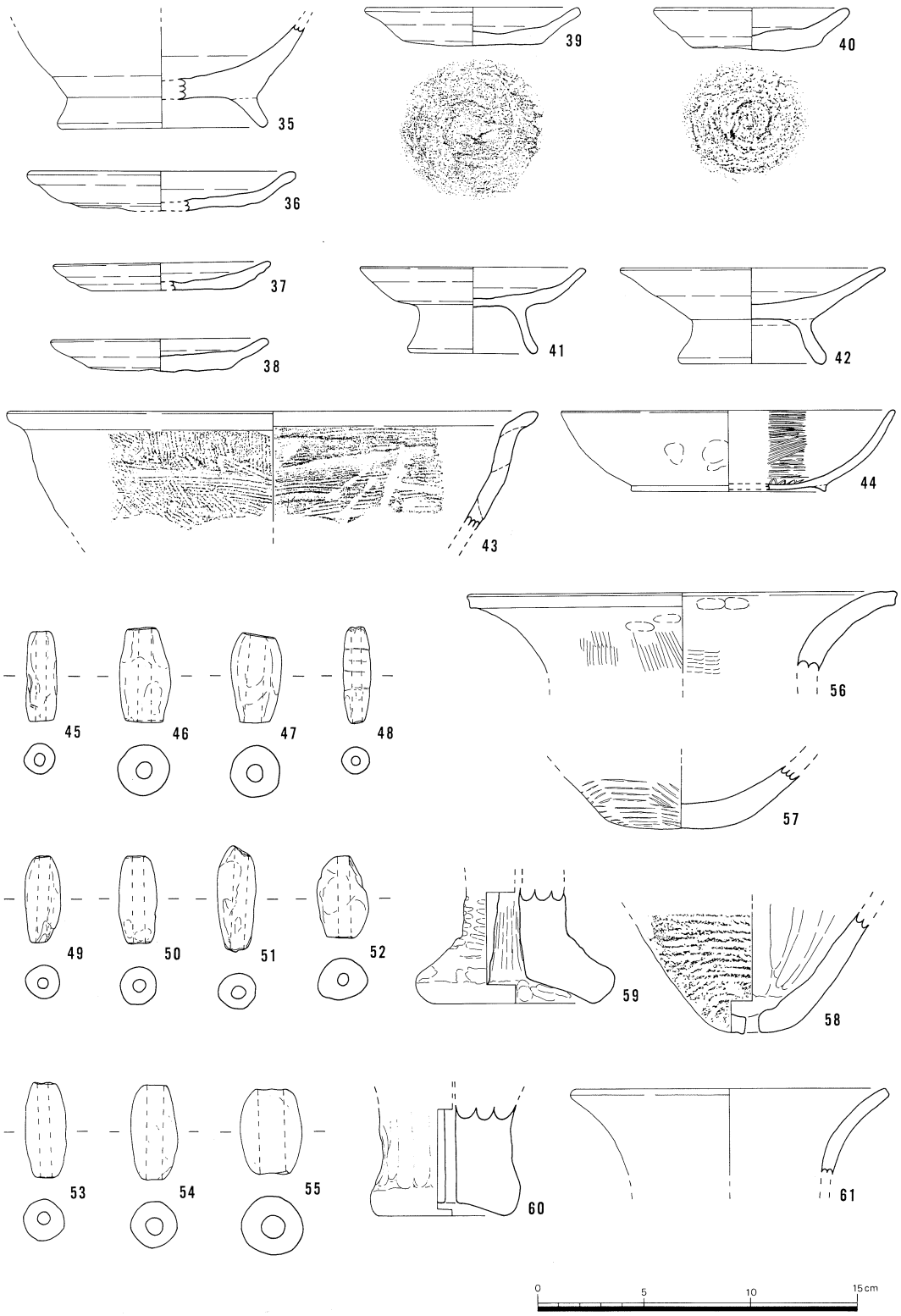




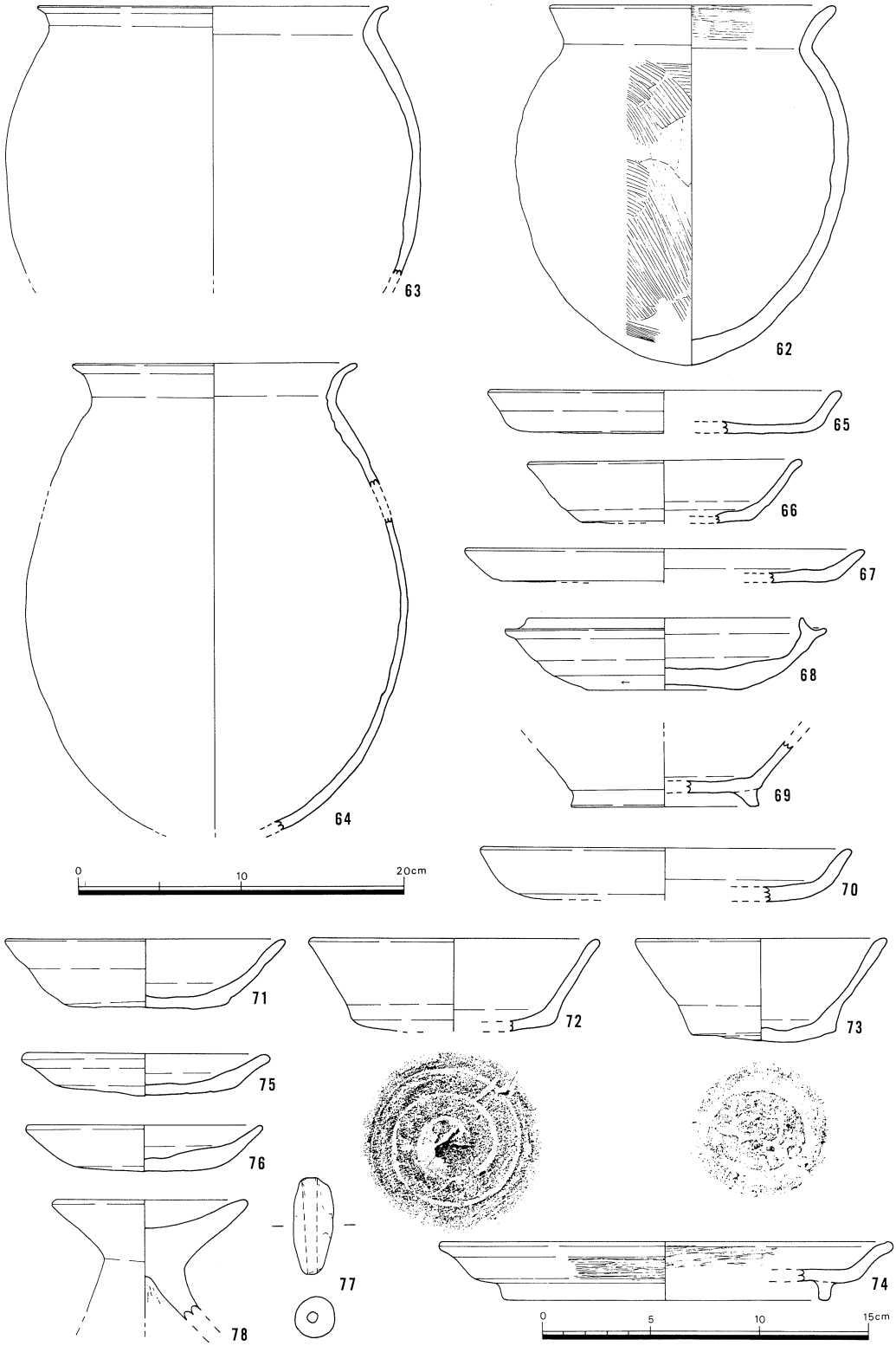
第24図　遺物実測図 1



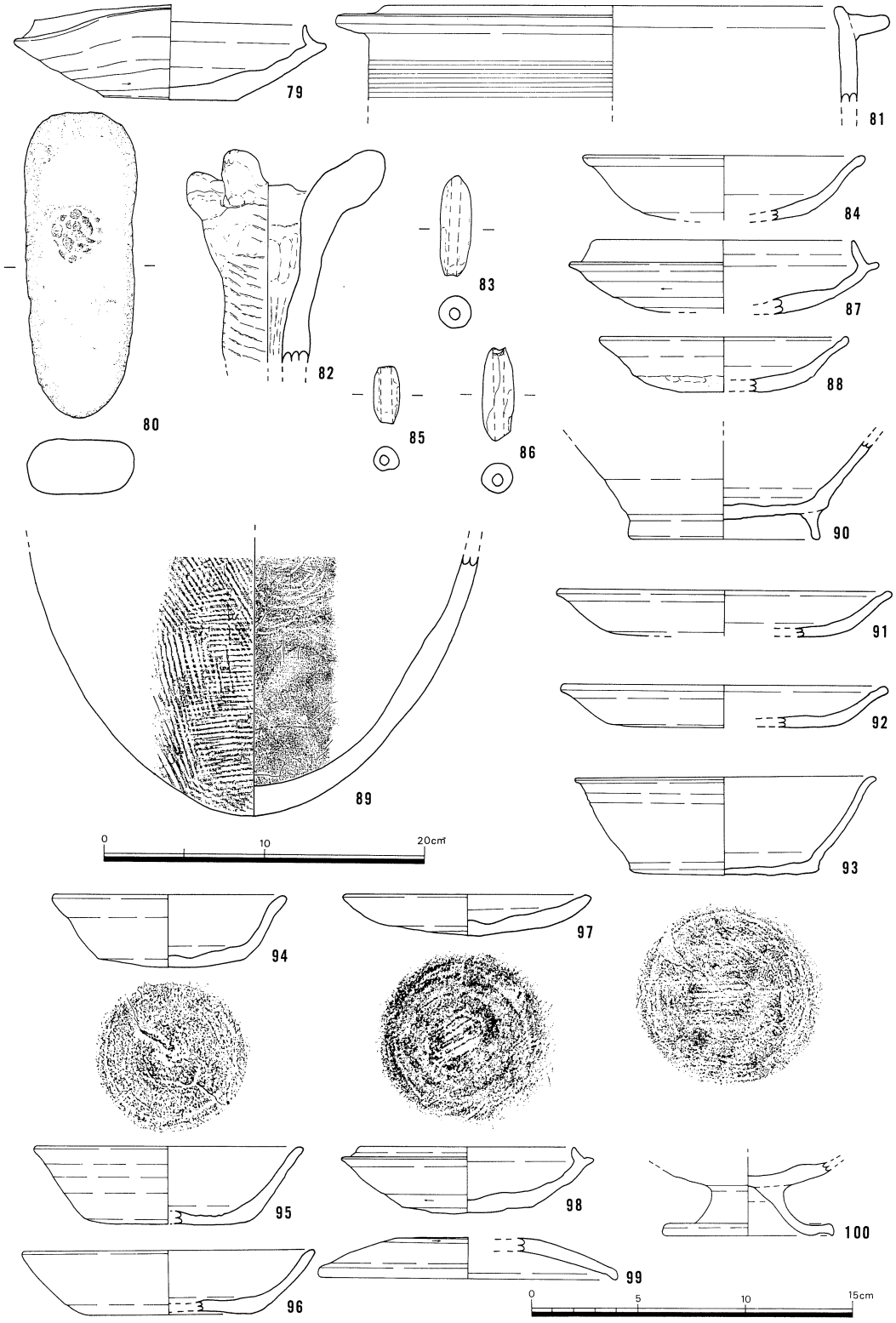
第25図　遺物実測図 2


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
5
10
15cm

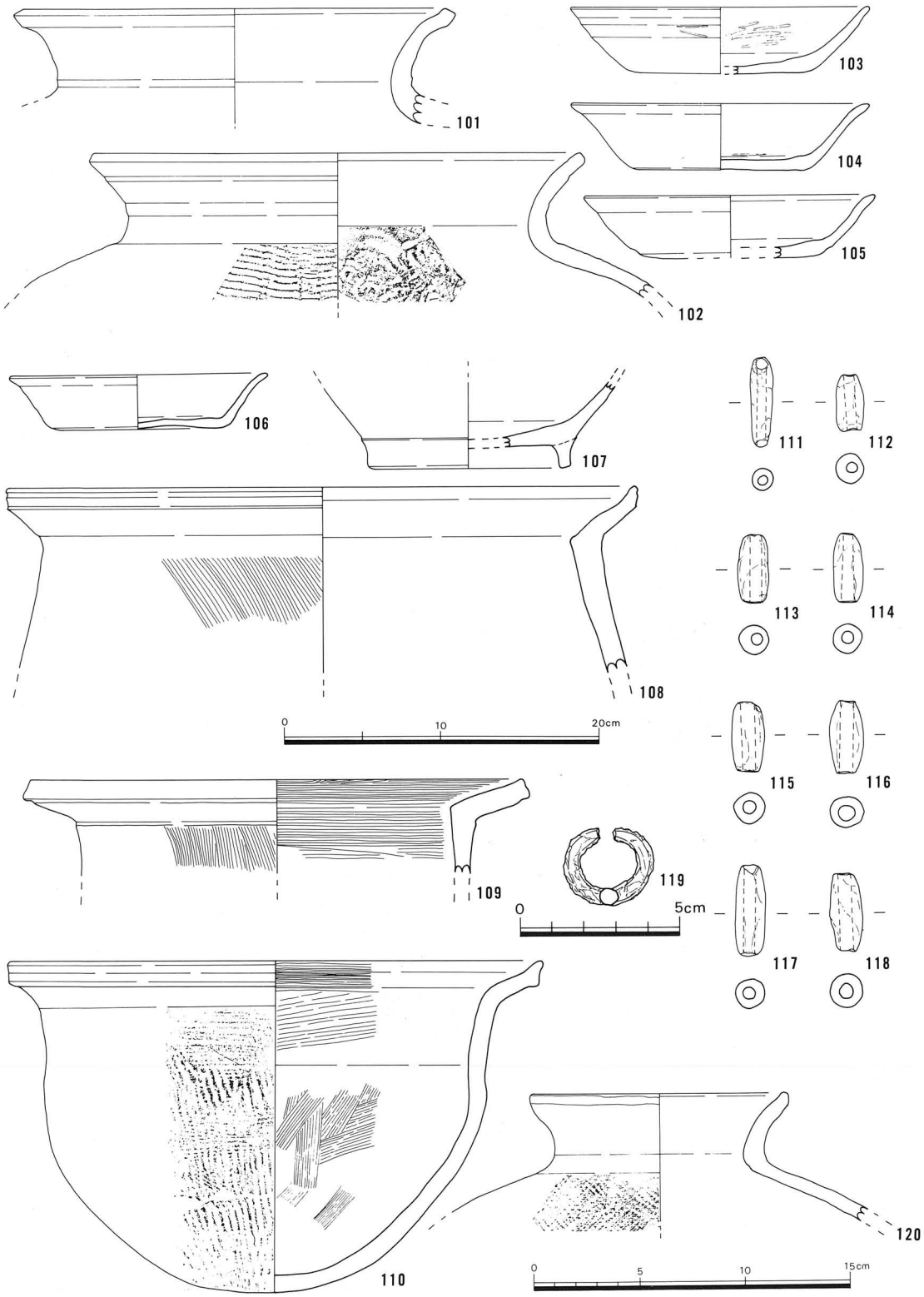
第26図　遺物実測図 3



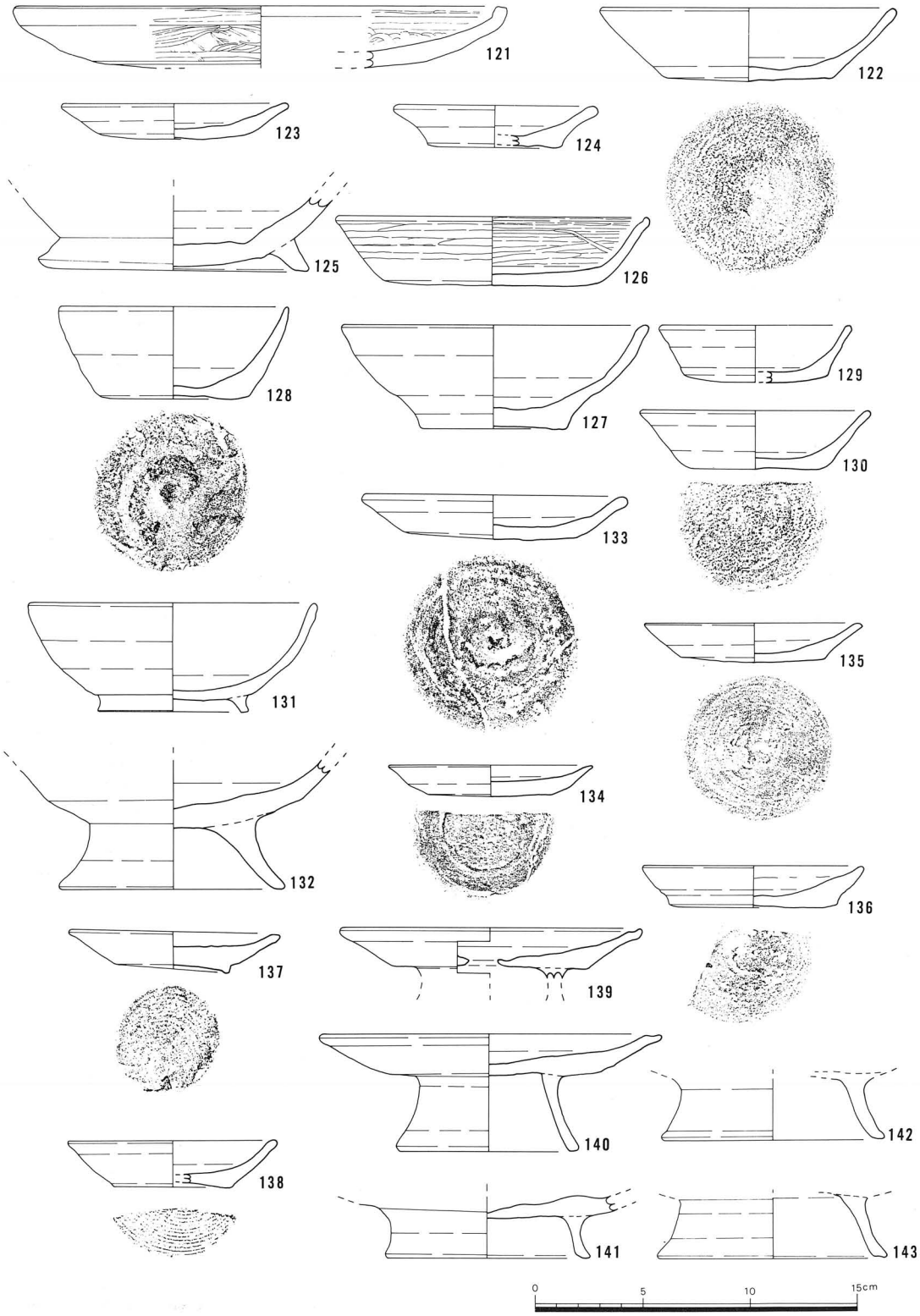
第27図　遺物実測図 4


79
81
80
82
83
84
87
88
85
86
90
89
91
92
93
0
10
20cm
94
97
95
98
100
96
99
0
5
10
15cm

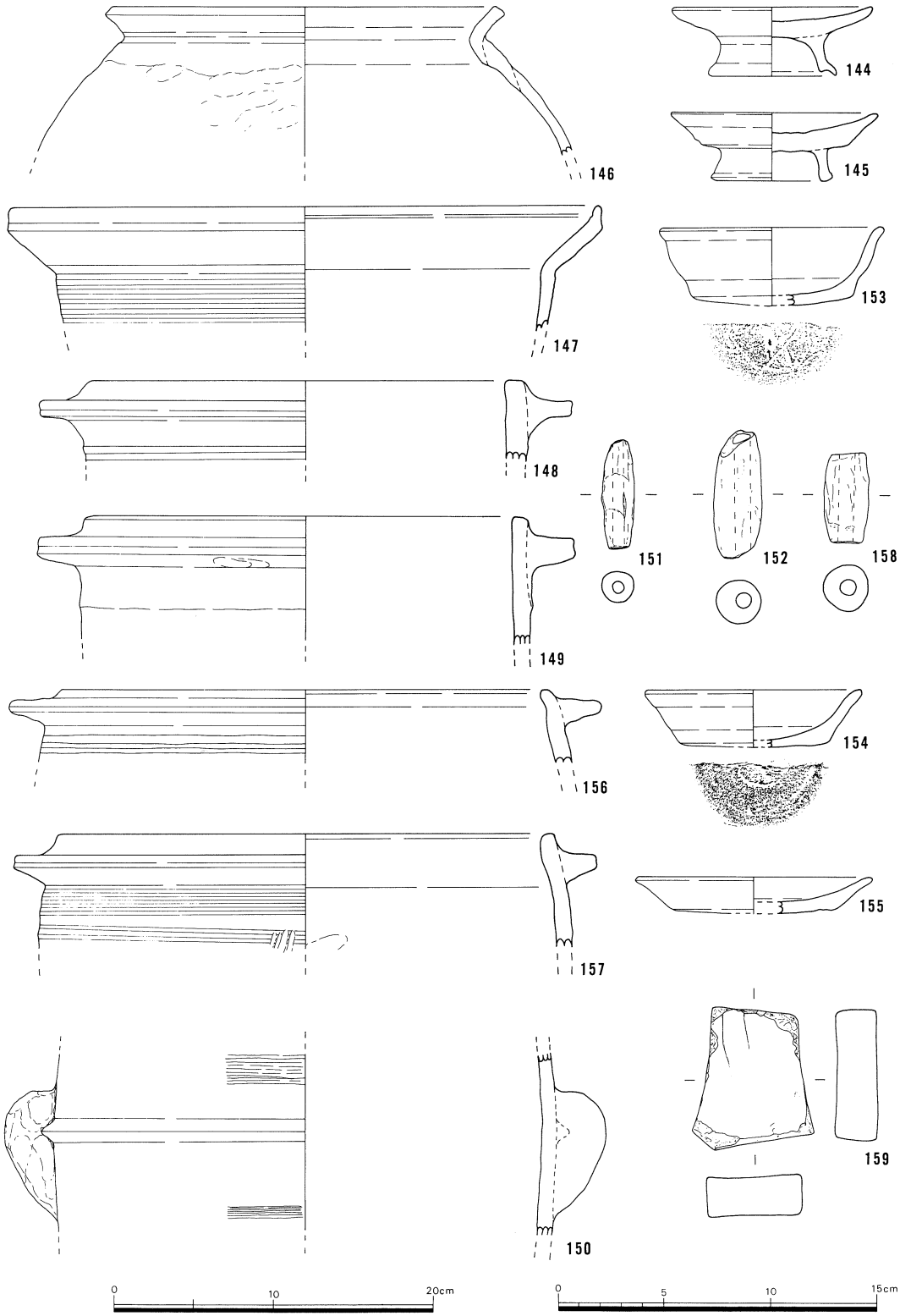
第28図　遺物実測図 5


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
0
10
20cm
0
5cm
0
5
10
15cm

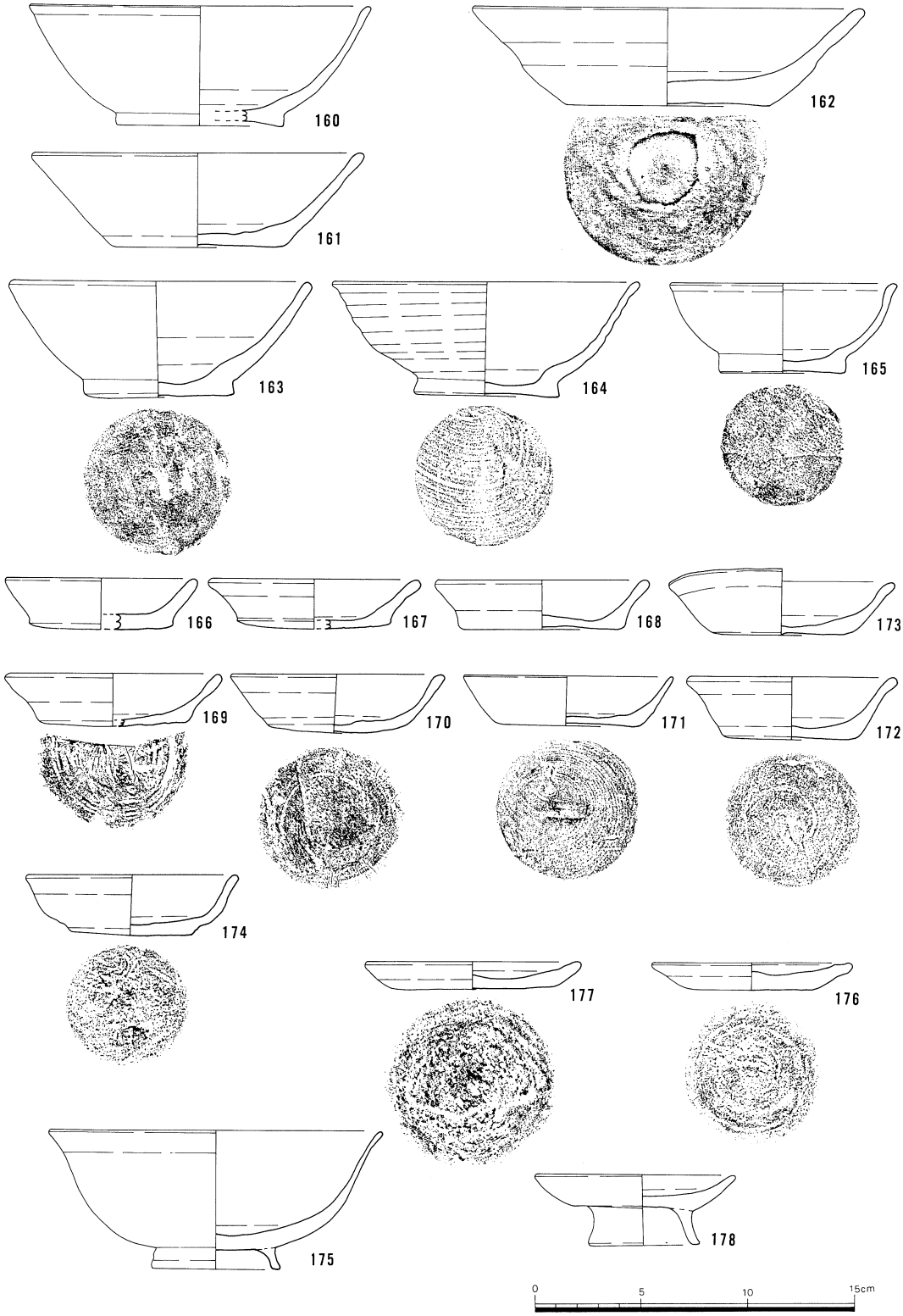
第29図　遺物実測図 6


121
122
123
124
125
126
128
127
129
130
133
131
135
134
132
136
137
139
140
142
138
141
143
0
5
10
15cm

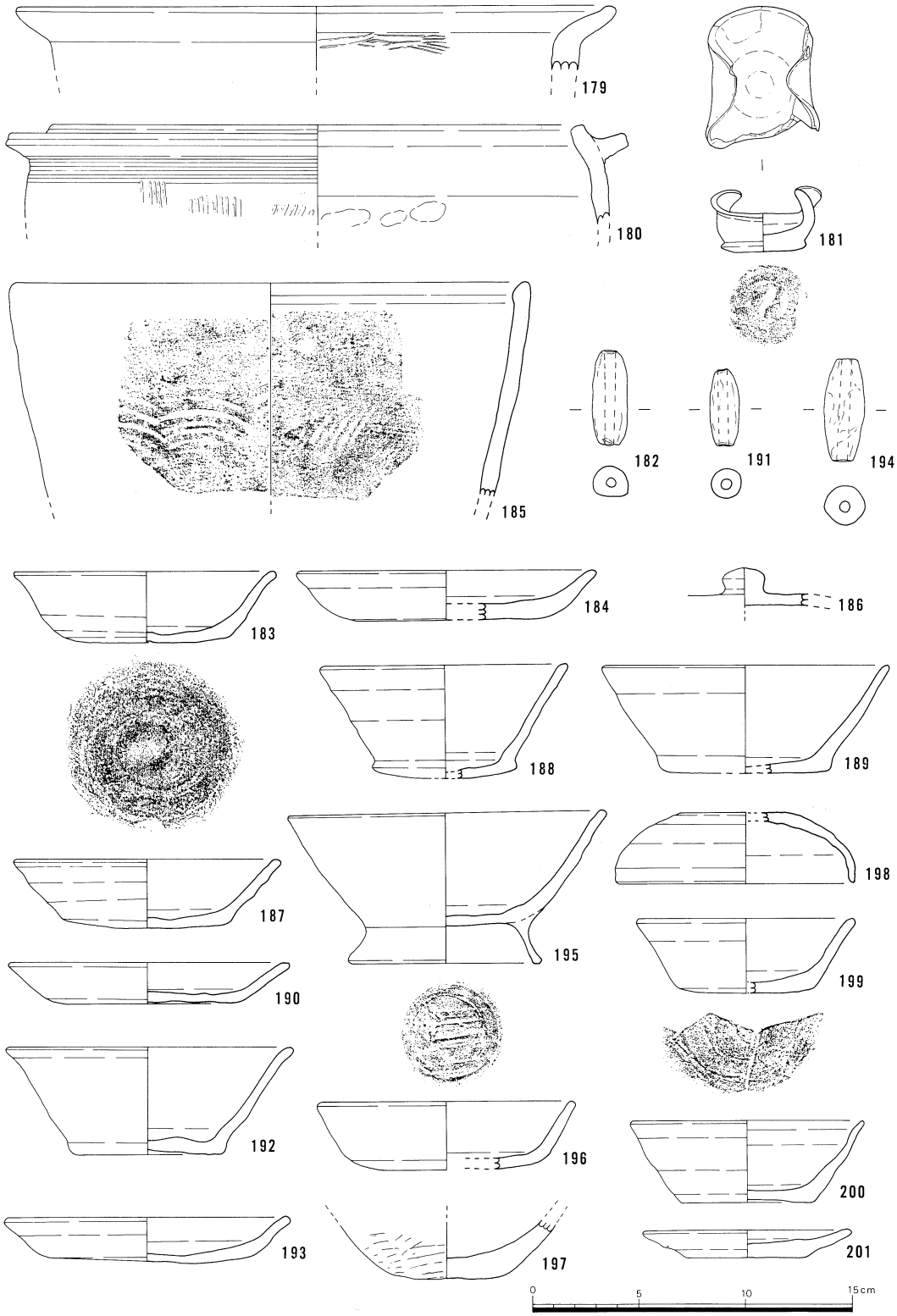
第30図　遺物実測図 7


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
0
10
20cm
0
5
10
15cm

第31図　遺物実測図 8


160
161
162
163
164
165
166
167
168
173
169
170
171
172
174
177
176
175
178
0
5
10
15cm

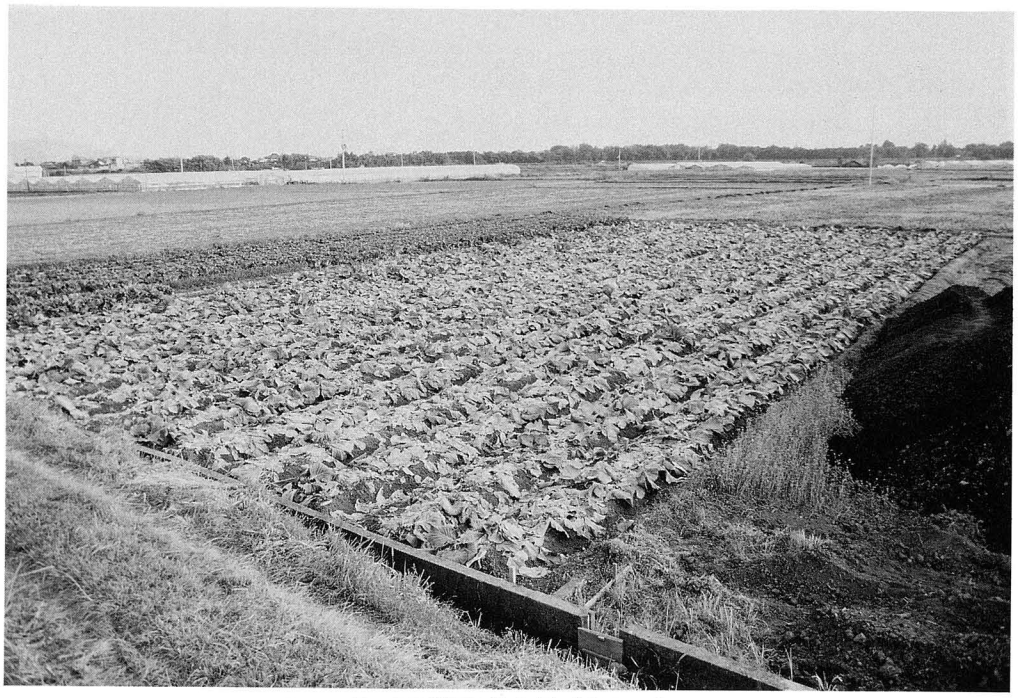
第32図　遺物実測図 9



第33図　遺物実測図10

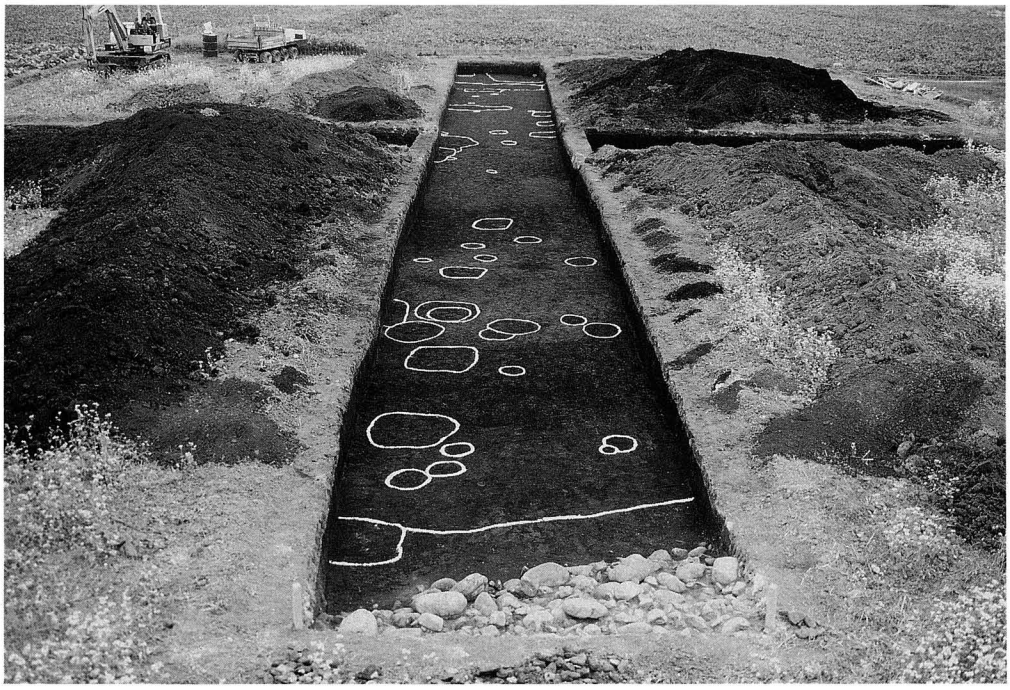
図　　版

A区調査前全景（北より）

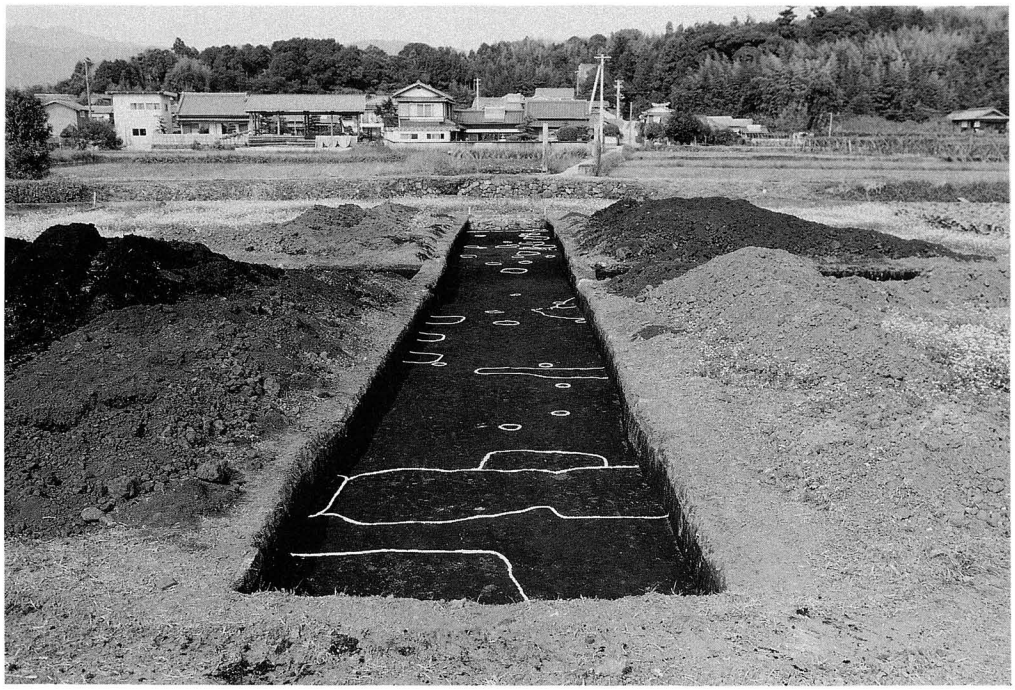


B・C区調査前全景（北より）

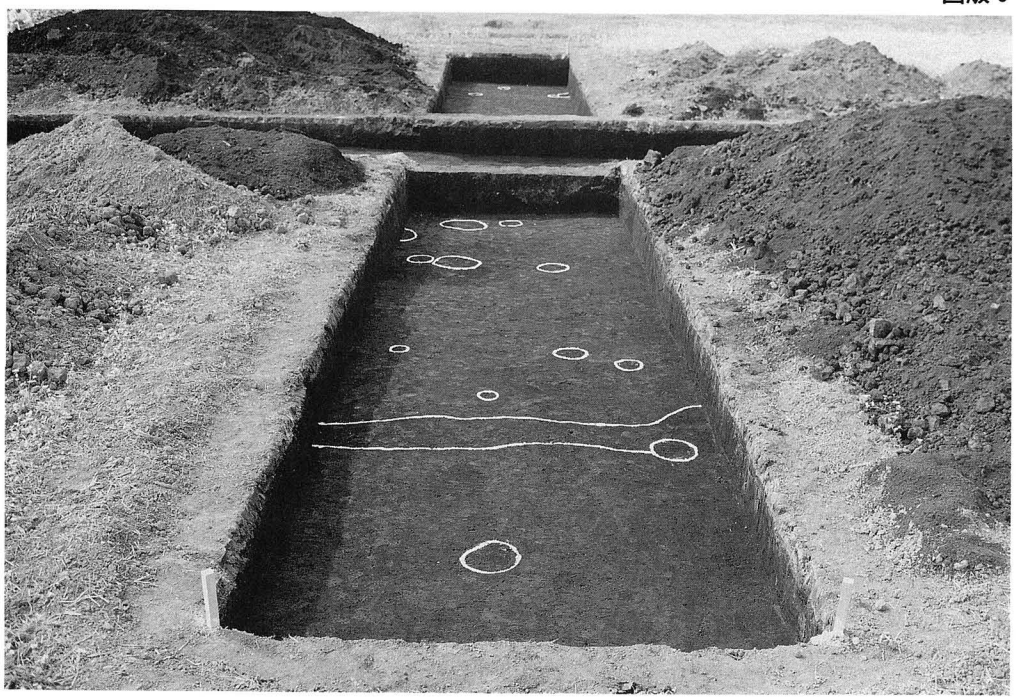
図版 2



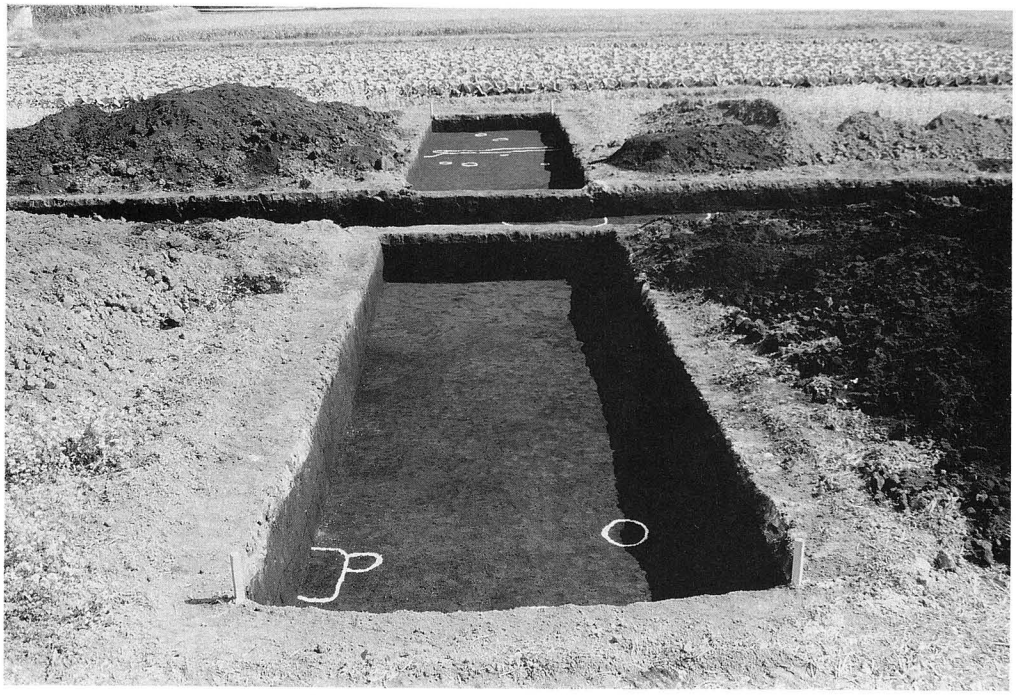
試掘トレンチ 遺構検出状態（北より）



試掘トレンチ 遺構検出状態（南より）

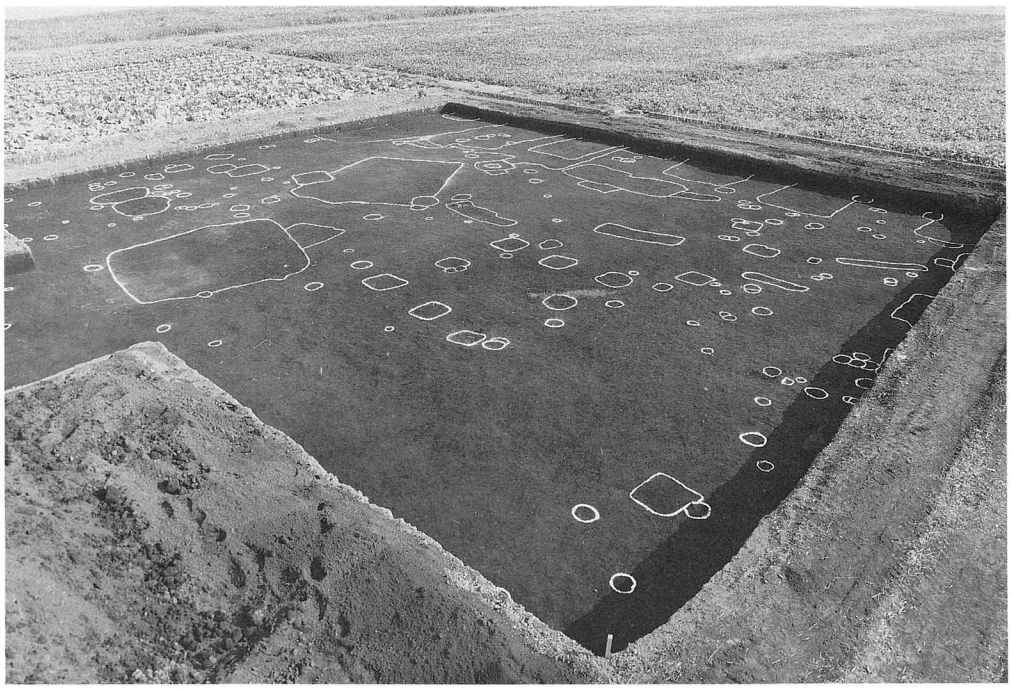


試掘トレンチ 遺構検出状態（東より）

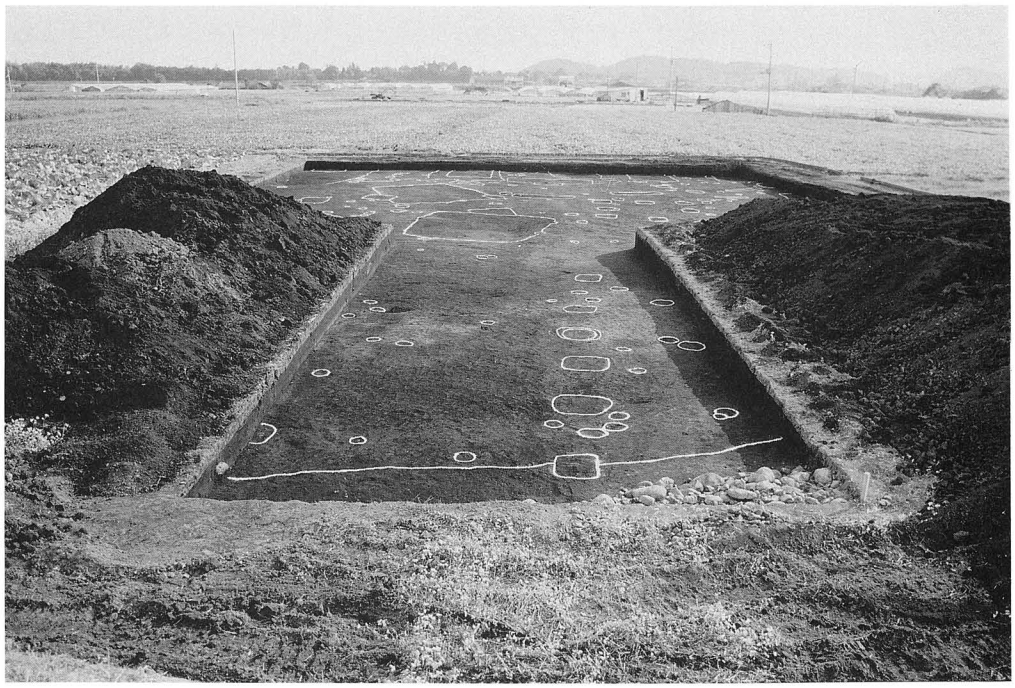


試掘トレンチ 遺構検出状態（西より）

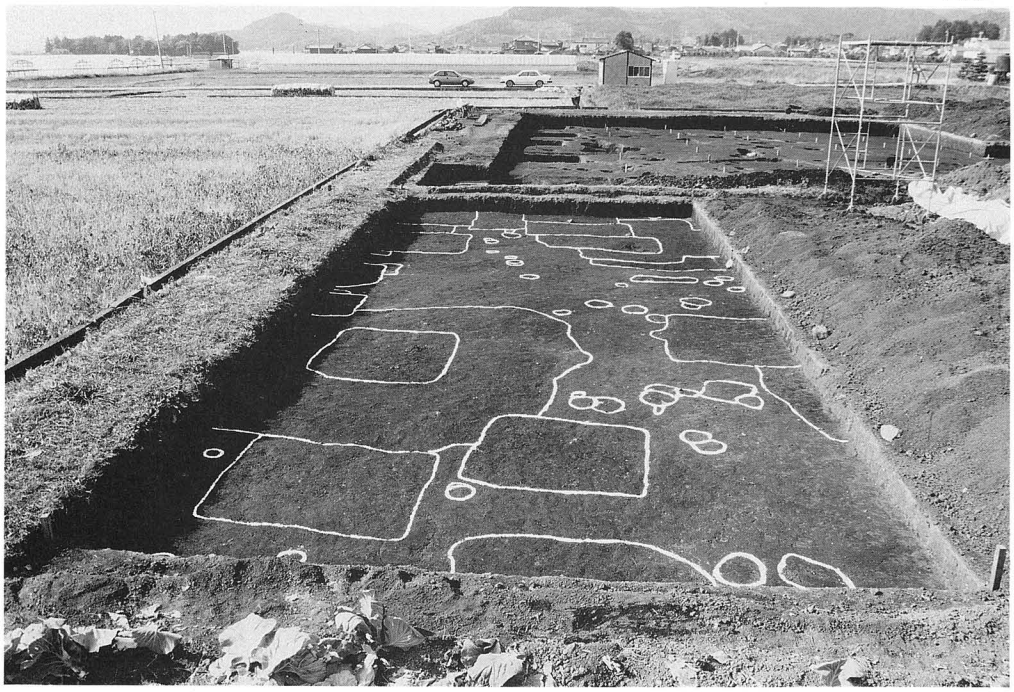
図版 4



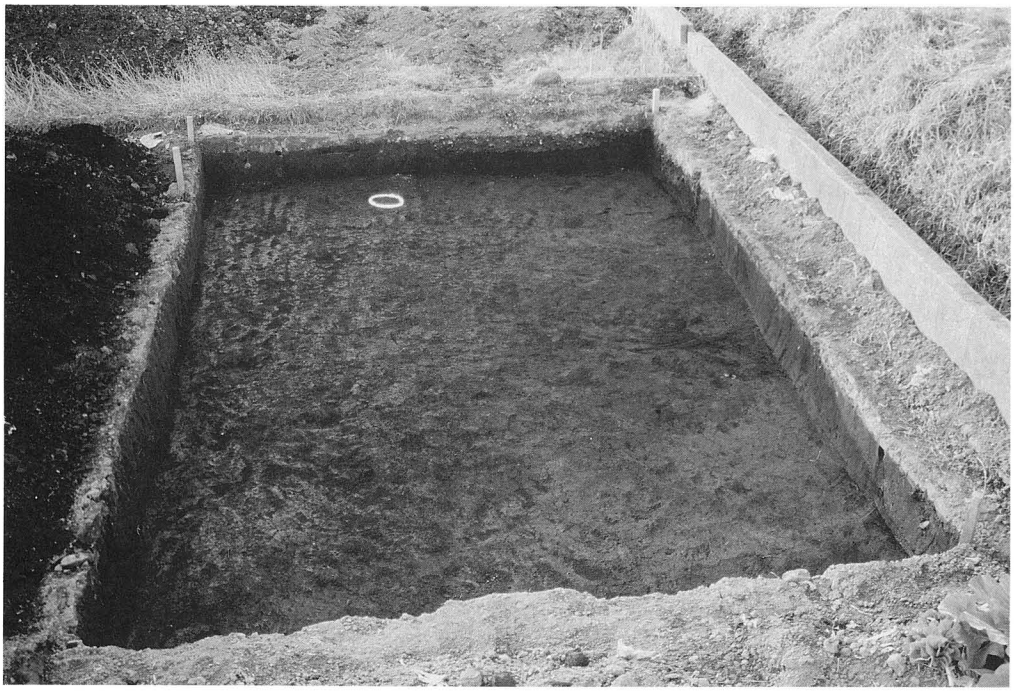
A 区遺構検出状態（北より）



A 区遺構検出状態（北より）

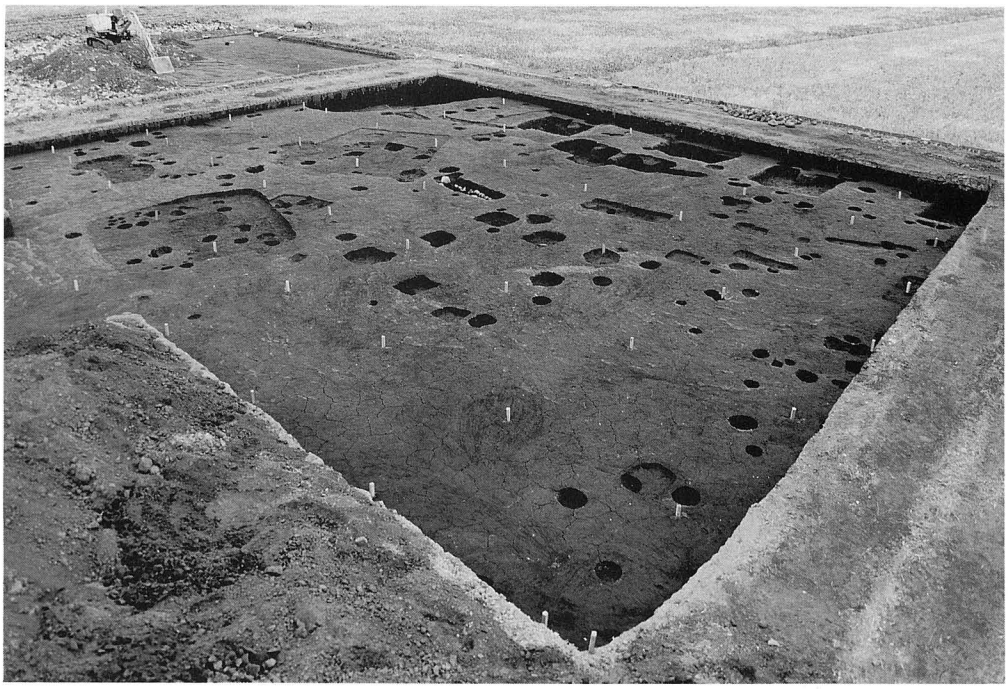


B区遺構検出状態（東より）



C区遺構検出状態（東より）

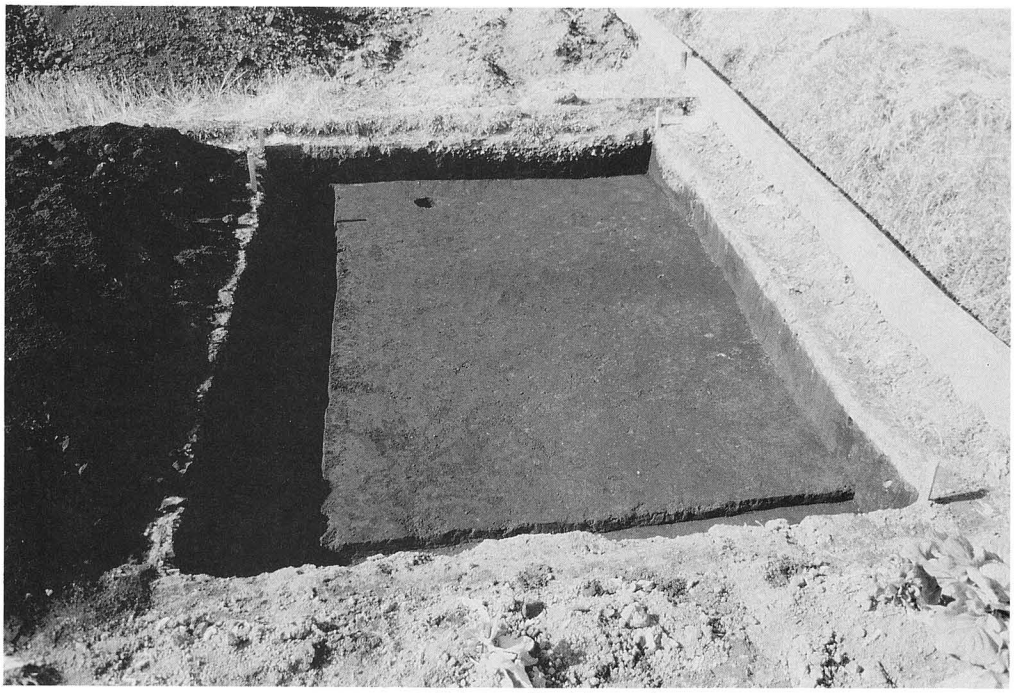
図版 6



A 区遺構完掘状態（北より）

A 区遺構完掘状態（北より）

B区遺構完掘状態（東より）

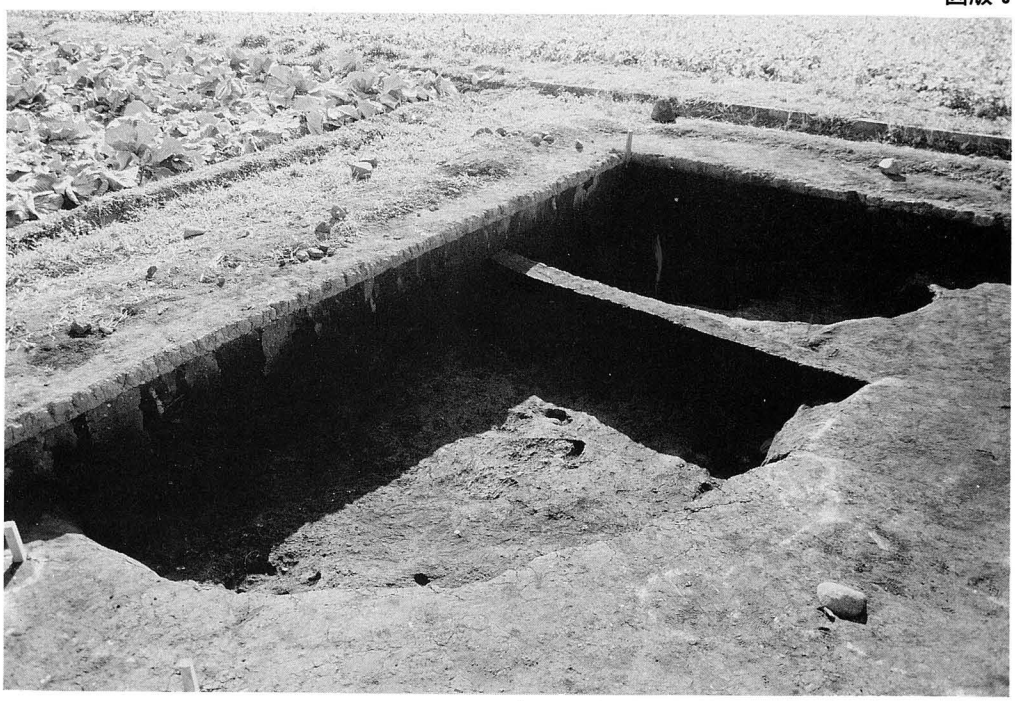


C区遺構完掘状態（東より）

図版 8

A 区北端部礫層検出状態（西より）

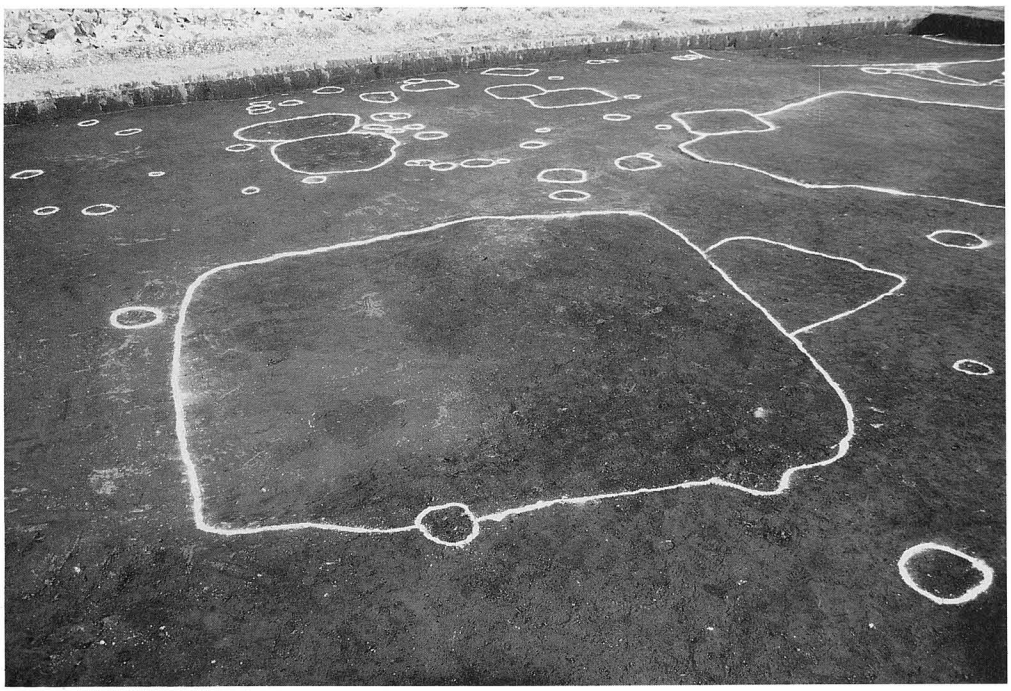
A 区北端部礫層検出状態（南より）



ST－25（北より）

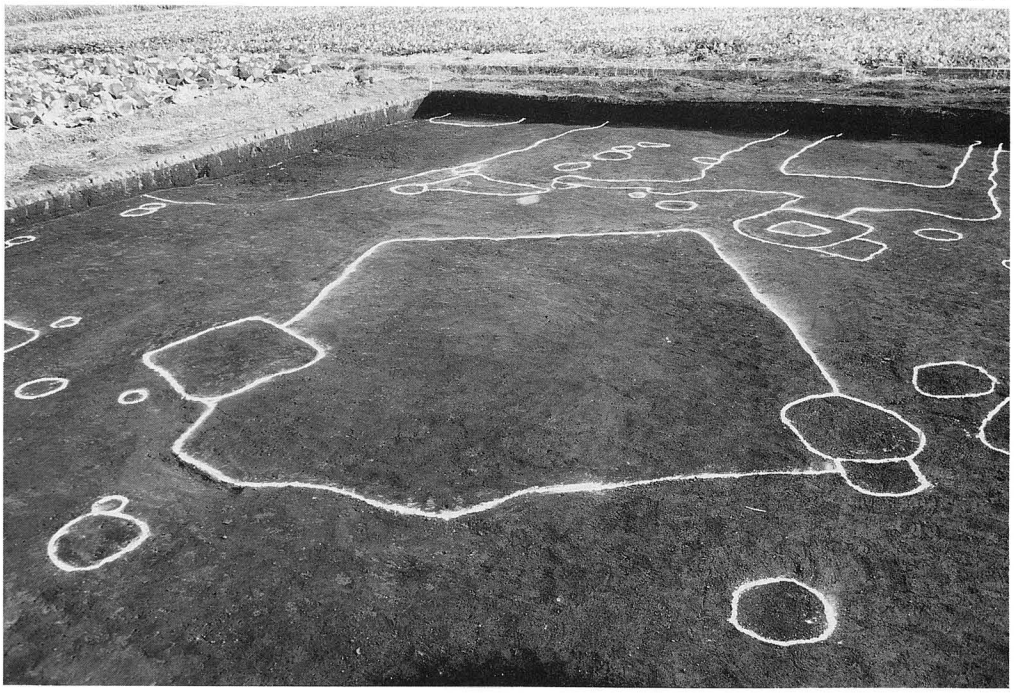
ST－25（北より）

図版10

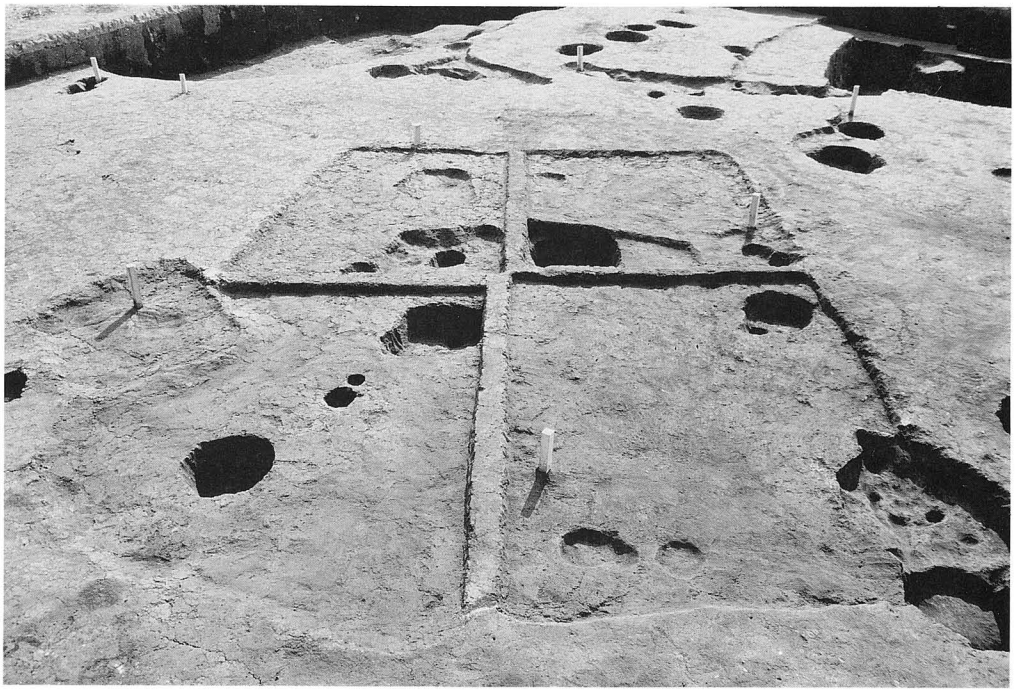


ST－26（西より）

ST－26（西より）

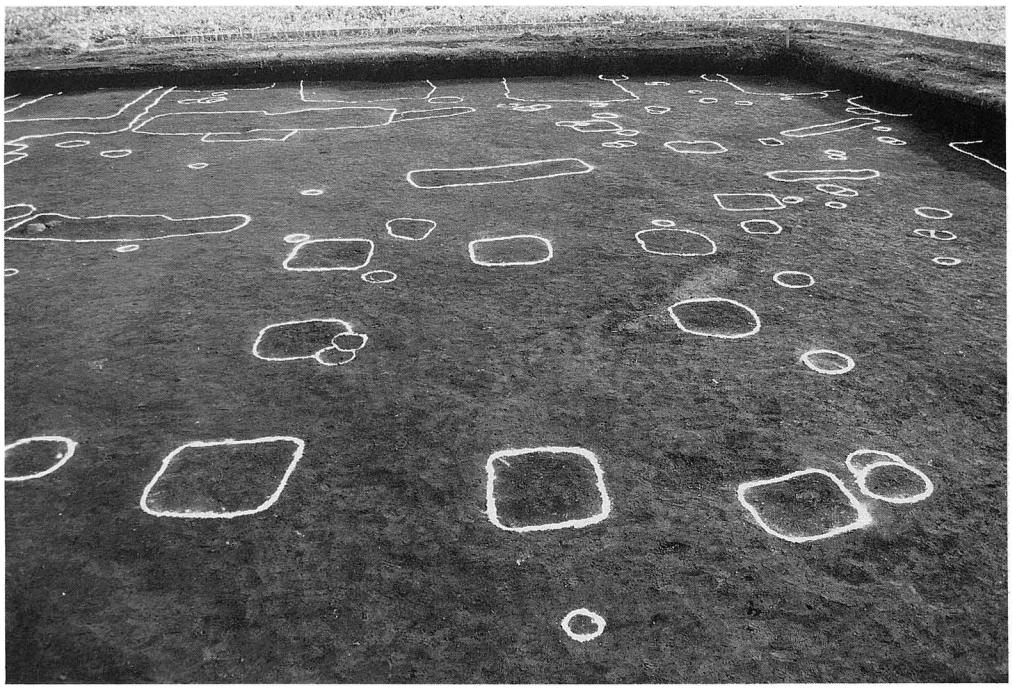


ST－27（北より）



ST－27（北より）

図版12



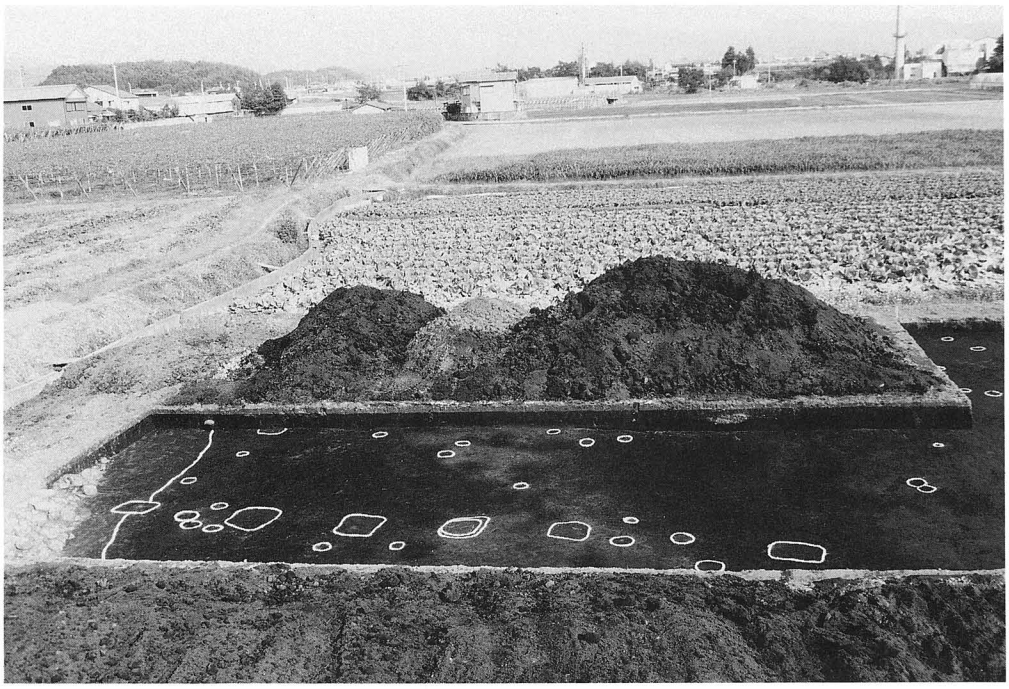
SB－56（北より）

SB－56（北より）

SB－57（北より）

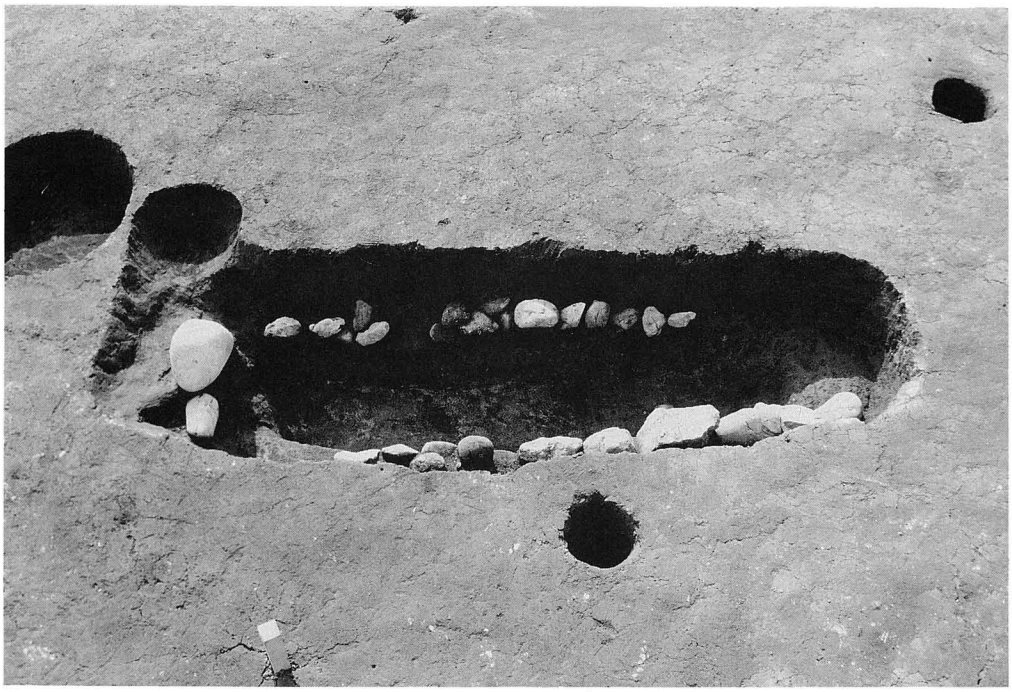
SB－58（北より）

図版14

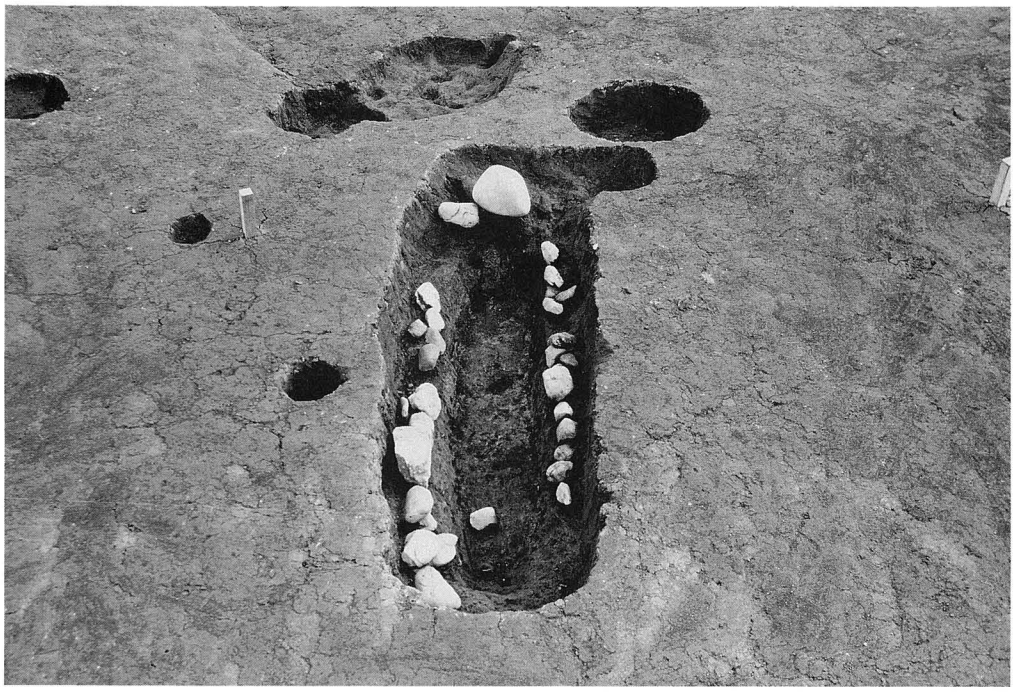


SA－16（西より）

SA－16（南より）

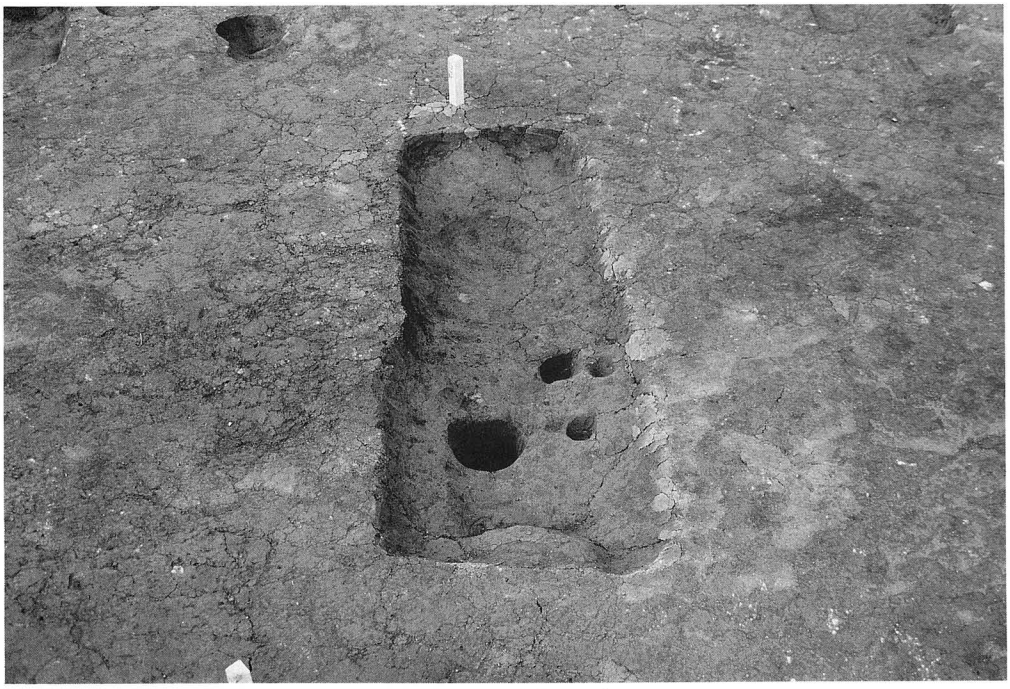


SK－79（北より）



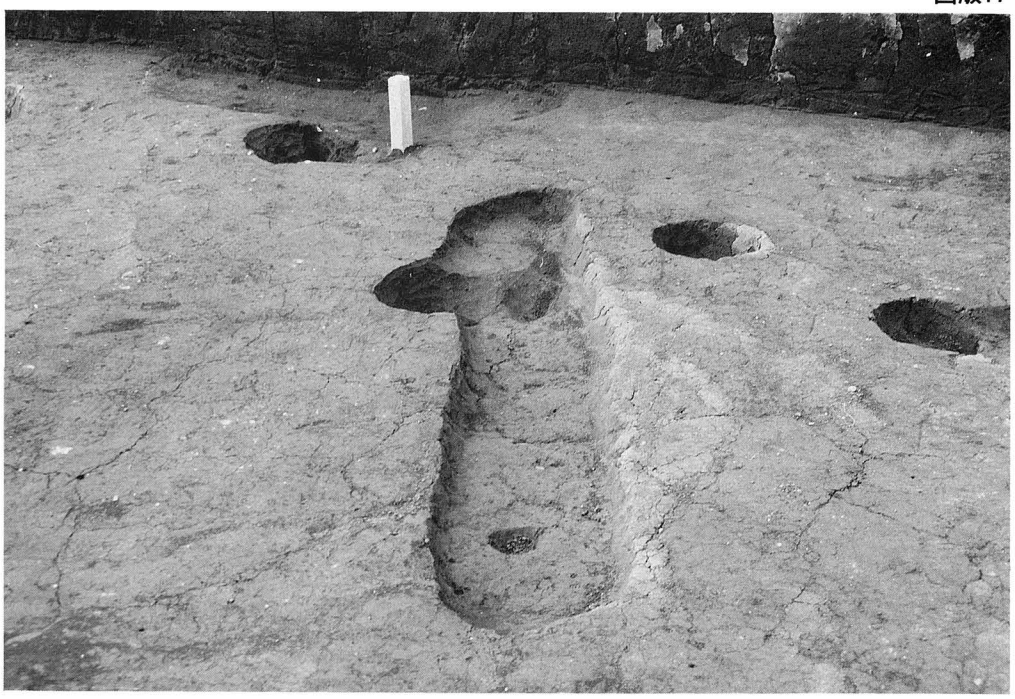
SK－79（西より）

図版16

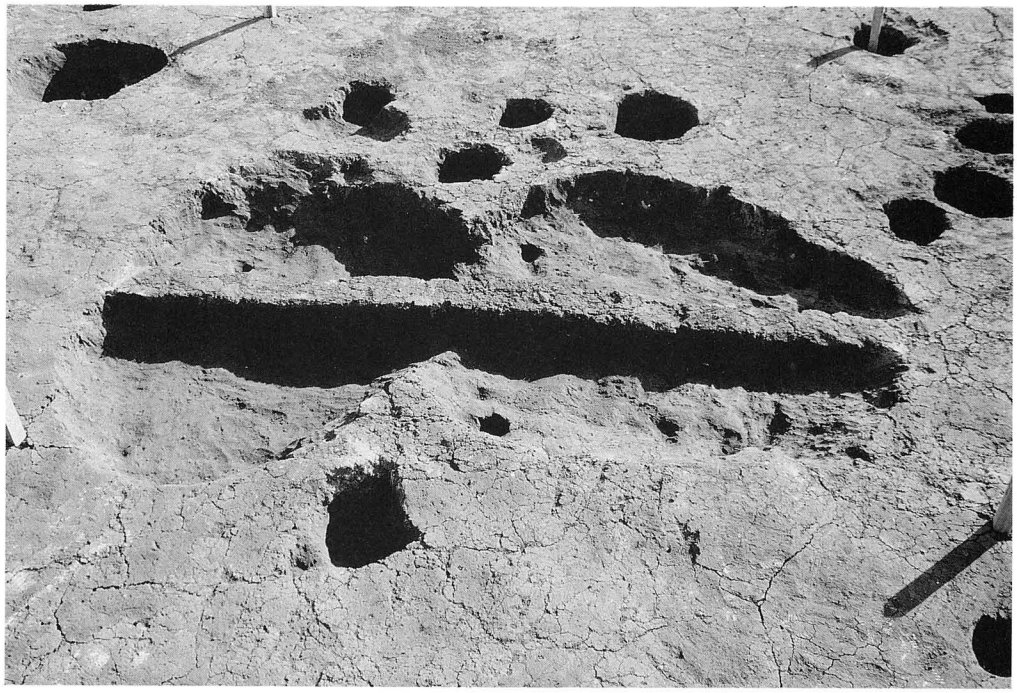


SK－80（東より）

SK－81（東より）

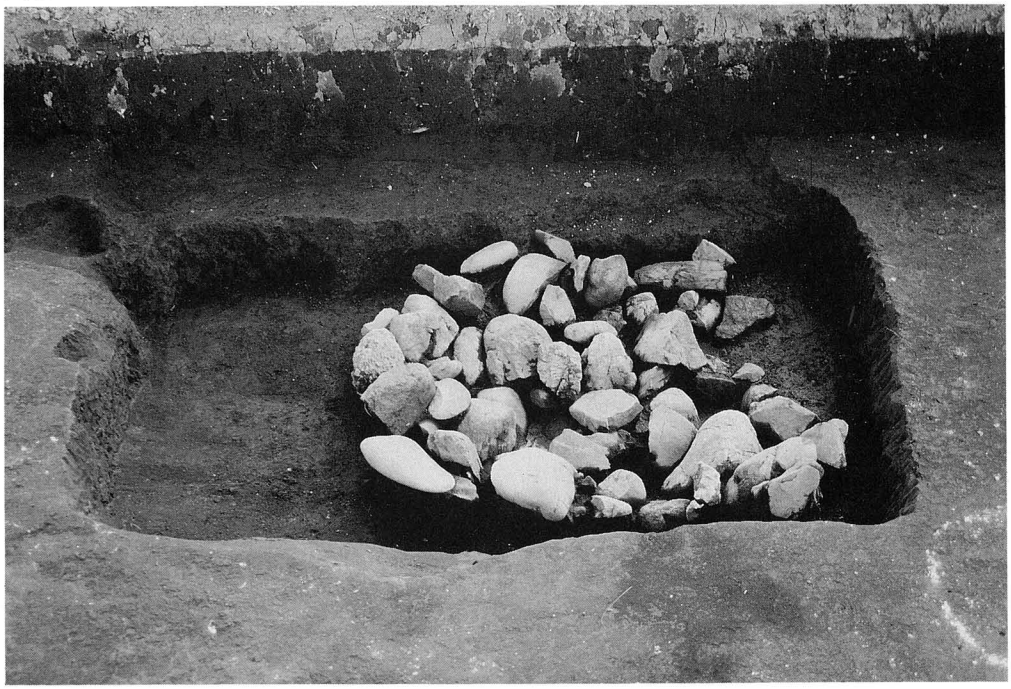


SK－82（東より）

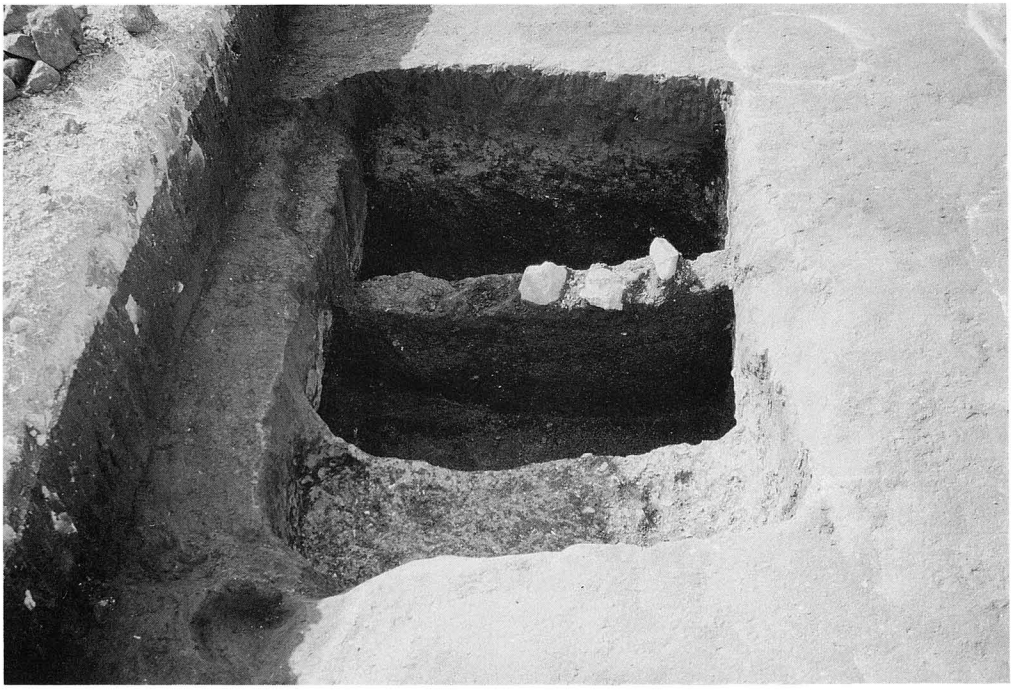


SK－84・85（北より）

図版18

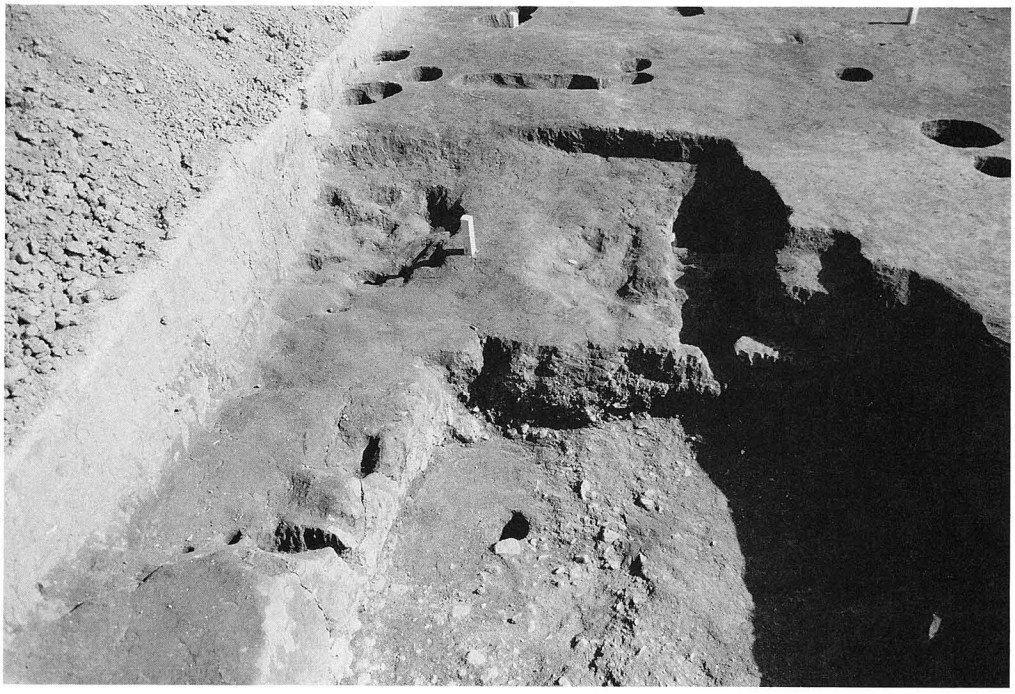


SK－88 集石検出状態（北より）



SK－88（東より）

SK－88（北より）



SK－94（西より）

図版20

SX－1～7（西より）

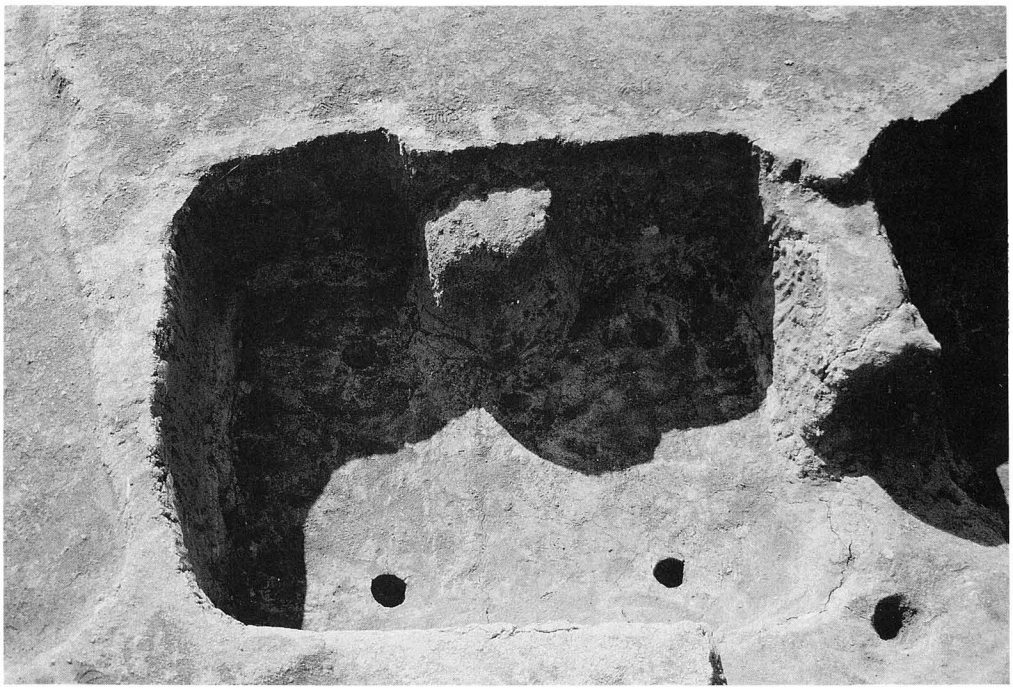
SX－1～7（東より）

SX－1・2．P－1（北より）

SX－1・2．P－1（西より）

図版22

SX－1（北より）

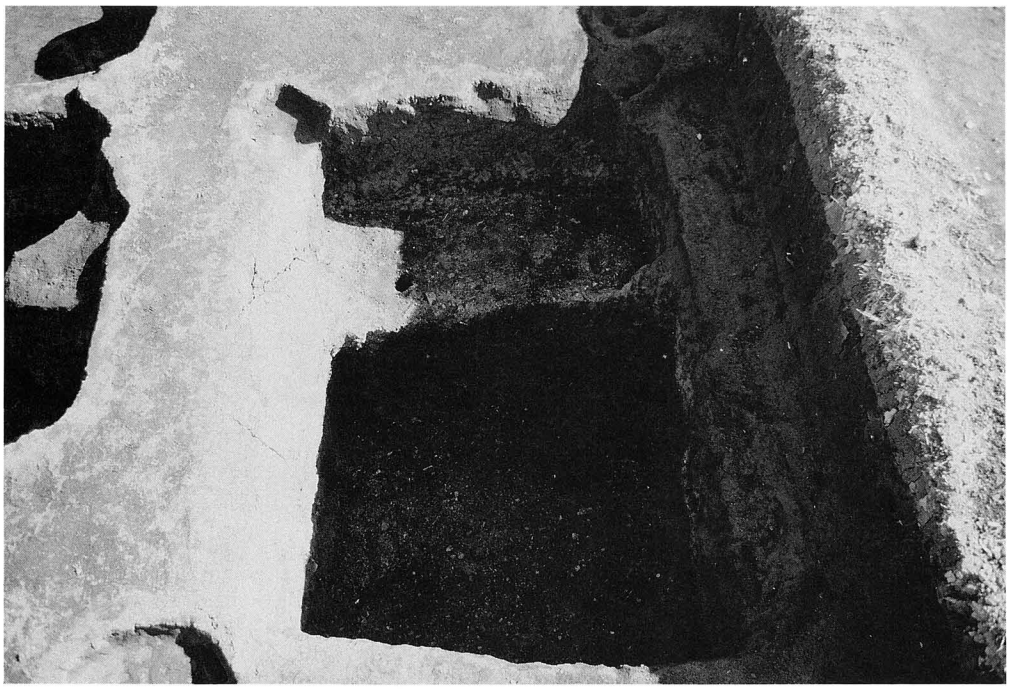


SX－2（北より）

SX－3（北より）

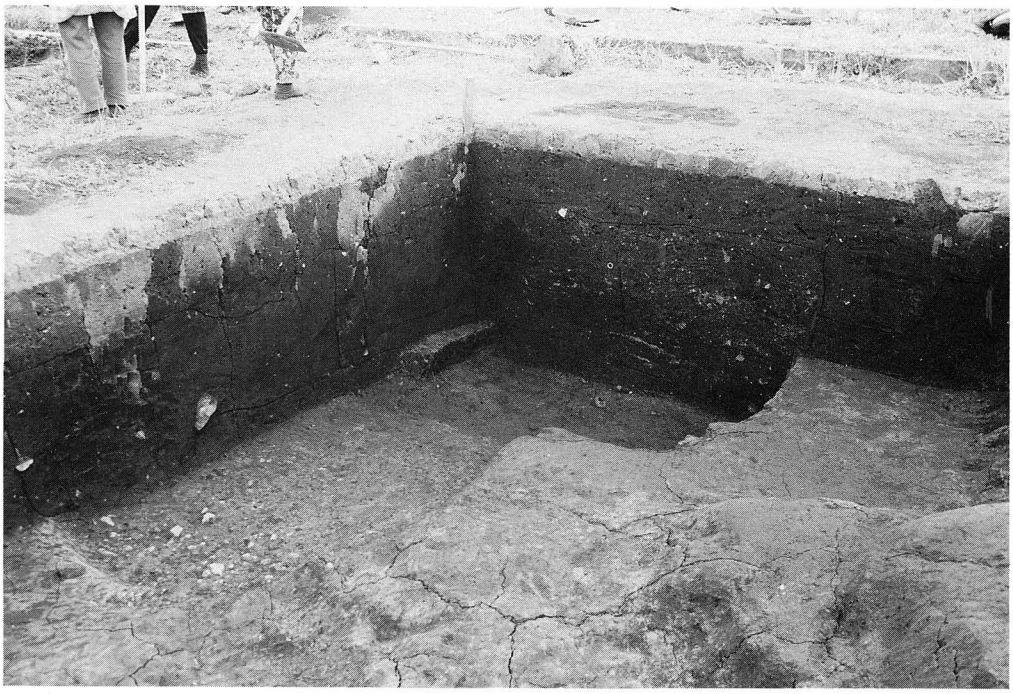
SX－4（北より）

図版24



SX－5、SX－88（西より）

SX－6（北より）



SX－7（北より）

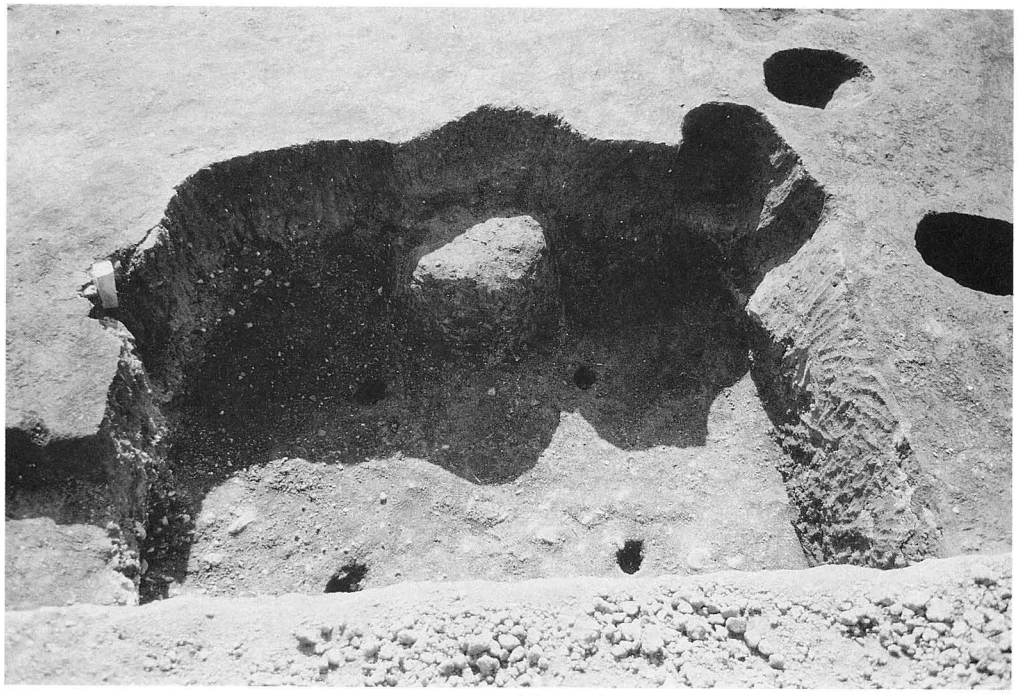
SX－7（北より）

図版26

SX－8（東より）

SX－9（北より）

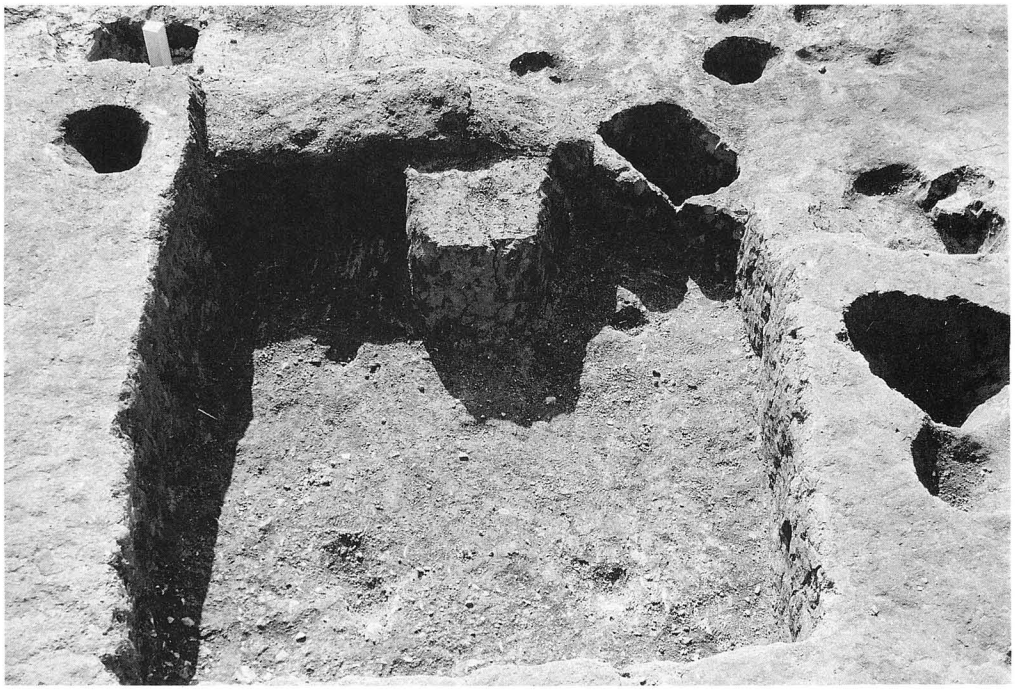
SX－10・11（東より）



SX－12（北より）

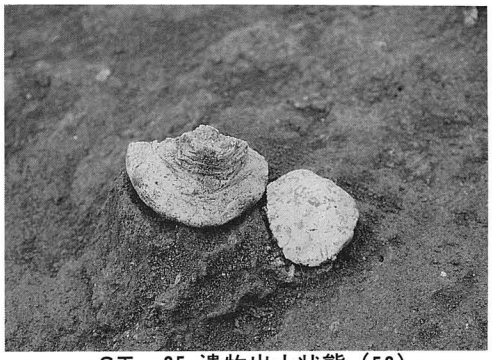
図版28

SX－13・14（東より）

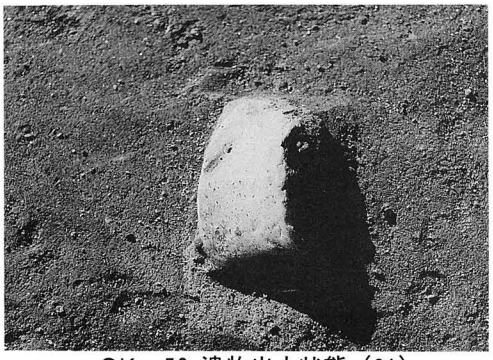


SX－15（北より）

ST－25 遺物出土状態（58）



ST－25 遺物出土状態（59）



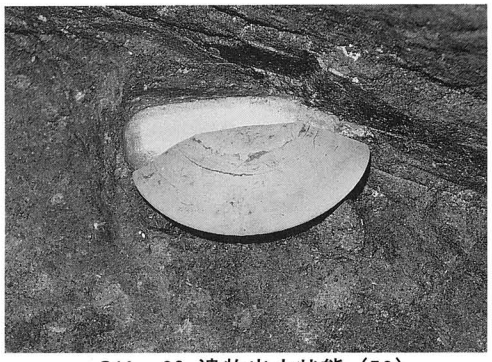
SK－79 遺物出土状態（61）

SK－88 遺物出土状態（71）

SK－88 遺物出土状態（72）

SK－88 遺物出土状態（75）

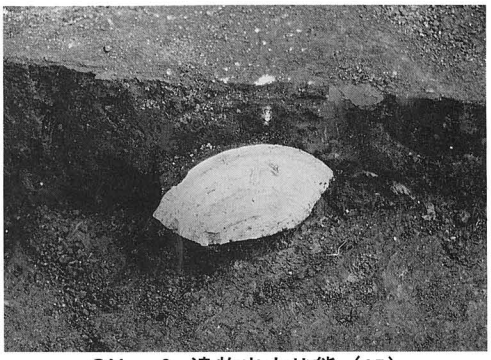
SK－93 遺物出土状態（78）



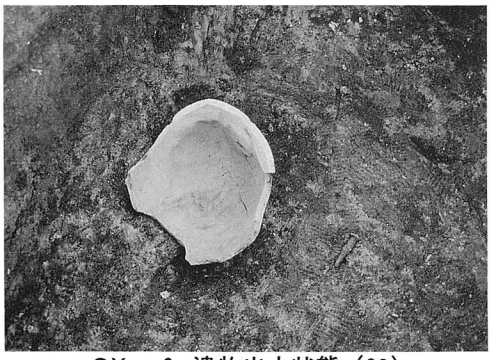
SK－93 遺物出土状態（79）

図版30

SK－79 遺物出土状態（82）



SX－2 遺物出土状態（87）



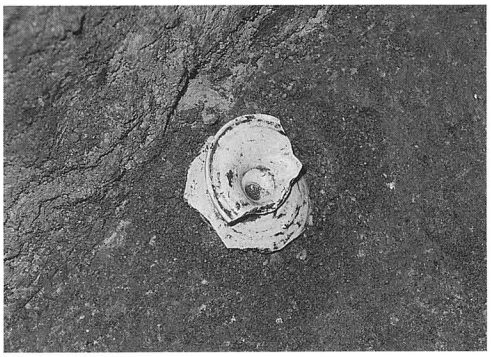
SX－3 遺物出土状態（89）

SX－4 遺物出土状態（93）

SX－5 遺物出土状態（94）

SX－5 遺物出土状態（97）

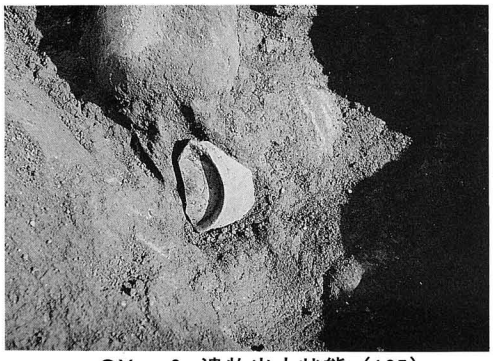
SX－6 遺物出土状態（98）



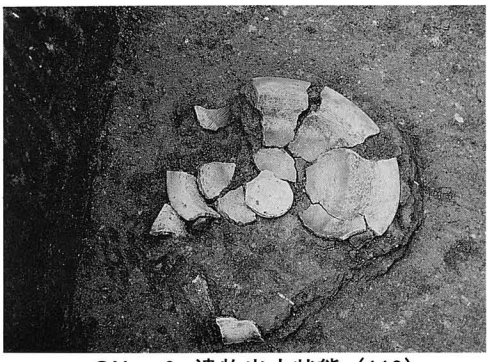
SX－6 遺物出土状態（100）

SX－6 遺物出土状態（102）

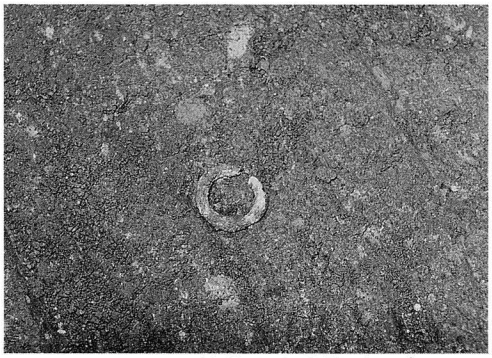
SX－6 遺物出土状態（104）



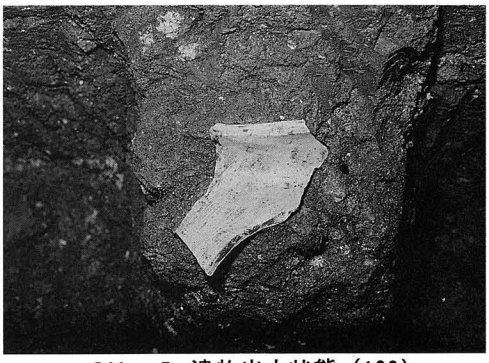
SX－6 遺物出土状態（107）



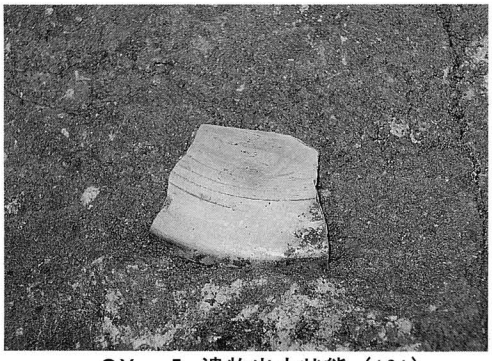
SX－6 遺物出土状態（110）



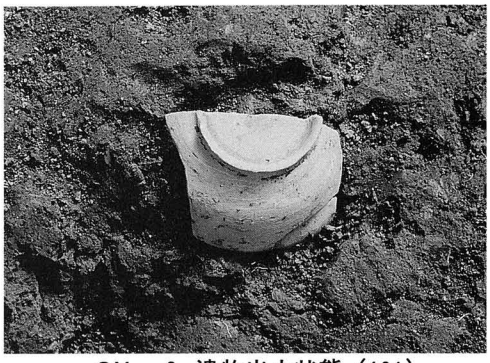
SX－6 遺物出土状態（119）



SX－7 遺物出土状態（120）

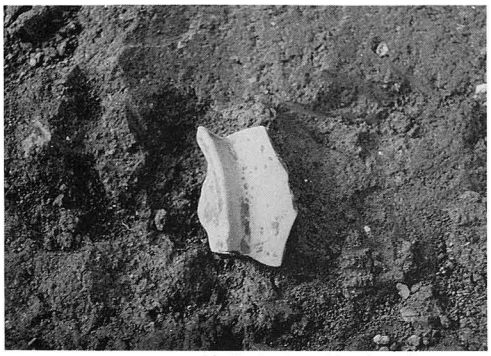


SX－7 遺物出土状態（121）



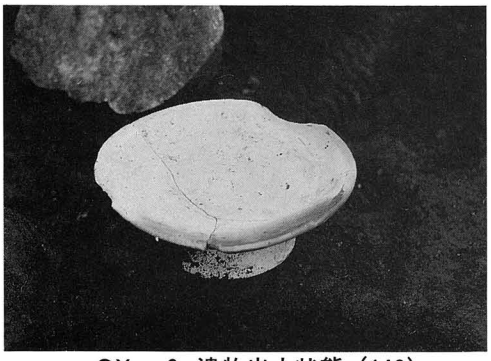
SX－9 遺物出土状態（131）

図版32

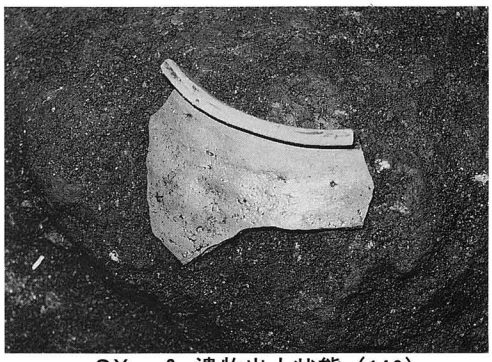


SX－9 遺物出土状態（132）

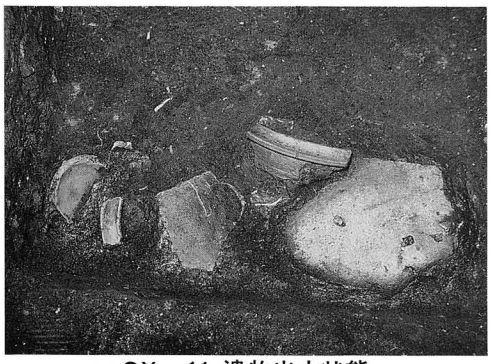
SX－9 遺物出土状態（139）



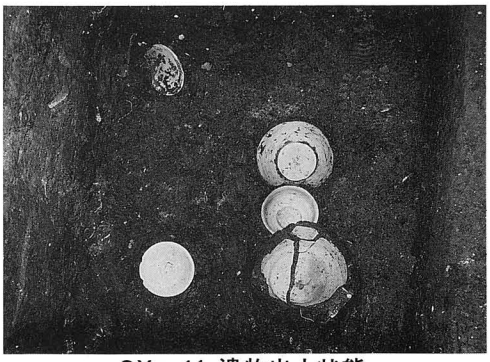
SX－9 遺物出土状態（140）



SX－9 遺物出土状態（146）

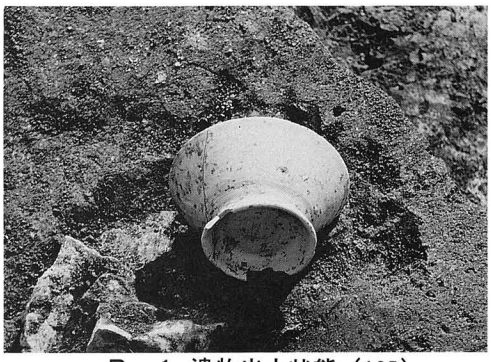


SX－11 遺物出土状態

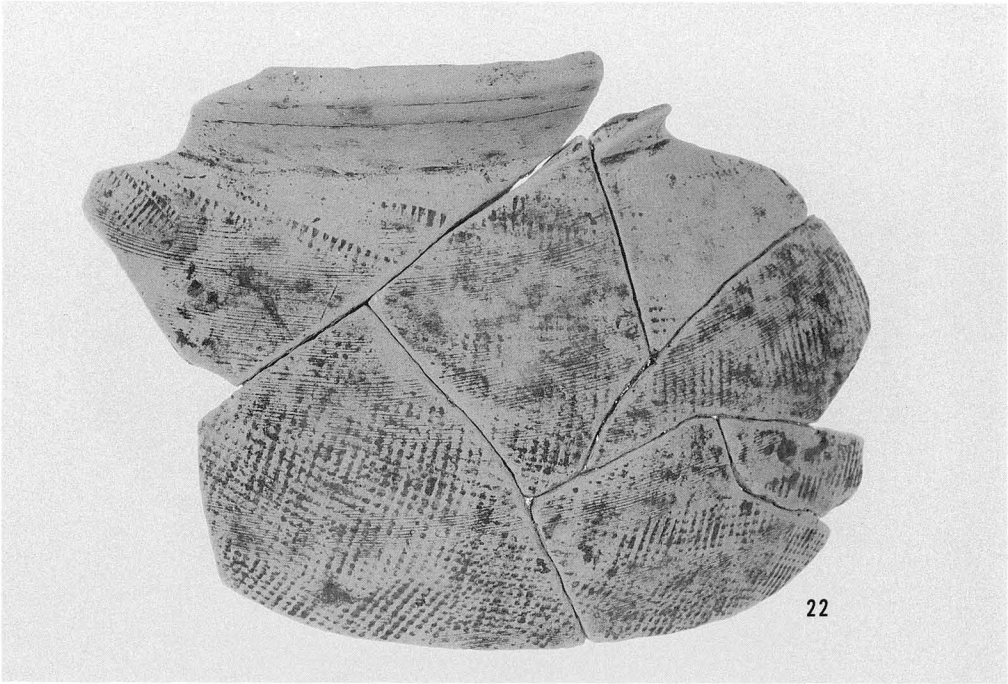


SX－11 遺物出土状態

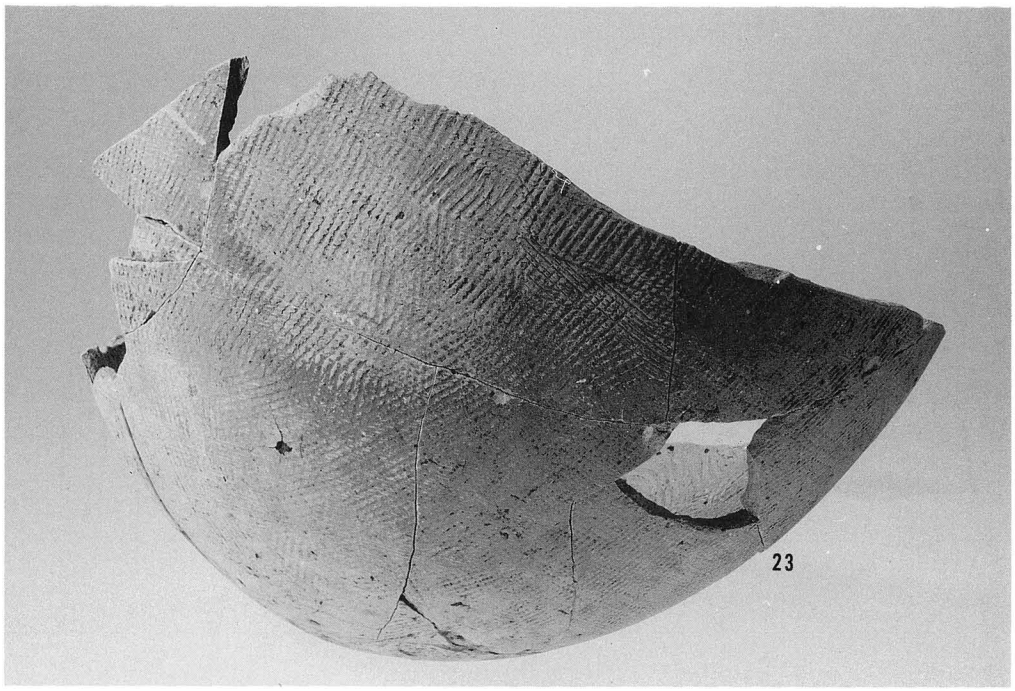
SX－14 遺物出土状態（187）



P－1 遺物出土状態（195）

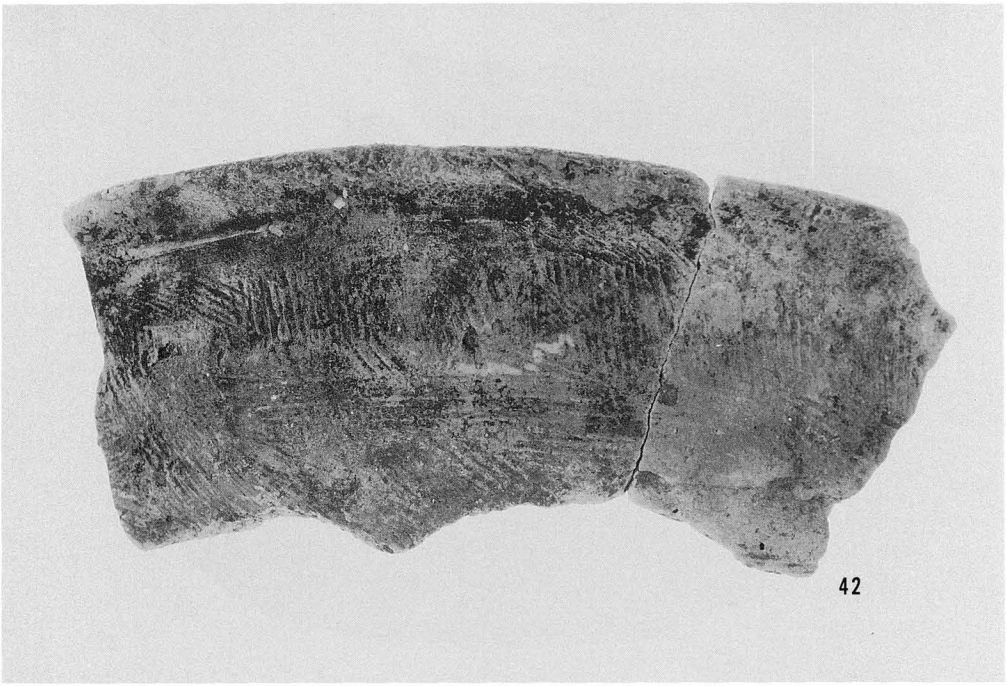


第II層 出土遺物

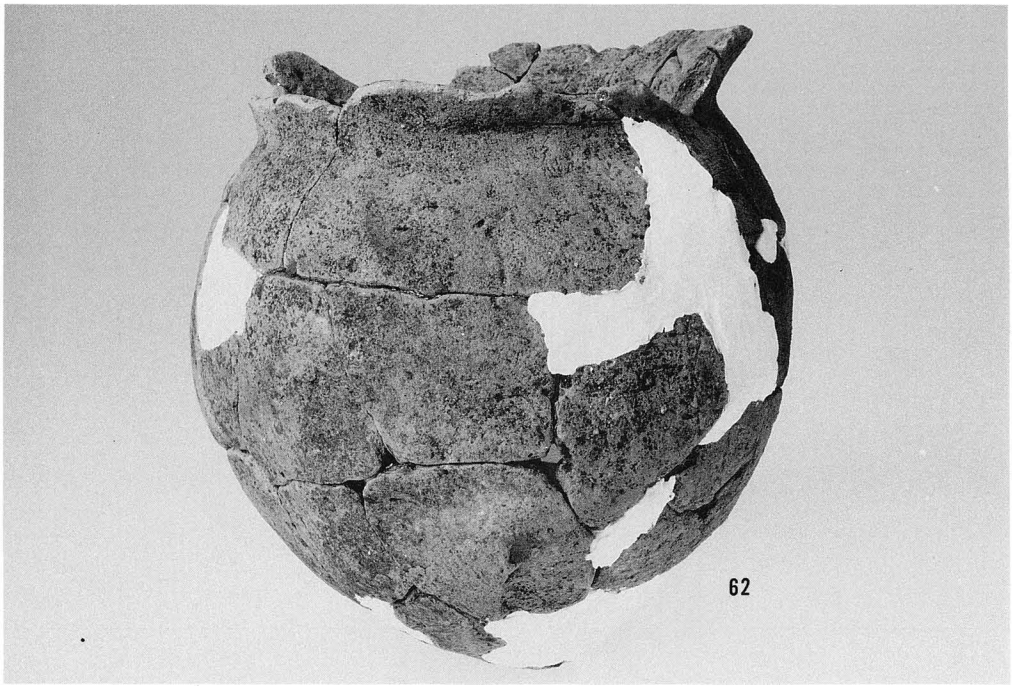


第II層 出土遺物

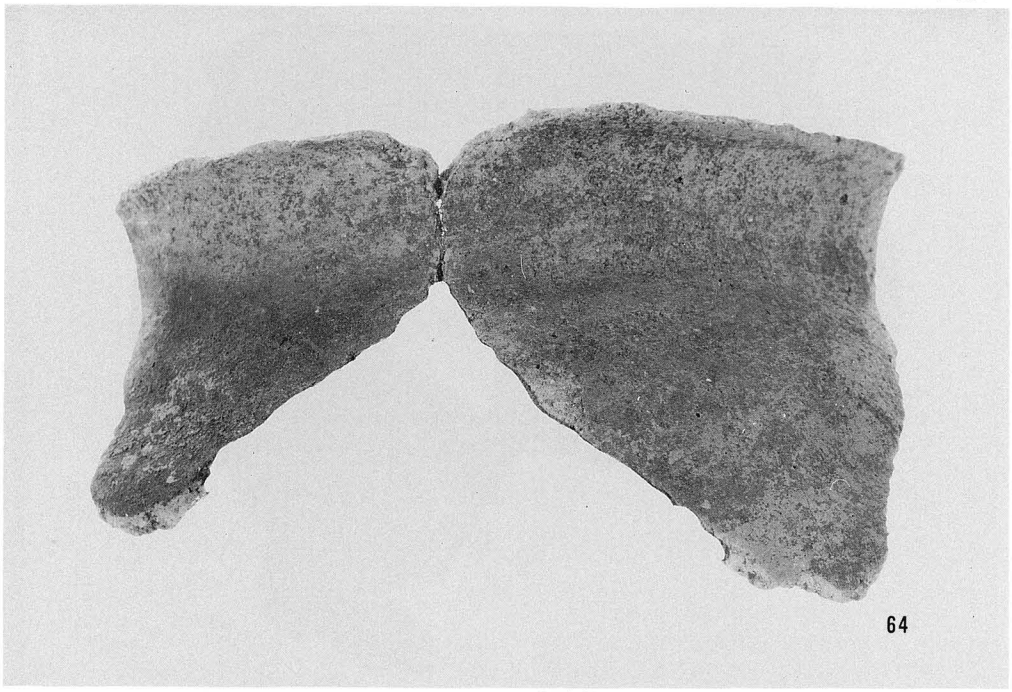
図版34



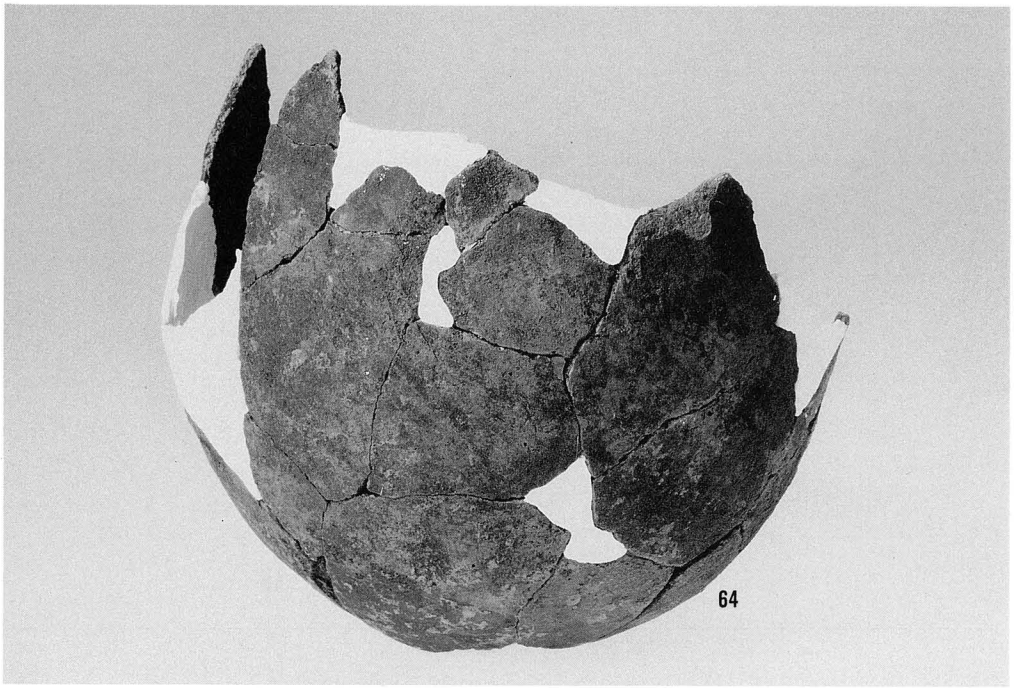
第II層 出土遺物



ST－26 出土遺物

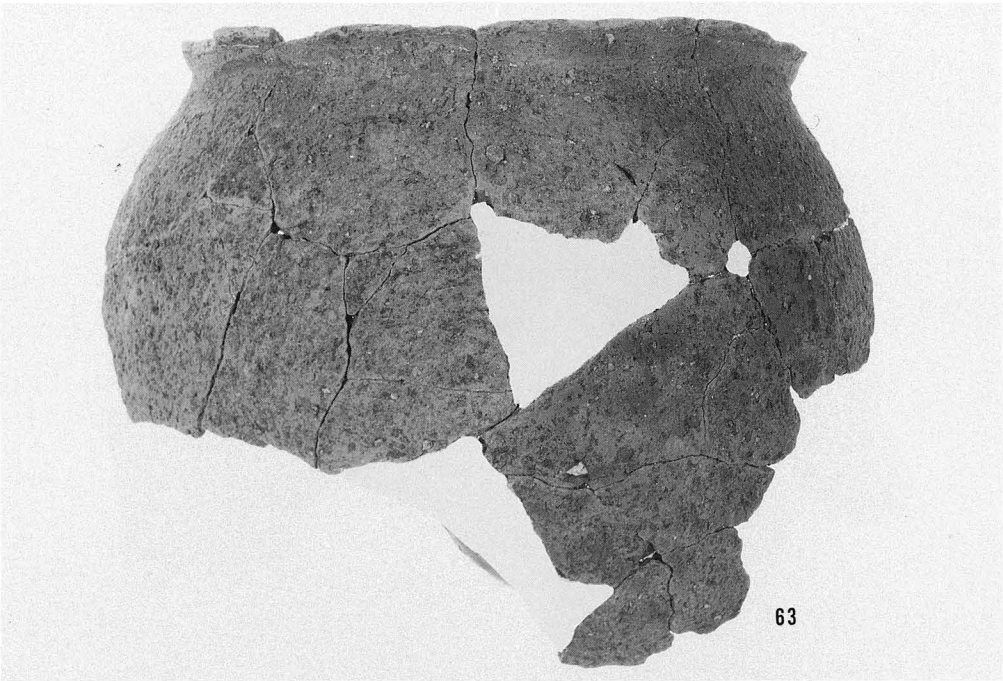


ST－26 出土遺物

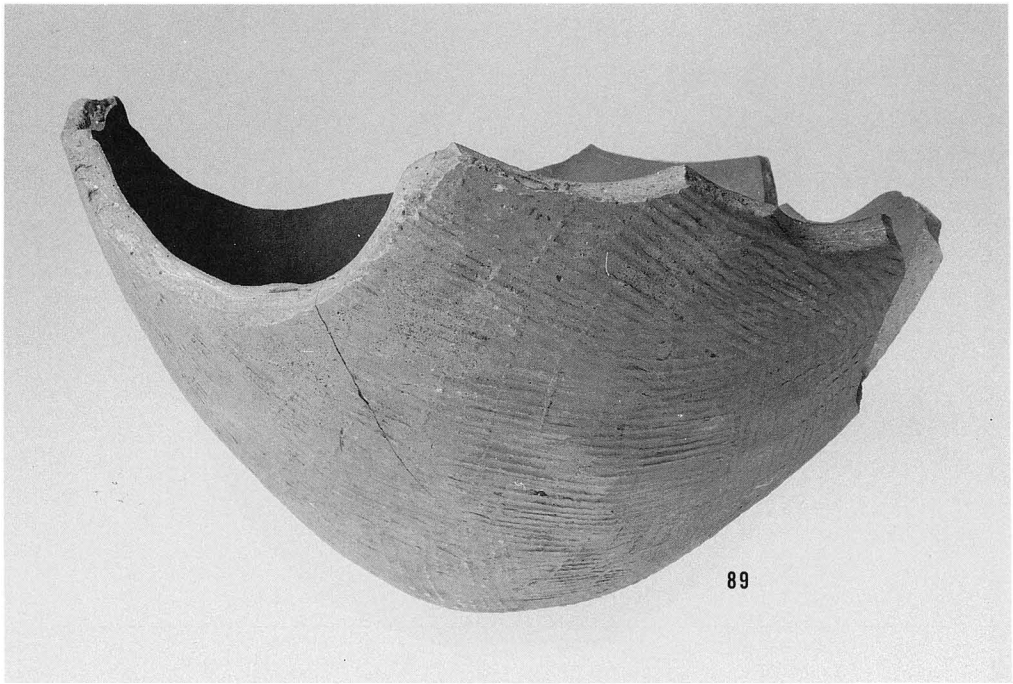


ST－26 出土遺物

図版36

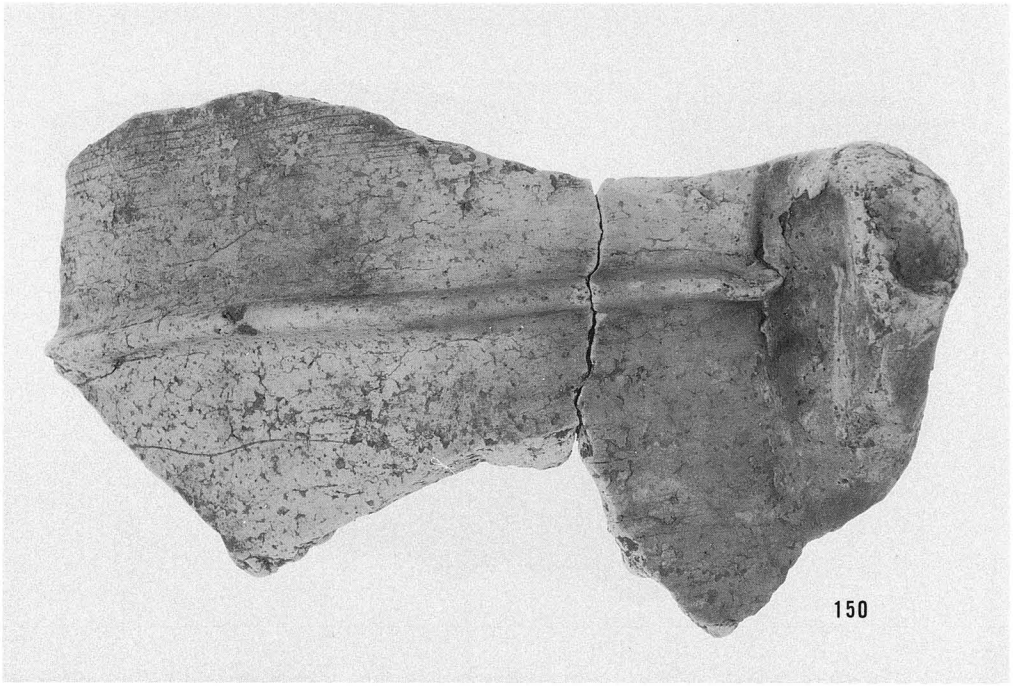


ST－26 出土遺物



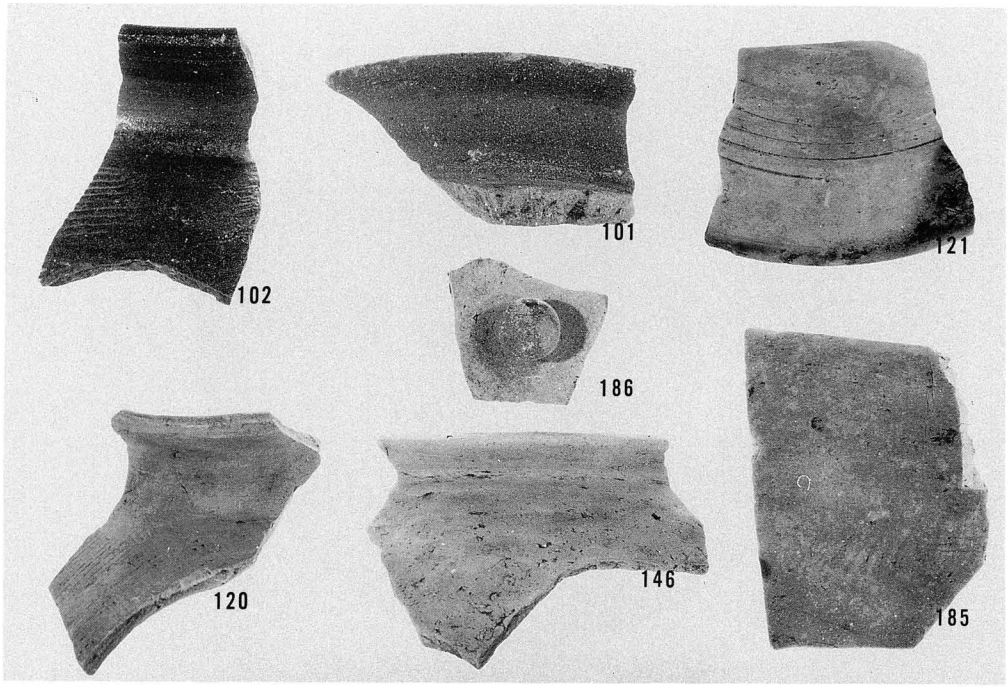
SX－3 出土遺物

SX－6　出土遺物

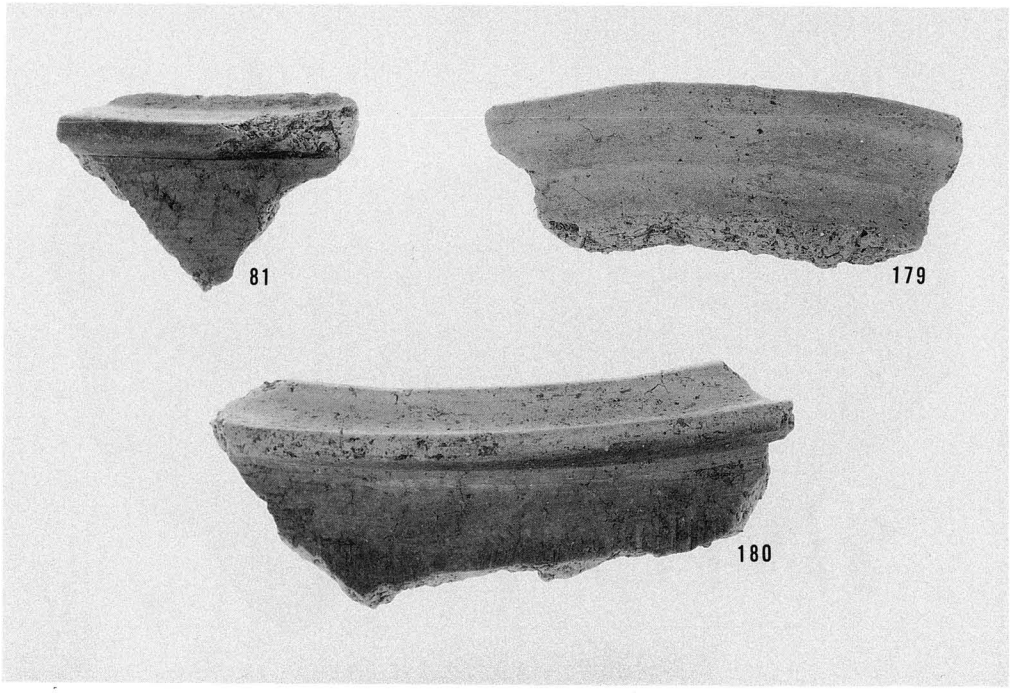


SX－9　出土遺物

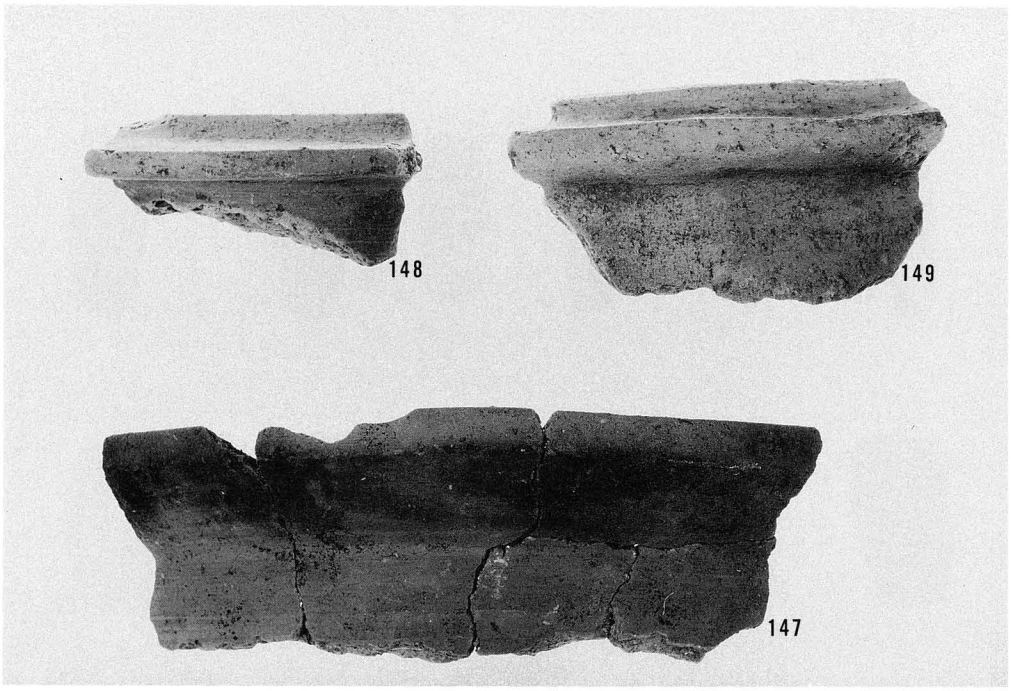
図版38



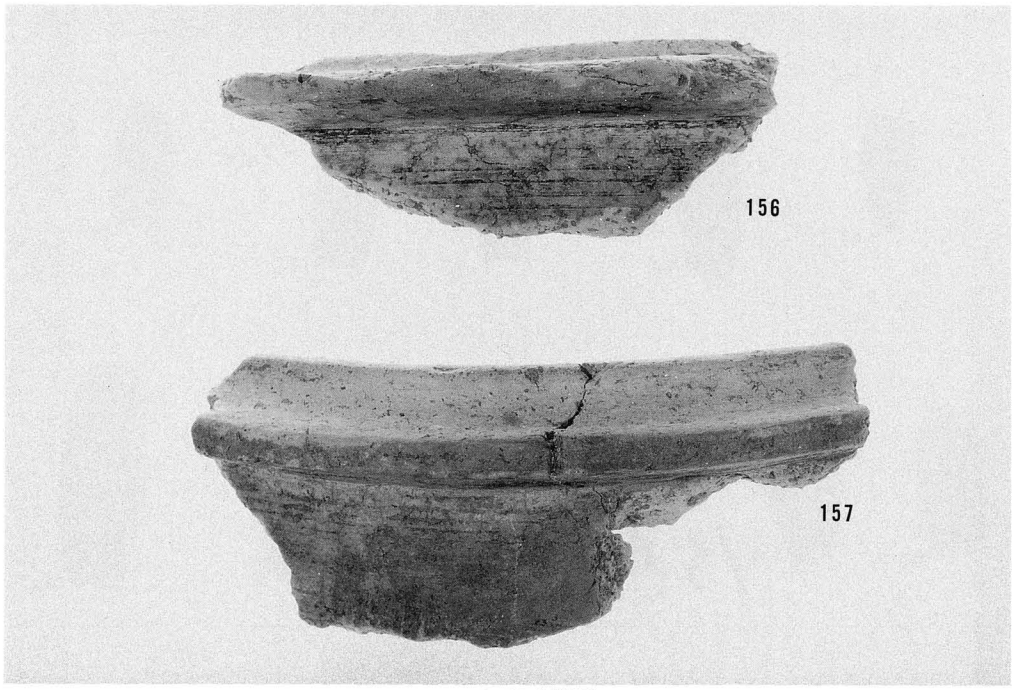
SX－6・7・9・13・14 出土遺物



SX－11、SK－94 出土遺物

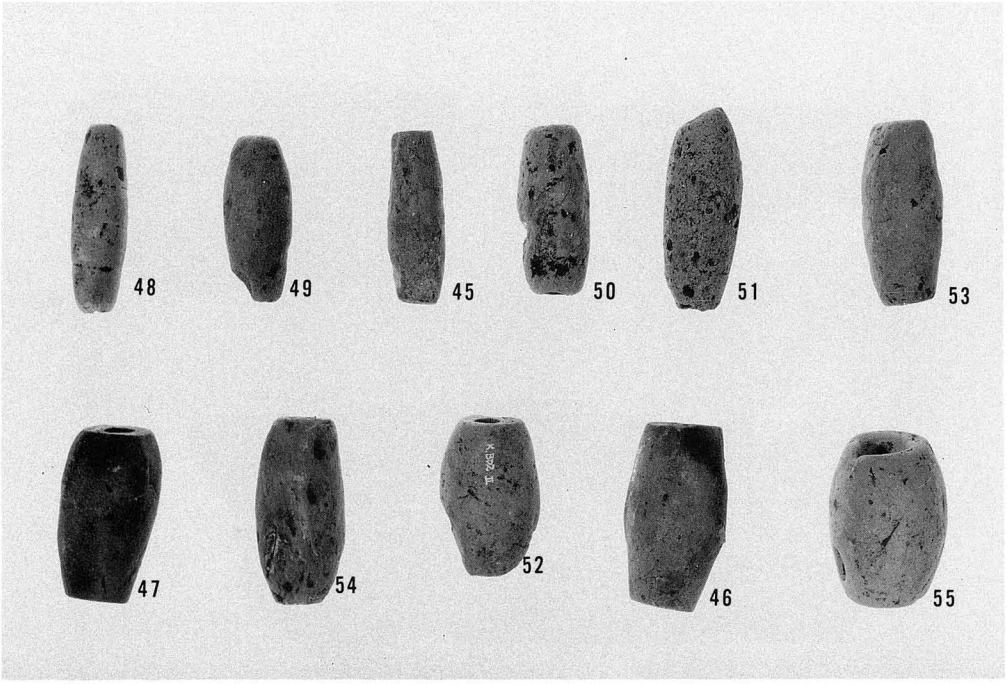


SX－9 出土遺物

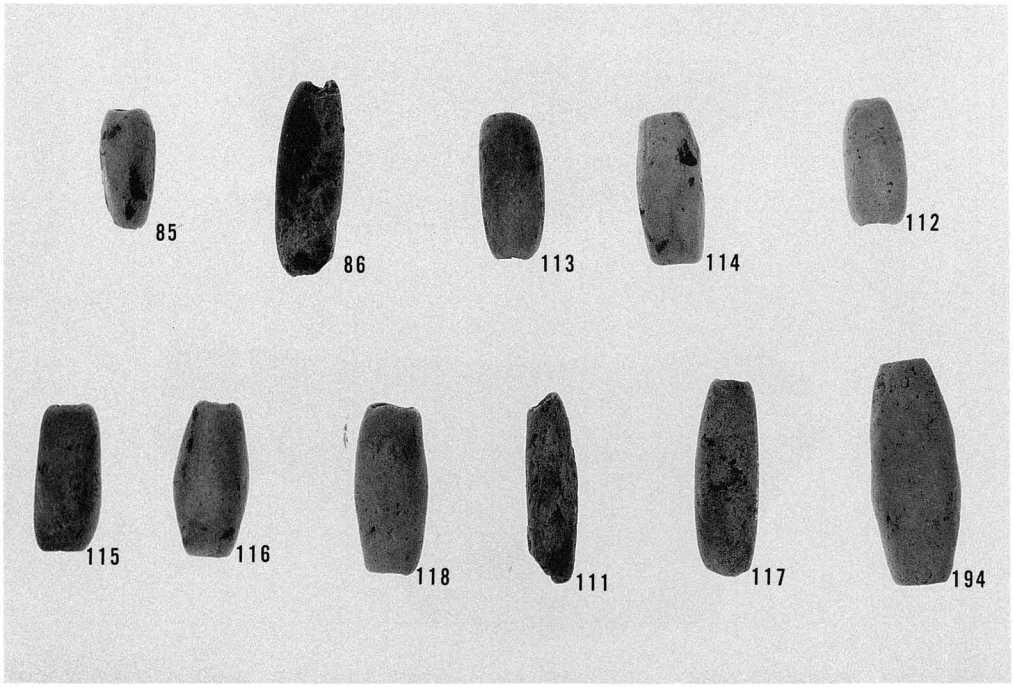


SX－11 出土遺物

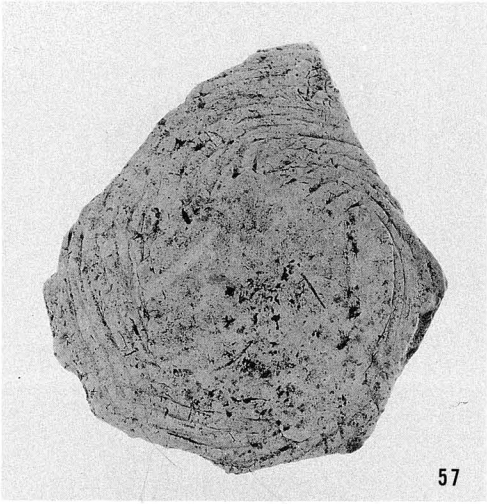
図版40

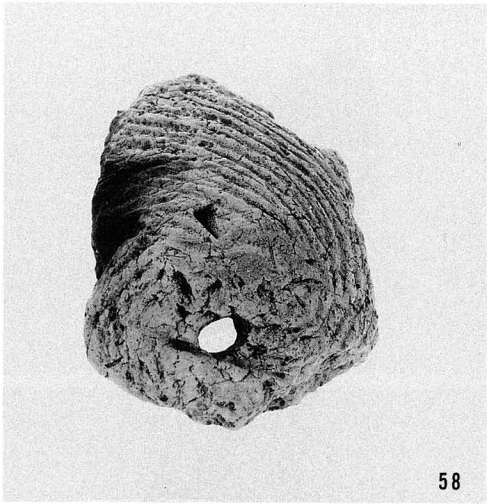


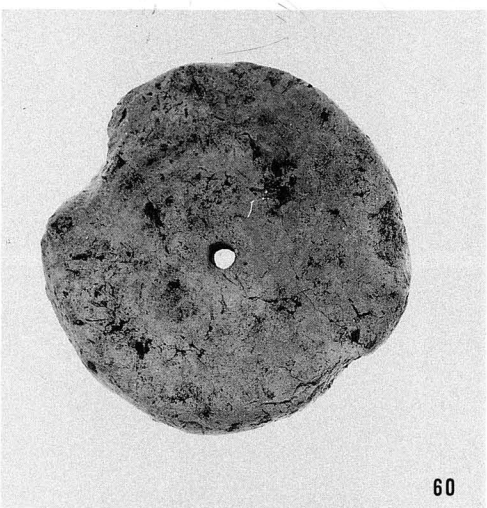
第II層 出土遺物

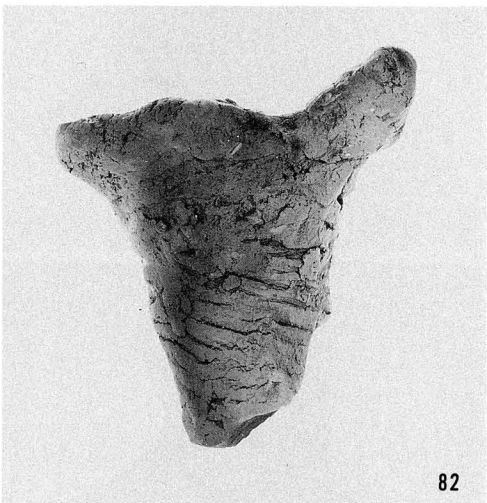


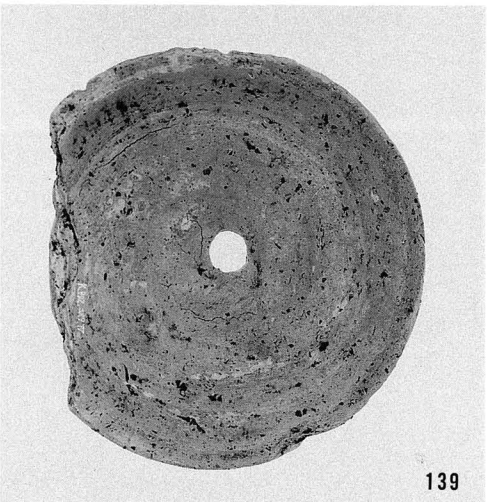
SX－1・6・15 出土遺物

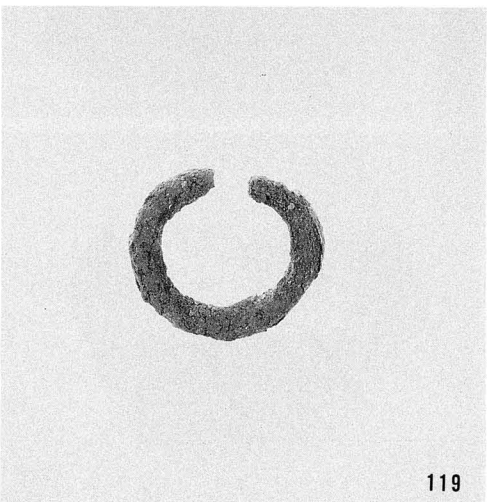






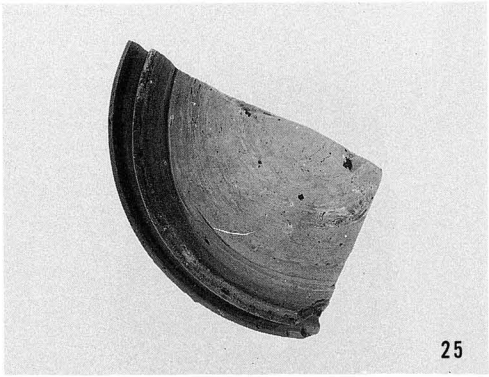


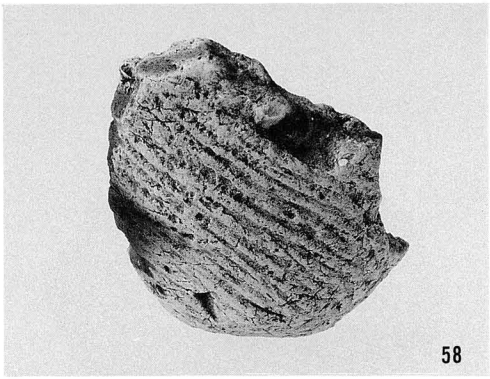


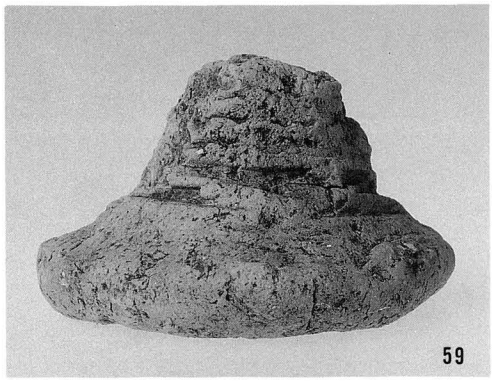


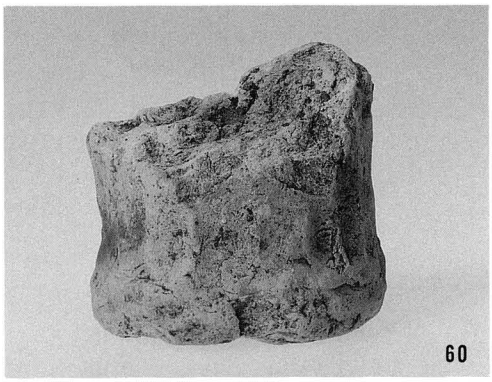
出土遺物 1

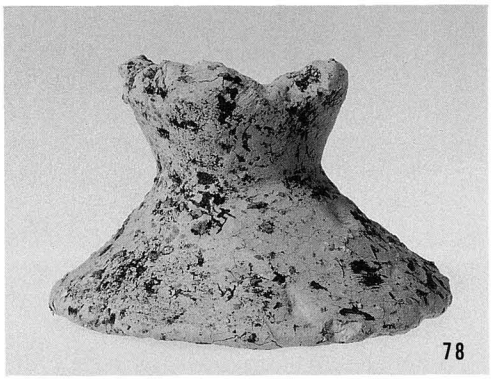
図版42

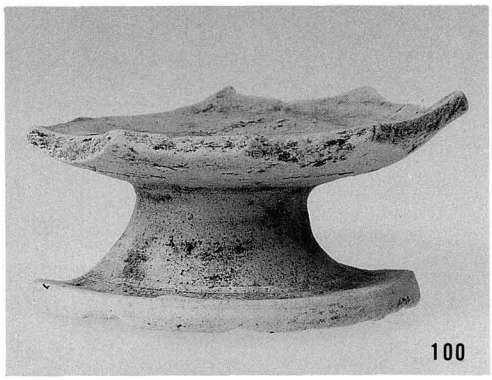


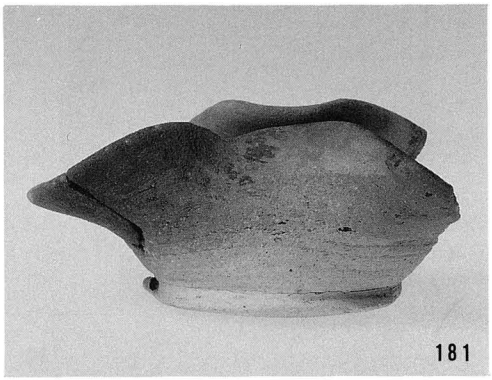




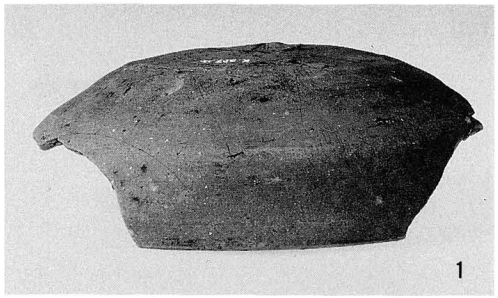


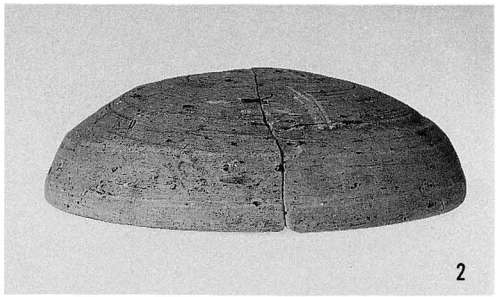


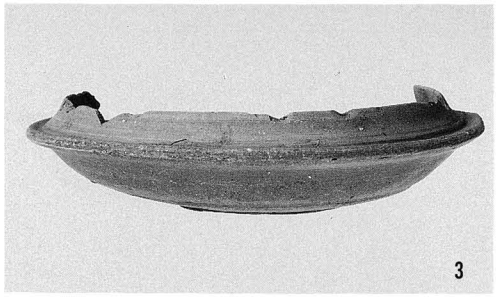


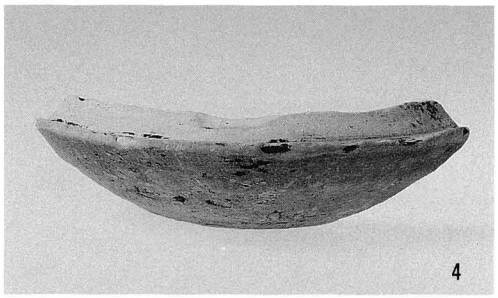


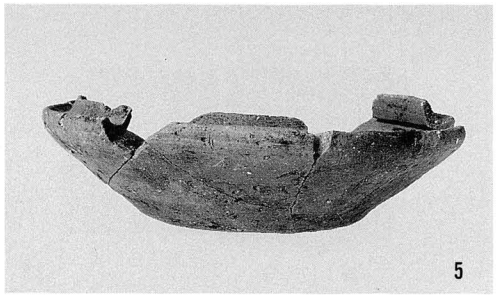
出土遺物 2

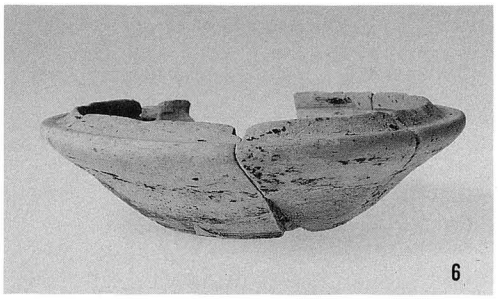


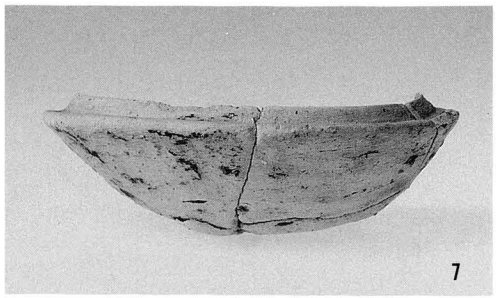


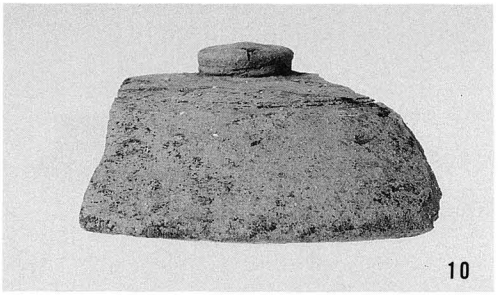


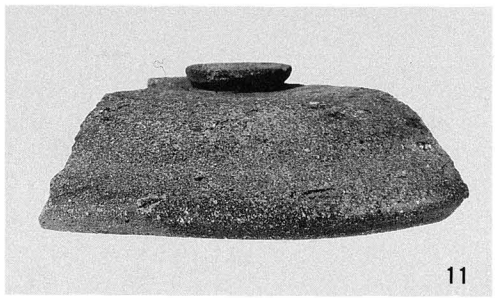








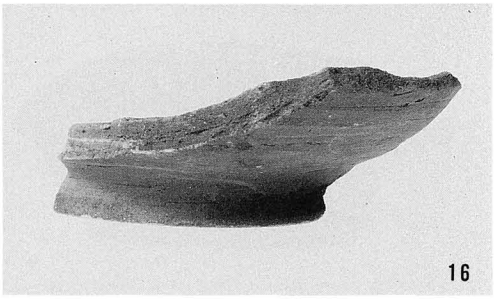


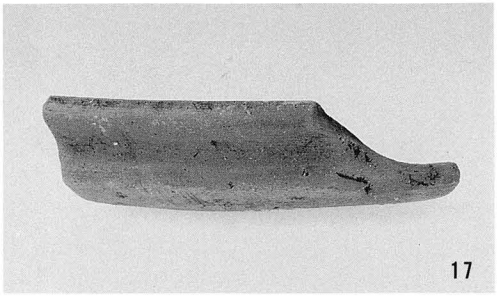


出土遺物 3

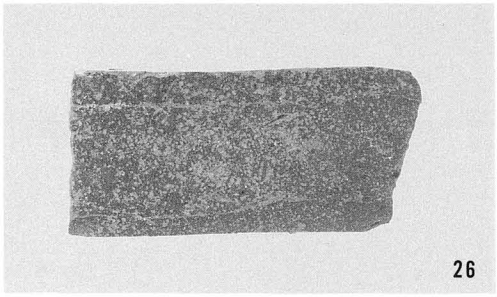
図版44

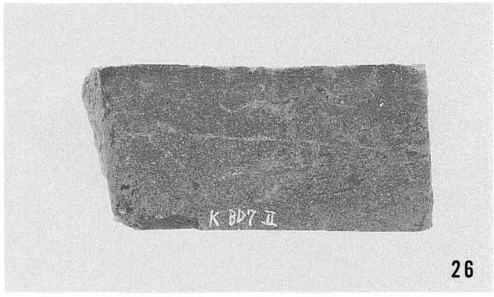
15


16

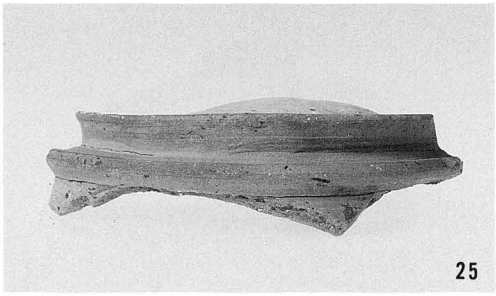

17

19


26



26

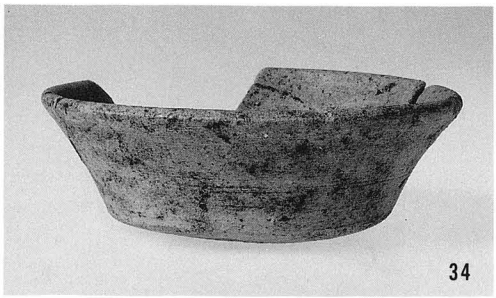

25

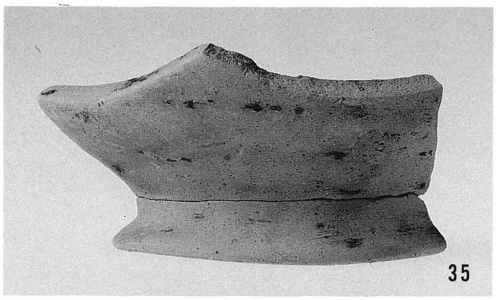
30

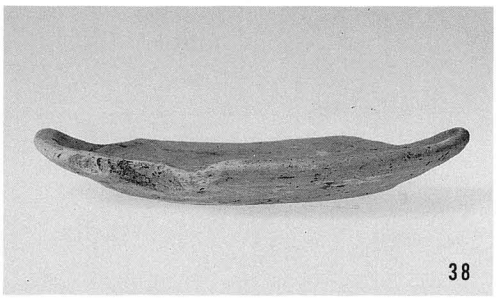
31

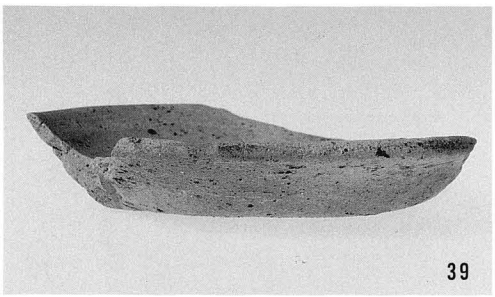
32

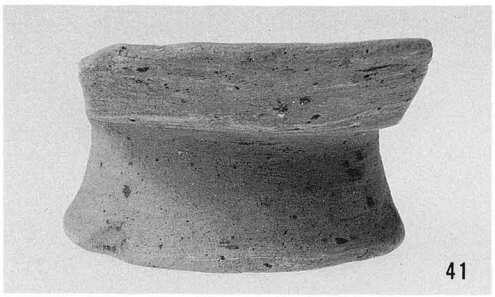
出土遺物 4

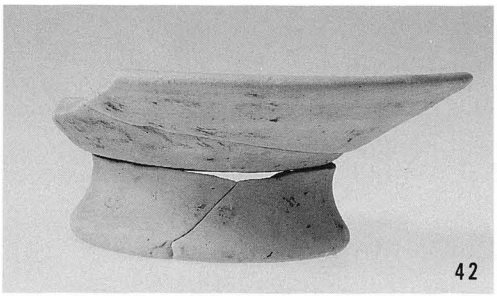


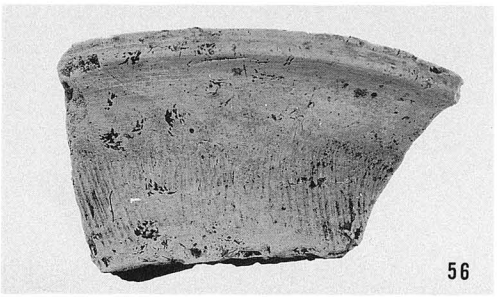






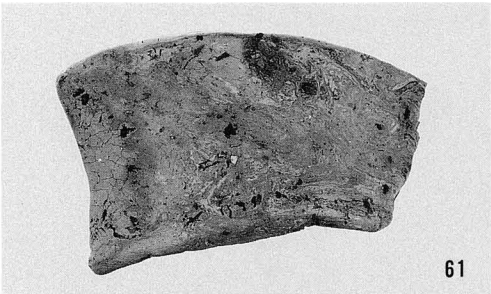


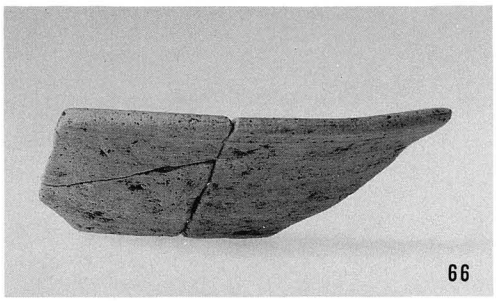


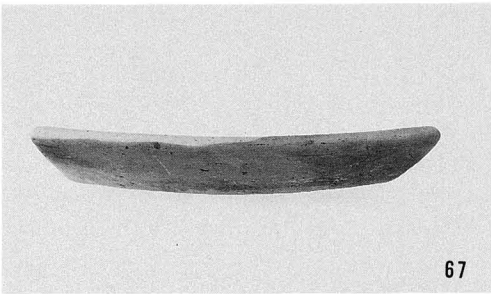


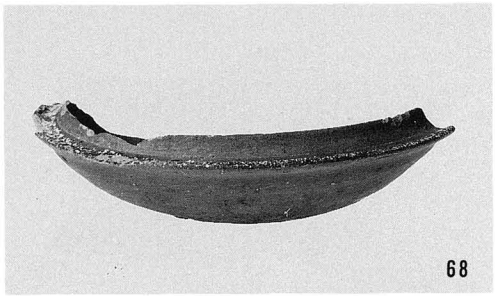
出土遺物 5

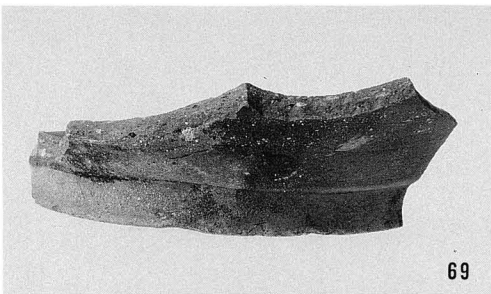
図版46

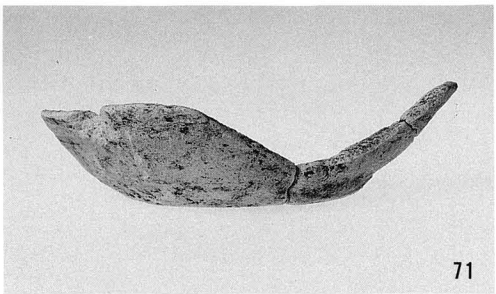


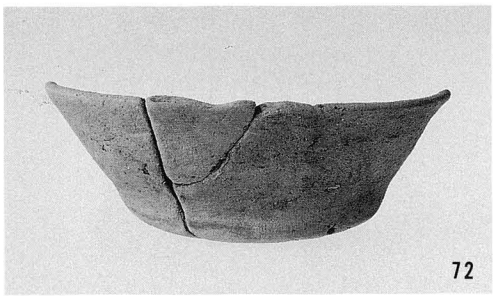


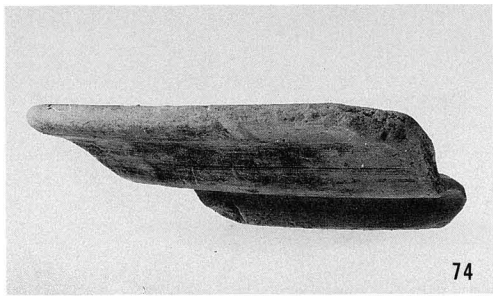




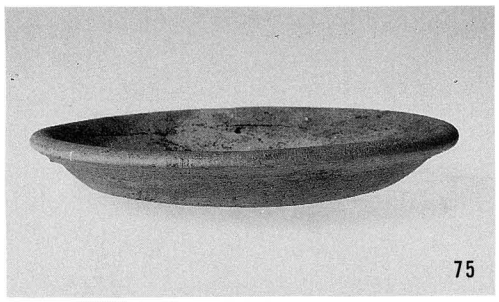


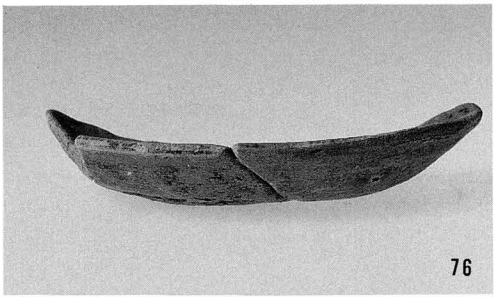


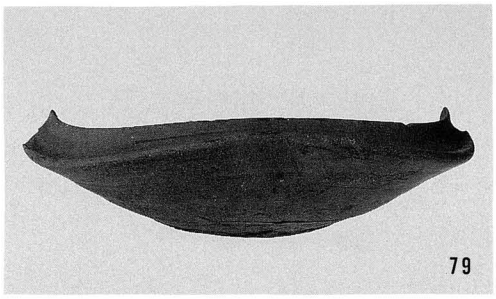


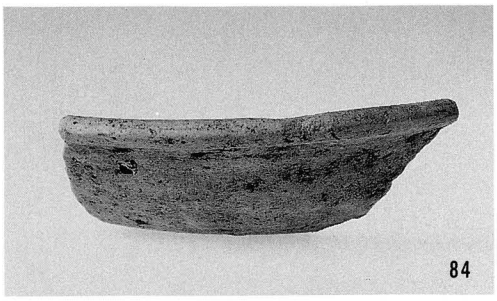


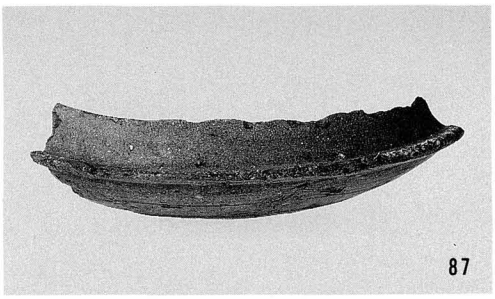
出土遺物 6

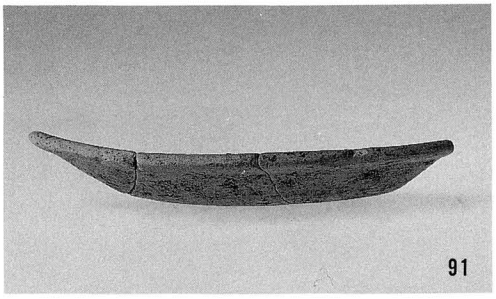


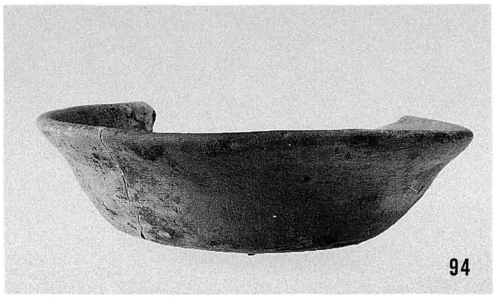


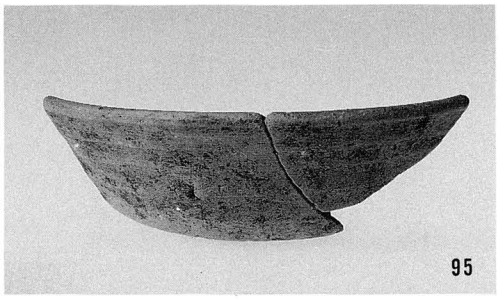






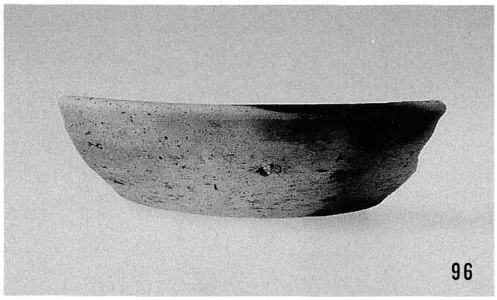


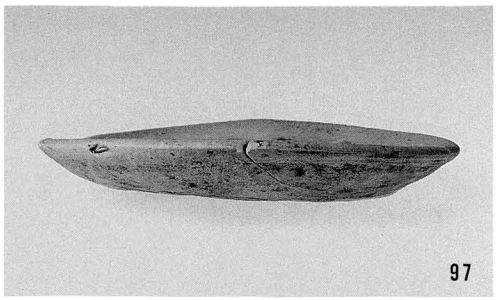


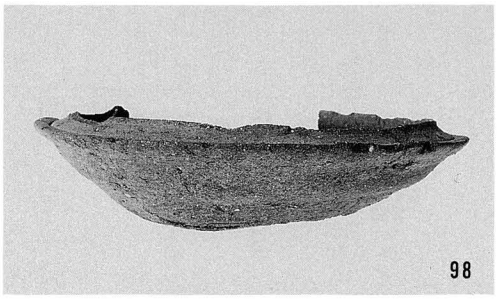


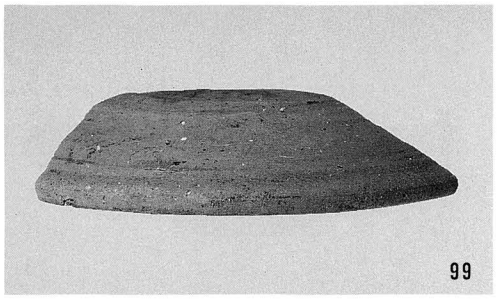
出土遺物 7

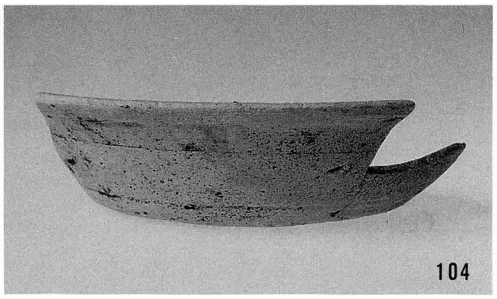
図版48

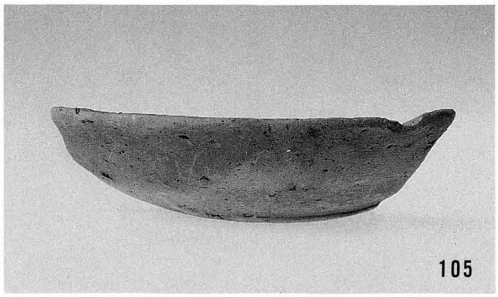


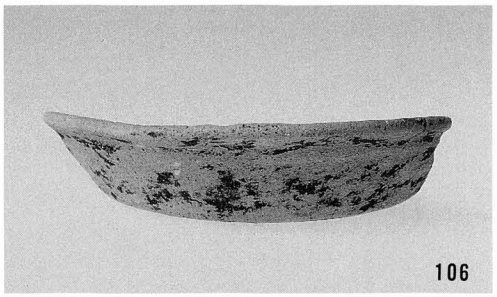


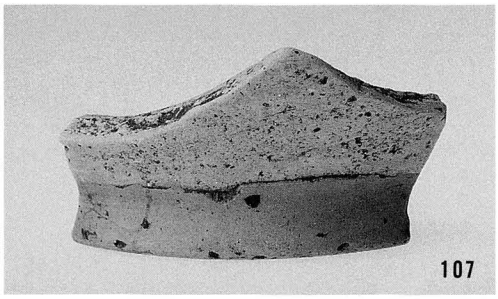




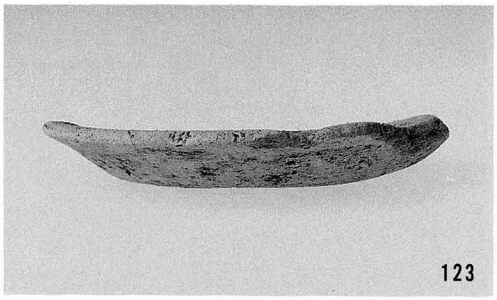


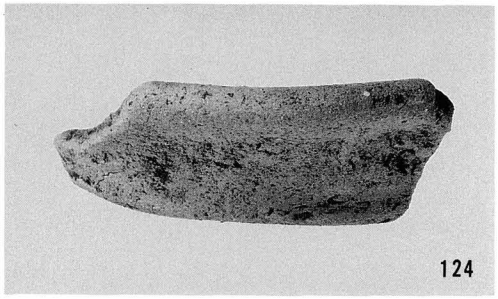


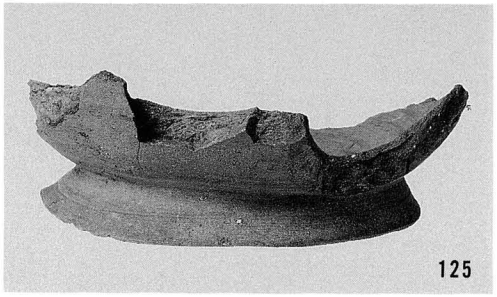


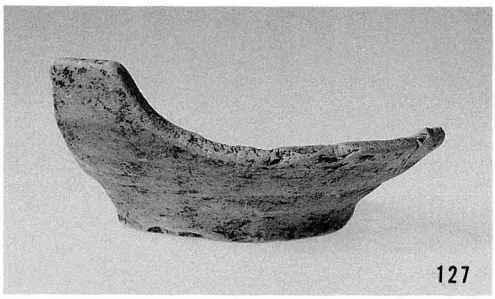


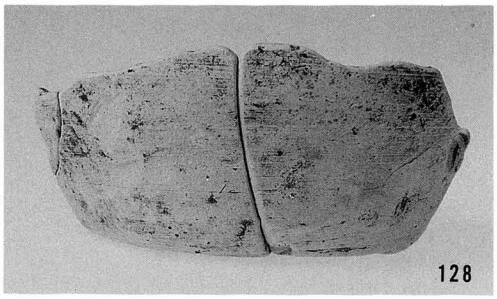
出土遺物 8

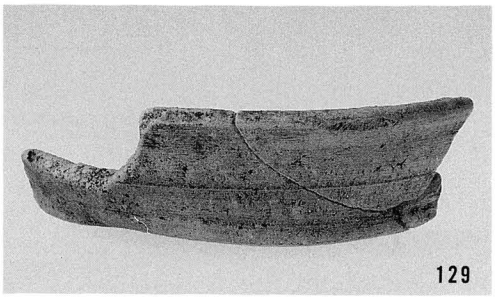


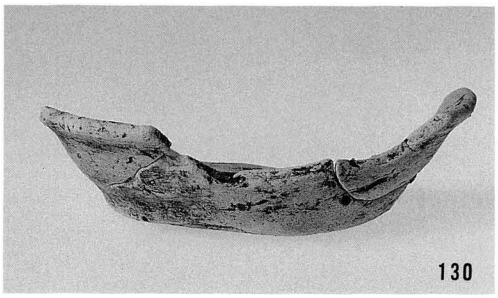


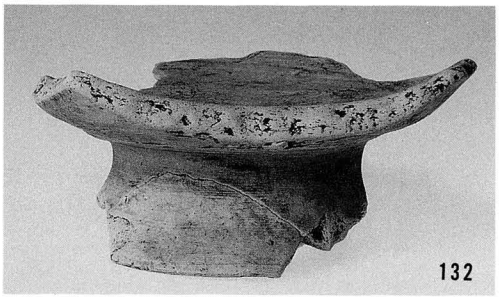








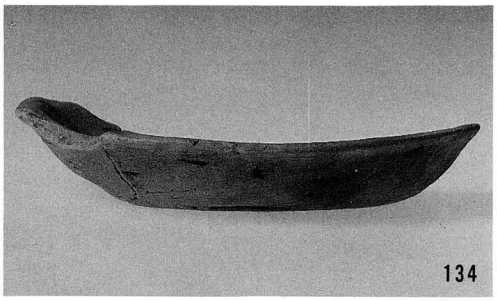


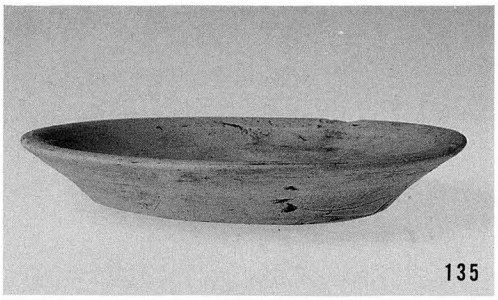


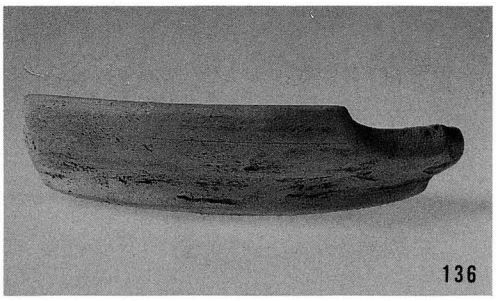
出土遺物 9

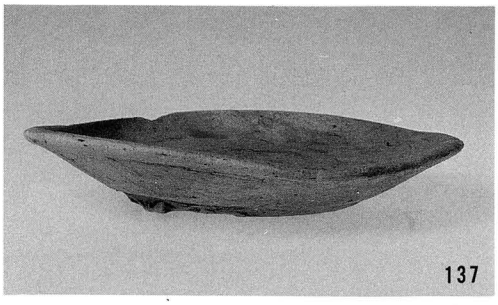
図版50

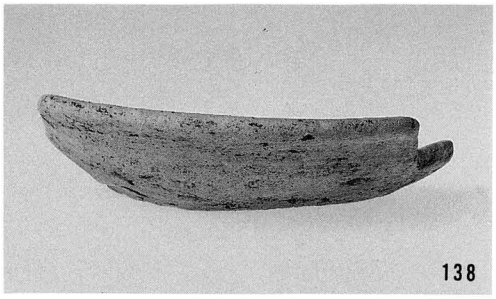
133

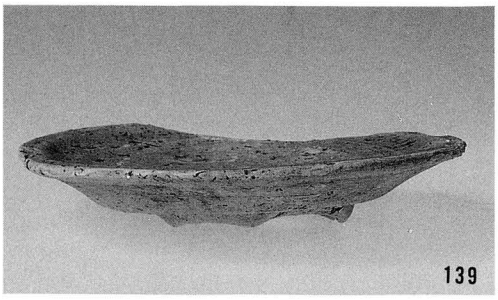

134


135

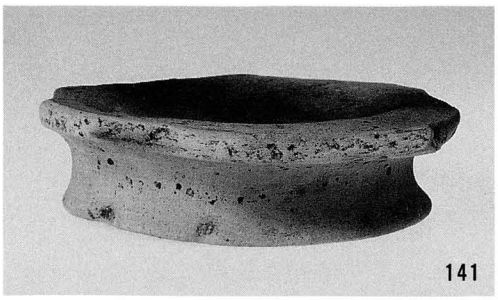

136

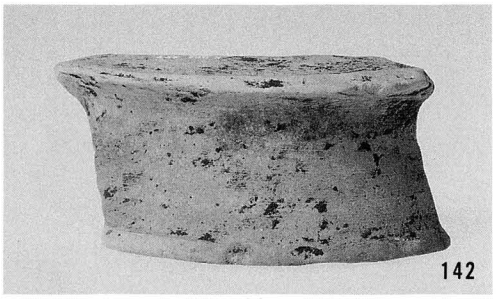

137


138

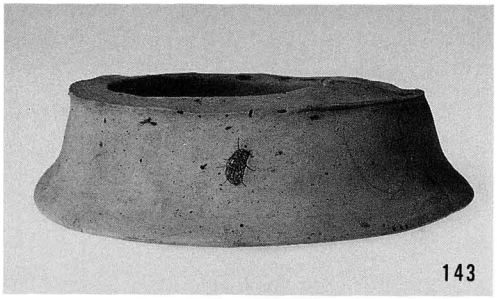

139

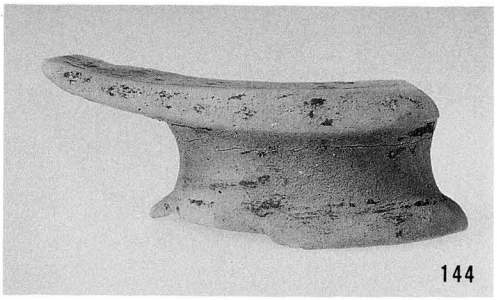
140


141

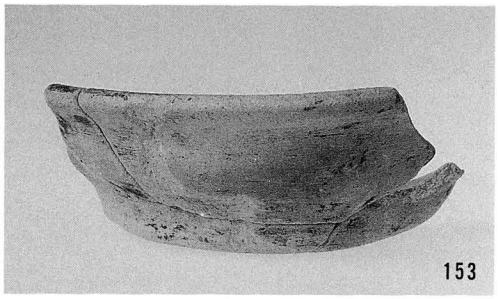

142

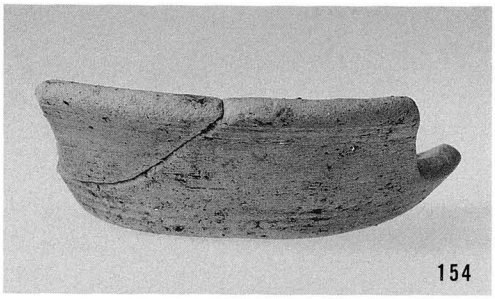
出土遺物10


143

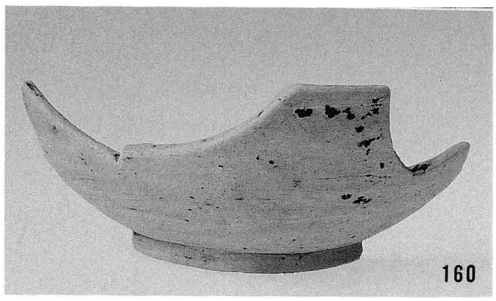

144

145

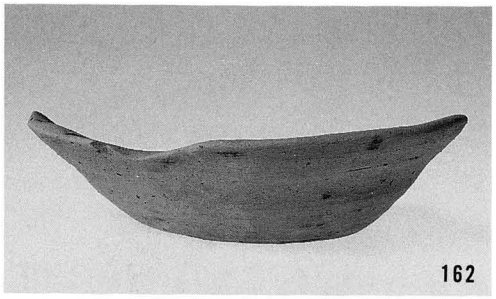

153

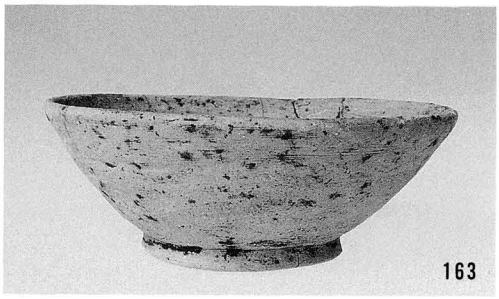

154

155


160

161


162

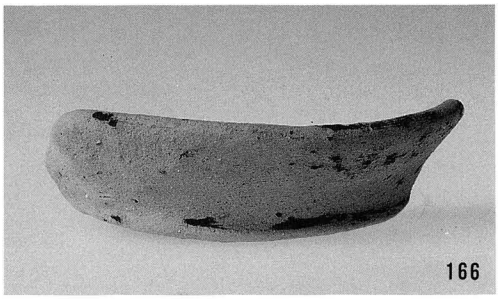

163

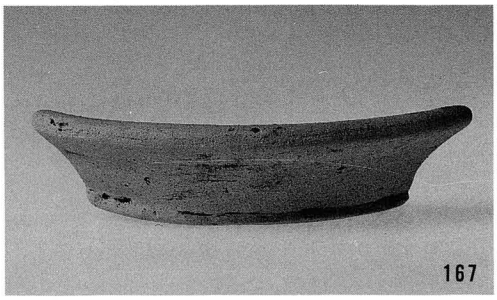
出土遺物11

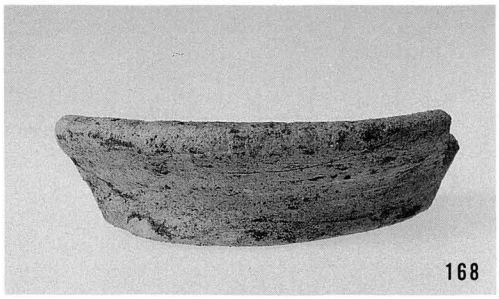
図版52

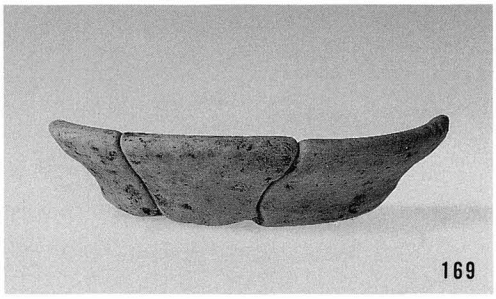
164

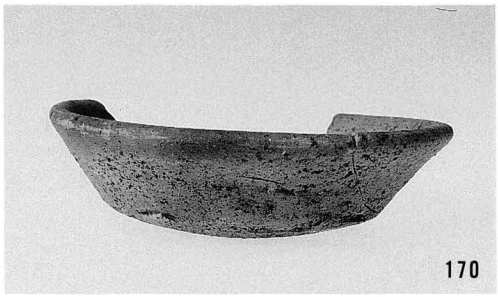
165

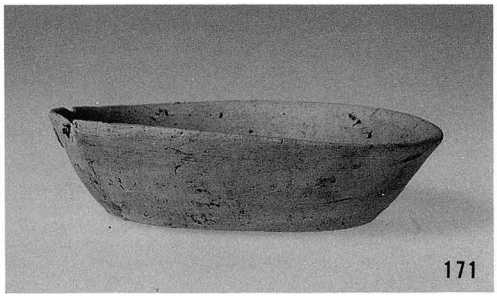

166


167

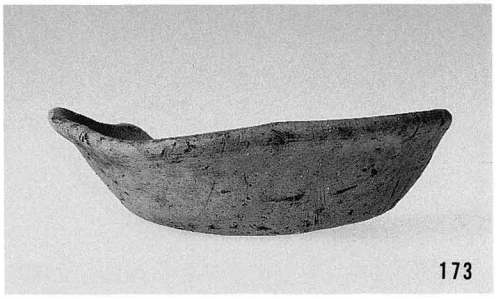

168


169


170

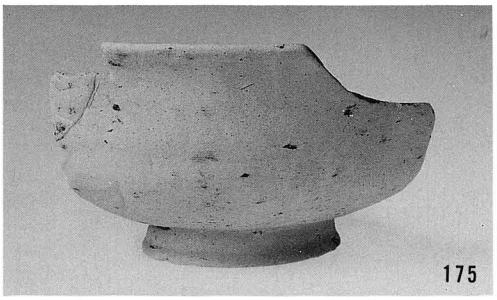

171

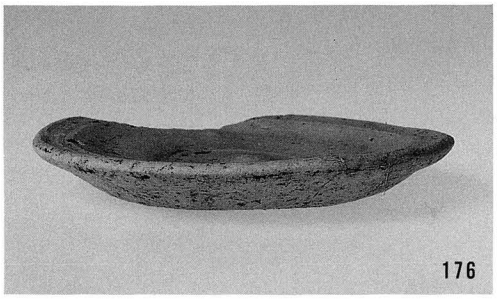
172

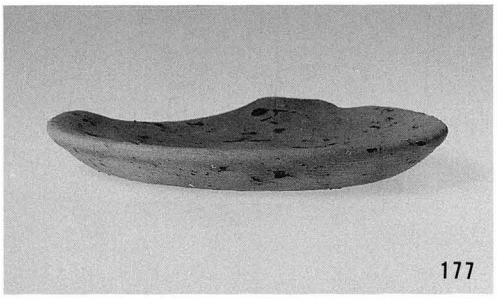

173

出土遺物12

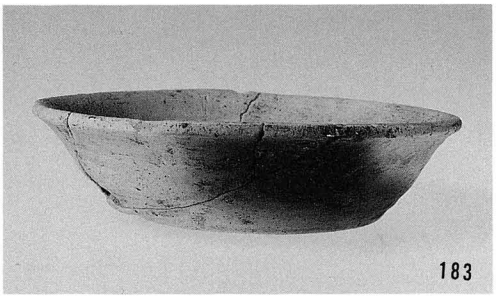
174

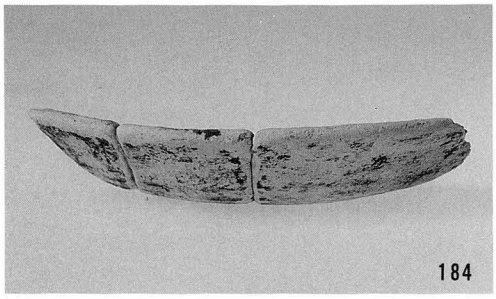

175


176


177

178


183


184

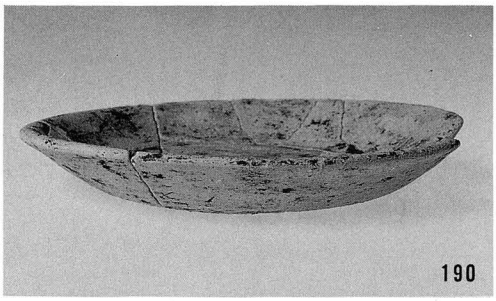
187

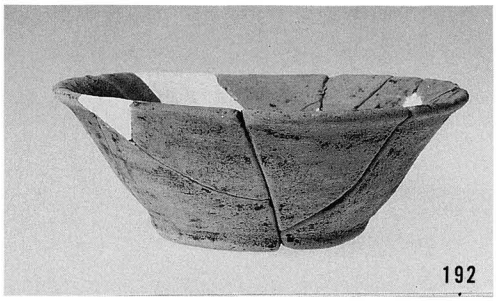
188

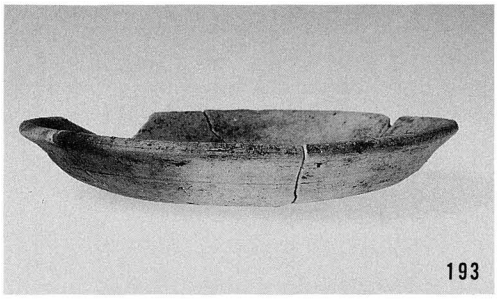
189

出土遺物13

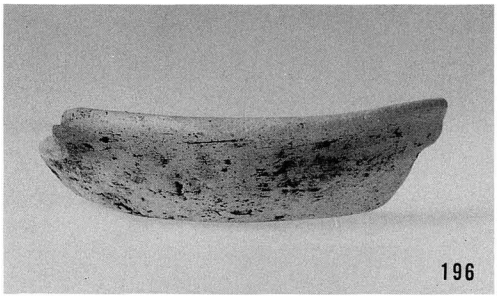
図版54


190

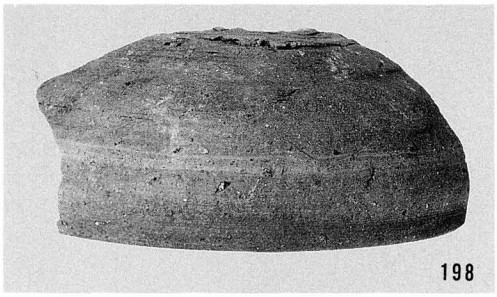

192

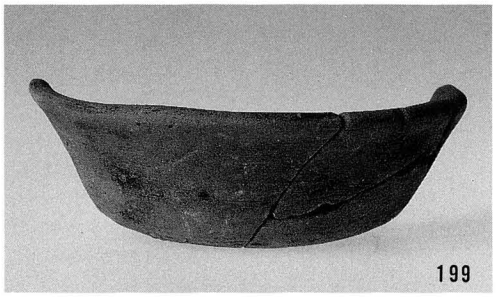

193

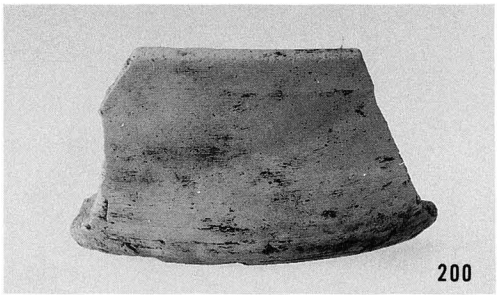
195

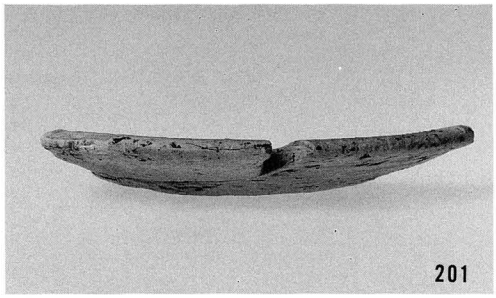

196

197


198


199


200


201

出土遺物14

高知県埋蔵文化財調査報告書 第26集
土佐国衙跡発掘調査報告書
第　9　集
—金屋地区の調査—
平成元年３月31日
編集・発行　高知県教育委員会
(高知市丸の内1－7－52)
印　　刷　共和印刷株式会社